
エピローグ

イチハヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エピソード

【Nコード】

N7237W

【作者名】

イチハヤ

【あらすじ】

勇者として異世界召還された女子高生がなんとか元の世界に帰る
うとする話。

prologue

グオオオオオオッ

！！

その日、世界中に魔竜王グリストフェレスの咆哮が響き渡った。

「ああ、やっと」

そして世界中を震わせたその最期の叫びを、一番間近で耳にした少女の胸に走るのは、歓喜。

ようやく、だった。

一年 それは何十年にも渡り、この魔竜が率いる軍勢に苦しめられた民衆にとっては、驚異的な速さだったろう。

だが、少女にとってはこの一年こそが長く、苦しい道のりだった。

これまで、どれほどの血を浴びただろう。

どれほどの人の死を見てきただろう。

どれほどの涙を、流したろう。

どれほど いや、やめよう。

過去を振り返る必要は無い。もう、終わったのだ。魔竜は倒した。王を喪い散れ散れになった魔物は最早烏合の衆。

もう、勇者の 私の力は必要ない。

世界を脅かすものはなくした。だから、もう、私は

「やっと、帰れる」

視界が不意に暗くなる。

遠くで名を呼ばれた気がした。だが、少女は、早坂理央はやさかりあつはその声に
答えることなく、意識を手放した。

この一年を、夢で終わらせるために。

「すみません、ムリです」

「は」

思いも寄らぬ答えを聞き、理央はぼかんと口を開けた。

今、コイツはこの、自称神はなんと言った？

数秒間があいてから、理央は眉間に皺を寄せこの一年で随分と迫力を増した睨みを効かせて目の前の白く丸い発光物体に問い直す。

「ごめん、もう一回言ってくれろ？」

自称でも神に対して随分砕けた物言いかもしれない。だが、理央は目の前の発光物体をどうしても敬う気にはなれなかった。まあ理央が今いるこの真つ暗な空間には自分と彼(?)しかいないので咎められる心配もないから構わないだろう。

自称神がぴこぴここと忙しく点滅を繰り返す。どうやら焦っているらしい。

「あの、だからですね。貴女を元の世界へと還すことは　　ひっ！すみませんすみません！」

「謝らなくていいから、ちゃんと説明して！」

「はいっ！」

理央の周りを発光しながらつろちよると飛び回るのが鬱陶しくて怒鳴ると、自称神は怯えたように身を伸び縮みさせ、泣きそうな声で返事をした。相変わらず神の癖に情けなく、その姿はどこか小動物

めいている。

「…………約束、したわよね」

冷静に、冷静に　　そう自分に言い聞かせても、口から出たのはいつもより幾分か低い声だった。案の定、萎縮した声が返ってくる。

「はい…ですがそのう…………あの時とは事情が変わりまして…………」
「事情って？」

「貴女は、召還された勇者として一年を私の世界で暮らし、そして魔竜を見事討伐してくれました」

自称神の言葉に、理央はうんうんと頷く。

元々理央は、魔竜に虐げられていたあの世界の住人ではない。現代日本にいる、ごくごく普通の女子高生だ。

当然、こちらに来るまで剣を持ったことも魔法を使ったこともない。そんな彼女が何故異世界で勇者なんて職業をやっていたかと言えば、十中八九今目の前にいる物体のせいだろう。

彼はある日突然理央の夢の中に現れて、こう宣ったのだ。「勇者になつて、私の世界を救ってください」と

その時は所詮夢と取り合つてなかったのだが、翌日目を覚ませばそこは異世界で、気付けば勇者として祭り上げられて今日にまで至る。

理央が言った約束、とはその後にも色々あつて、自称神と交わしたもののことだ。

『魔竜を倒したら、元の世界に帰してもらおう』

この約束のために、理央は今日まで余所見することなく頑張ってきたのだ。

魔竜を倒したのは、自称神に与えられた加護という名のチート能力によるものが大きい。理央自身も決して膝を折ることをしなかったこそ、ここまで来れたのだと思っている。なのに

「どうして」

ようやく帰る条件を満たしたはずの理央に自称神が突きつけたのは、「無理」という二文字。

理央の心の中では、「どうして」「何故」が吹き荒れていた。

「……貴女は、私の世界に影響を与えすぎたのです」

「影響？」

「ええ。主に、貴女を好ましいと想う人　つまり、貴女を失いたくないと願う人が私の世界に多くいて、もし、貴女が元いた世界に還ってしまえば、彼らの悲しみが世界を歪めるでしょう」

「なに、それ……私のせいってこと？」

話の意味を理央なりに汲み取って吐き捨てる。自称神は悲しそうな声で「いいえ」と答えた。

「責は考えが甘かった私にあります。貴女は、世界を救った救世主。その貴女を、私の子らが慕わないわけがないのに……」

やるせなさを含む声。彼も約束を違えることを本当に申し訳なく思っているのが窺えた。

「ねえ、世界が歪むって具体的にどうなるの？」
「世界に悲しみが満ちます。人々だけではなく、動物や精霊、世界に生きるすべての生命が悲哀に沈み、不幸を呼び、それは終わることなく やがて、他の世界にまで影響を及ぼすでしょう。
……もしかしたら、貴女が生まれた世界をも、巻き込むかもしれない
せん」
「なっ……」

絶句する。

どこかで自分には関係ないと思っていた。自分が帰ったあとこの世界がどうなるかと知ったこっちゃんいとすら。

自称神は、理央のそんな考えを見透かしていたのだろうか。

「とにかく、私も解決策を考えますので、貴女はもうしばらくこちらで過ごしてください」

「そんな……」

ようやく終わったと思ったのに。

どうやら、夢はまだ終わらないらしい。

「　　さま、リオウさま」

今にも泣き出しそうな声が理央の名を呼ぶ。

この声は　　セイのものだ。

重い瞼を持ち上げると、眼帯をしていない方の瞳に涙を一杯に溜めた、隻眼の少年が理央をのぞき込んでいた。

「セイ……」

少年の名を理央が呼ぶと、彼はくしゃりと顔を歪めた。
ぼたり、頬に彼の涙が降った。

「よかった……っ、もう、目を覚まさないのかと思い、ました……」

そうやって力の限りに理央を抱きしめるセイの肩越しに、炎のように赤い空を見て、理央はまだ自分が魔竜王との決戦の地であった力ーリーステルシャに居ることを知る。

（そうだ……まだ、こっちにいることになったんだ）

自称神との会話を思い出す。

……ようやく、帰れると思ったのに。

「……………」

「リオウ様？　つまさか、どこかお怪我を?!」

「いや、大丈夫。……心配かけたね」

黙り込んだのを勘違いしたセイが顔色を変えるのを宥めて、理央は起き上がった。ついでに体に不調がないか確認しておく。うん、大丈夫みたいだ。

「セイは、怪我してない？」

「あ、はい…僕は後ろにいただけですから」

しゅんとした様子のセイの頭をくしゃりと撫でる。

「ここまで来ただけでも十分凄いことだよ」

なにせ理央がいたのはこの戦争の最前線だ。軍人でもない彼がここにいること自体、奇跡みたいなものだろう。

頭を撫でられたセイは、嬉しそうに隻眼を細める。

「……………」

理央は、そんなセイを見て目を伏せた。

『理央を失いたくないと願う人物』自称神にその話を聞いた時、真っ先に浮かんだのはセイと、彼の双子の弟レイの顔だった。

彼らは、元奴隷だ。

ある貴族に飼われ、虐げられていたところを理央が助けたことがきっかけで、以来彼らは理央につき従っている。

彼らにとって理央は、魔竜を倒す前から救世主だったのだろう。

向けられる純粹な敬慕の念が、今は痛かった。

「とりあえず、軍の人達と合流しなきゃね」

理央は翳りを見せた思考を振り払うようにそう言った。
ボスを倒してもここが敵陣ということに変わりはない。自称神が解
決策とやらを探してくるのを待つにしても、それまで安全を確保で
きる場所にいた方がいいだろう。

「……やっと、終わったんですね」

セイが呟く。奴隷時代は屋敷から出ることは許されなかった彼にと
って、ここまでの道のりは厳しいものだっただろう。

「うん……終わったね」

そう、魔竜は倒した。

理央は空を振り仰ぐ。カーリーステルシャの空はいつでも燃えるよ
うに赤く、地面は乾いた赤茶で、ひび割れが目立つ。草木の生えぬ
不毛の地。

人々はそう言っこの地を忌避するが、理央にはそれがとても美し
く見えた。

そういえば、こちらに来る前にこんな風景をテレビで見た気が
する。世界遺産とかの紹介をする番組で、夕日に照らされた時の風
景などそっくりだった。

だからだろうか。何故か、美しいのと同時に懐かしくも想うのだ。

「帰ったら海外旅行でもしようかな……」

英語のテストの度に「海外など一生行かない」などと言っていた頃
が遠い昔のようだ。

でも、異世界で勇者やることに比べたら、それぐらい軽いものだと今では思う。

「…行こうか、セイ」

「はい」

神に再び呼び出されるまで、しばらくはこんな風に故郷のことを思い出しながら、帰ったら何がしたいかのんびり考えるのもいいだろう。

もう、理央がやるべきことはないのだから。

魔竜を討伐した勇者が本陣へと戻ってくると、本陣の兵士達は皆歓声をあげて彼女を迎えた。

だが……

「凱旋……ですか」

眉根を寄せた勇者殿を見て、連合軍の参謀長であるウィルドは不思議そうに首を傾げた。

「ええ。魔竜が討伐された知らせは既に王都へと走らせましたから。今頃、皆勇者殿の帰還を今か今かと心待ちにしていることでしょう」

「はあ……」

どうにも気乗りしない様子だ。普通なら今頃、故郷へ帰れることや、褒美のことなんかで頭がいっぱいだろうに。

（あ、いや）

そういえば、彼女は異世界から召喚されたのだから、故郷はこの世界のどこにもない。

これから凱旋する、彼女を召喚したわが国ハイグレードも、彼女は1ヶ月やそこら滞在した程度なので里心など芽生えるわけがない。この年頃の少女にしては珍しくどこか冷めた性格の勇者殿は、眉根を寄せたまま口を開く。

「あの、それって行かなきゃダメですか」

「は？ まあパレードはなしにしても、とにかく一度王族の方や民の前に姿を現していただかないと」

「……そう、ですか」

勇者殿の黒い瞳が、諦めの色を帯びる。

その顔には、はっきりと「面倒くさい」と書いてあった。

魔竜討伐を成し遂げて帰ってきた勇者殿は、肩の力が抜けたように見えたがどうやらいらなところの力まで抜けてしまったように見える。

要するに無気力。

本陣に戻ってすぐの時も、兵士達の歓声に特に反応を返すことなくただ戸惑ったように眉根を寄せていた。

まあ、偉業を成し遂げたすぐ後だから仕方ないのかもしれない。ウィルドはそう結論付けた。

元々まだ若いのに鍛錬を積んだベテランの軍人のような雰囲気のある彼女だ。少女らしい反応を求めるところからして間違っている。

「分かりました。乗り物や食事などはそちらが用意してくださいませんか？」

「あ、はい、それは勿論。」

あの、兵も何人かつけたいのですが……」

「……なるべく少なく、お願いします」

「了承しました」

ため息混じりの声に、ウィルドは胸に拳をあて答えた。

彼女が来てからの一年、それまで魔竜の軍勢の侵略に怯えるばかりだった戦況は一変した。

圧倒的な力。そして、強い　強すぎる意志。

迷いなく敵に向かっていく姿に、まるで鬼神のようだと、さすが勇者だと人々は賞賛を口にした。

だが、彼女の今日までの軌跡をそれなりに近くで見してきたウィルドは、彼女に違う感想を抱いた。

まるで、死に急いでいるようだと。

勿論、死を恐れているのは魔竜に1人で立ち向かうことなど出来ないだろう。

その姿勢が兵士達を奮い立たせ、勝利へ導いたと言ってもいい。

しかし　ウィルドは、先ほどまでの勇者殿の様子を思い出す。

笑みをちらとも浮かべない顔。感情の起伏が少ない声。少女らしい、華奢な肩。

彼女と会話を交わす度、ウィルドの心に違和感がじわりと染み出してくる。

何かを間違えているような、そんな気がした。

そうか、ハイグレードに戻らねばならないのか。
理央は不思議な気持ちだった。

元々魔竜を倒したらずぐに元いた世界に帰してもらうつもりだったため、こちら側に未練など何もなかった。

そのため参謀長に「凱旋」と言われても「多くの人々が貴女の帰りを待っている」と言われても、理央の耳には他人事のように響いたのだ。

「どうしよう……」

誰もいなくなった天幕の中で1人呟く。

ぶっっちゃけ逃げたい。

王都に行くのはまだ構わない。だが 王城に行くのはどうしても避けたかった。あと神殿も嫌だ。

理央はああいった貴族や王族といった人間が集まる場所を苦手としていた。

全員が全員そうというわけではないが、ああいう偉い人というのは、どうも他者を見下しているところがある。

まあ実際偉いんだろうけど。しかし人類平等を唱う世界で育った理央は伯爵だの侯爵だの言われてもいまだに違いがよく分かってない。

「ようリオウ！生きてるかー」

なんとか逃げる方法はないかと半ば現実逃避のように頭の中で策を

巡らせていると、天幕の扉代わりの布がばっさあ！と勢いよく開く。同時に飛んでくる大きな声。顔を見なくても理央にはそれが誰か分かった。

「將軍……」

小柄でひよろつとした参謀長のあとに見ると、余計に大きく見える山のような体躯。また髭剃りを怠っているのか熊によく似た顔は、毛むくじやらで、更に熊へと近付いていた。

ハイグレード国の將軍、ロドル・ゴーラント。それが彼の名だ。

その容姿から親しみだったり蔑みだったりを込められて『熊將軍』とか『動く山』とか呼ばれる彼は、何故か小脇にセイを抱えていた。

「久しぶりだなありオウ！どこも怪我してないか！飯くつたか！酒呑もうぜ！」

「……怪我はしてないしご飯は食べた。あと、酒は呑まない」

相変わらず豪快で空気を読まない人間だ。理央はため息を吐く。

正直彼のテンションは苦手だが、色々世話になったこともあるので無碍にはできない。

「で、なんでセイを抱えてるの」

「ん？ ああ、なんかそこでウロウロしてたから連れてきた」

セイも彼には恩があるため強く出れないのだろう。大人しく抱えられていたセイのことを突っ込むと、將軍は今気が付いたと言わんばかりにセイを地面に下ろした。「すみません。入っていいものかどうか分からなかったもので……」

別に悪いことなど何ひとつしていないのに謝るセイを見て、理央は、この子は將軍の馴れ馴れしさというか図々しさを少し分けてもらったほうがいいのではないかと一瞬本気で考えた。

4 (後書き)

国や人の名前は割と適当に決めています。

「それで、何か用？」

「おおそつだ。お前、一足先に帰るんだって？」

「ああ、凱旋のこと」

将軍が頷く。

ラスボスを倒したからといって、全軍が一斉に帰るわけにもいない。

戦争の後始末や、他国との話し合い、身動きの取れないほどの重傷者もいるため、参謀長の話では何隊かに分けて移動させるといふことだ。

そして、その先頭に立つことになったのが勇者　つまり理央だった。

勝利の興奮が人々から抜けられない内に、英雄を衆目に触れさせることで色々と利益に繋げようという魂胆らしい。理央のいた世界でも、大きな大会で功績を残したり、賞を受賞した人をやたらと祭り上げる光景はよくあることだったので、多分自分もそうだった扱いなのだろう。

まあ、理解できなくもない。

祭り上げられる方としてはあまりいい気分ではないが。

「いいなー。俺はまだ帰れねーんだよ」

「そうなの？」

「ああ、お前のあとだと。人数が多いから、時間もかかるだろうなあ」

こんなので祖国では、軍人の代表として下々の者から人気が高い

將軍なのだ、彼は。恐らく一番人数の多い隊を任されたのだろう。理央とはまた違った形だが、どちらも花形として扱われていることに変わりない。

一応軍人にとつては名誉あることなのだろうが、いいなあいいなあと子供のように繰り返す將軍には不満なようだ。

「俺も早くティナに会いてえなあ」

「ああ……」

どうやら不満はそこにあるらしい。

ゴラント將軍は、国中に知れ渡るほどの愛妻家だ。理央も彼の奥さんと何度か面識があるが、夫婦で並ぶと正に美女と野獣。金髪碧眼の女神のような美貌を持つ女性だった。

聞くところによれば、彼女が將軍に嫁ぐ際に何人もの男性が嘆き、將軍に刺客を送り込んだり自ら決闘を挑んだりして全て返り討ちに遭うなんてことがあったようだ。

ああ、なんとなく將軍が訪ねてきた訳がわかってきたかも。

「……ついでで良ければ、伝言でも承るけど」

「本当か?!」

理央がぼつりと提案すると、將軍が顔を輝かせる。

どうやらこれが狙いだったようだ。彼は図々しくせに時々何故か回りに構わないけれど。

別に構わないけれど。

あらかじめ手紙でも書いてきたのだろうか、いそいそと懐を探りだす將軍を横目に理央はじつと沈黙を守るセイを見る。

「途中で立ち寄れるかどうか分からないから、もしかしたらセイに

頼むことになるかもだけど、いい？」

「ああ、勿論！」

王族とか貴族の面々にはしきたりや暗黙の了解が山ほどある。

王族を差し置いて將軍の家に立ち寄ることは失礼に当たるかもしれないし、身分が心許ないセイを王城に連れて行くことは躊躇われる。

ならば理央が城にいる間、セイには將軍の屋敷に身を寄せてもらえばいいだろう。將軍の奥方は、見た目こそ繊細なガラス細工のような女性だが、中身は將軍に負けず劣らず豪快だ。それに

「レイと会うのも久しぶりだろうし、いい機会だからゆっくり休みなさい」

將軍の屋敷には、既にセイの双子の弟、レイが世話になっている。

將軍の家族を安心させることもでき、久々の双子の再会も果たせるこの提案は、とてもいい案に思えた。

「……はい」

賛同したセイの表情は、あまり晴れやかとは言いがたかったけれど。

「報告します！」

勇者様の活躍により、魔竜討伐、成功しました！」

謁見の間に飛び込んできた兵の言葉に、その場にいた一同は数拍の間静まり返った。

「それは、真か……？」

玉座に座るのも一苦労といった感じの老王が、玉座から腰を浮かし嘔れた声を出す。

陛下が立った！

長く続くハイグレード王家でも最長の在位期間の記録を今なお更新中の王は、近頃では誰かの助けを借りねば1人で立つこともままならぬ状態にあった。だが、今王はふるふると震えながらも立ち上がっている。

そのことにその場にいた者は感動を覚える。そして、文字通り陛下を奮い立たせた知らせの存在を思い出した。

一瞬王へと向いた意識が自分に戻ったのを感じたのか、報せを持ってきた兵は敬礼の形を取る。

「はっ！ 我らが連合軍の勝利です！」

「……そうか。よくぞ……」

高らかな勝利の宣言に、目頭を押さえる王。周囲ももたらされた福

音に一斉に沸き立つ。

勇者や連合軍への賛辞を口にする者、王と同じように目頭を押さえ
る者、放心する者 人々が様々な反応を示す中、彼は、拳を
強く握りしめた。

宝石のような煌めきを閉じ込めた蒼い瞳を細め、彼はまるでこれか
ら戦地に赴くような顔で低く、彼女の名を呼んだ。

「リオウ……」

やり遂げたのか。

形の良い唇から放たれた名は、誰にも聞き咎められることなく空
気に溶けていった。

7 (前書き)

R 1 5 ?

くすくす、くすくす

嘲りを秘めた密やかな笑い声が、回廊に、理央の鼓膜に、響く。

「も大変ですわね。あんな野蛮な娘を相手にしなければならぬなんて」

甘ったるい声。理央の耳に障るそれは、きっと彼にとっては心地良いのだろう。

くつくつと低く笑いながら、彼の声が応える。

理央の知らない、冷酷で、その癖とろけるような熱情を孕んだ声だった。

「これも仕事だからな。まあ、存外御し易くて助かった」

「ええ　　本当に、馬鹿な娘」

くすくす、くすくす。密やかにさざめくような笑声は、やがて女の嬌声に変わっていく。男女の荒い息遣いに、理央の脳がぐらぐら揺らぐ。

「
」

彼が女の名を呼んだ。知っている名だった。いつも、勝ち誇ったような、嘲るような視線と笑みを理央に向けていた女性。

ああ、そういうこと。

頭がぐらぐらする。もう何も聞きたくない。なのに、彼女は勝利を宣言するかのように、高らかに叫ぶ。

「ああ 殿下あっ」

もう、なにも聞きたくなかった。

「……………」

目が覚める。寝間着のシャツが、汗でびっしょりと濡れていた。

「気持ち、悪い……」

荒く息を吐きながら、理央は仰向けから俯せの姿勢をとった。胃から吐き気がこみ上げてきたが、特にもどすことなく、唾液が口端を零れただけだった。

（落ち着け……）

しばらく呼吸を安定させることだけに集中する。ここは港町、ハイグレード港の宿屋だ。王都ハイグレードからは目と鼻の先であり、明日の昼には王都に入るために今日はここで休むことになった。

(ああ　　そうだ、明日)

明日、王都に入り、王に謁見するのだ。
だからかもしれない。あんな夢を見たのは。

僅かに落ち着きを取り戻した理央は、寝台脇に置いてあった水差しをとり、コップに水を注いでそれを一気に飲み干した。
ぐいっ、と口の周りを服の袖で拭う。

「はっ……」

漸く人心地つけた気がした。

ついでに汗で張り付くシャツも脱ぎ捨てる。誰の配慮か、宿屋に部屋をとってもらったのは理央だけで、理央とこの部屋の見張り以外は、広間で野営をすることになっているため部屋には理央1人だった。

よかった、と思う。

これが野営した時であったなら、取り乱した状態を誰かに見られたかもしれない。

こんな姿を、誰にも　　特に理央を勇者と崇める人達には見られなくなかった。

「私は、勇者」

寝台の上でうすぐまりながら、自分に言い聞かせる。

理央は、早坂理央は魔竜を倒すために呼ばれた『勇者』。
この世界の人々が望むのは、世界を救ってくれる勇者だ。間違っても早坂理央という女子高生ではない。

理央の、くだらない小娘の姿など、誰にも見せてはいけない。
誰も、そんなものを必要としないのだから。

8 (前書き)

不快な表現があります。ご注意ください。

それは、理央がハイグレード国に召喚されてまだ間もない頃。その頃の理央は王城に滞在しており、右も左も分からず心細かった自分に、なにくれと声をかけてくれたのが彼だった。

ヴェリオス・リア・ハイグレード。
ハイグレード国の王子殿下だ。

濃厚な蜂蜜のような輝きを放つ金髪と、宝石のような煌めきを閉じ込めた蒼い瞳をもつ彼は、物語の中の王子様そのものだった。甘いマスクで微笑みかけられ、優しい言葉を囁かれ 異性に免疫などない理央は、気付けば彼に恋心を抱いていた。

今となつては、それは憧れが大半を占める恋だったと思う。

けれど当時の理央はこれが恋なのだと思ひ込み、彼の言動に一喜一憂していた。

彼のために、世界を救おうとすら思いはじめていた。
彼と国の思惑になど気付かずに。

「も大変ですわね。あんな野蛮な娘を相手にしなければならぬなんて」

その日も、ヴェリオスの姿を探して未だになれない場内をさまよっていた。

聞こえてきたあまり耳障りがよいとは思えない声に、理央は反射的に身を隠した。

「これも仕事だからな。まあ、存外御し易くて助かった」

続いて聞こえてきた声に、盗み聞きはいけないと踵を返そうとした足が止まる。

彼の、ヴェリオスの声だった。

いつも甘いばかりの声はどこか冷酷な響きをもって回廊に木霊する。野蛮な娘　城内の、特に貴族達がそう評する人物を、理央は知っていた。

「ええ　本当に、馬鹿な娘」

わたしのこと、だ。

やがてはじまった情事が奏でる音から逃れるように、理央は自室に戻ってベッドに潜り込んだ。

その時はまだ、王子と彼女がなんの話をしてたのか正確に理解していなかった。

だが、王子にはかり向けていた目を他にも向ければ、その内容はすぐに知れた。

昔から世界が窮地に陥ると、この国は異世界から勇者を召喚した。しかし、彼らの中にはやる気もなく、ただただ故郷に返せと嘆くばかりの者もいたらしい。

当たり前だ。彼らにとって此処は異世界である上、突然勇者なんて重荷を他人に押し付けるような人達を救おうだなんて余程のお人好しでないとい引き受けないだろう。

しかし勇者に代わりはないため、国の方もいそいそですかと還すわけにはいかない。そして彼らは、ある方法を思いついた。

勇者に見目麗しい異性をあてがい、籠絡させる。

あてがわれた異性を勇者が愛せば勇者にはこの世界を護る理由ができる。

『人』で縛り付けること。

それがこの国の人々が考えた世界を救う方法だった。

そして、その様式は当然のように今代まで踏襲され、ヴェリオスにその役がまわってきた。そういうことだった。

知ってしまったえば理央は、城に居ることは出来なかった。

城内の人間すべてが自分を嘲笑しているように感じて、誰のことも信じられなくなった。

居場所を失った理央は、衝動のままに城を飛び出し、王都を出て、襲いかかってくる魔物達相手に覚えたばかりの剣と魔法を振り回した。

「……約定を」

神の声が聞こえたのは、同朋の血の海に恐れをなした魔物が引き、その海の中で理央が眠りに落ちた時のことだ。

はじまりは、純粹なものだった。

時の勇者と当時のハイグレード国の姫が恋に落ちた。

ただ、それだけのこと。

彼の勇者はその役目を果たし、その後も騎士団長となり国を護った英雄として語り継がれている。

彼らは、死に引き裂かれるその時まで仲睦まじい夫婦となった。

いつからだろう。我が子らがあのように歪なことをしはじめたのは今まではそれでもよかった。わたしの選んだ彼らは、皆純粹な強き心を持っていたから、利用しようと思いついた我が子らも、いつしか彼らを本当に好きになっていった。だから見てみぬふりをしていった。

だが

「……………くっ、…っふ……………」

うずくまり、肩を震わせて泣く彼女。

嗚呼、夢の中でまで泣くのか。

わたしはゆっくりと彼女に近づく。その頭を撫でてあげたかった。肩を抱いて、慰めてやりたかった。

だが、彼女はそんなことを望んではいないだろう。欲しいのは

「……………約定を」

彼女の肩が、びくりと揺れる。そろりと上がった視線は、怯えに満ちていた。

そう、彼女に必要なのは慰めなどではない。

「魔竜を倒せば、貴女を元の世界に還してあげられます」

「……………本当？」

「はい」

この姿では、頷いて見せても彼女には伝わらないだろうと声に出す。

ああ、彼女の瞳から流れる涙の、なんと美しいこと。

何故、我が子らはこんなことにすら気付かないのか。いや、きっといつかは気付くのだろう。そして嘆くのだ。気付けなかった自分を。

悔やむがいい。

どろりと、黒いものが溢れ出し、空間がそれに呼応するかのよう闇を濃くする。

嘆き、悔やみ、我が身を呪えばいい。

わたしが選んだ彼女を傷つけた罪、その身をもって知れ。

神が慈悲深い生き物などと、
一体誰が決めた？

9 (後書き)

神までヤンデレ化。

初登場の時と全然性格違う感じですが内心はこんな感じ。あれは勇者向けの顔。

神からしてみればあれだけ落ち込んでいた勇者が元気に怒ったり噛みついたりしてくるのが嬉しくて仕方ないのです。

王都の門を守る兵士達に敬礼で迎えられる中、理央が馬で門をくぐった途端、爆発のような歓声が湧き起こった。

「勇者様だ！」

「勇者様が帰還なさったぞ！」

「勇者様、万歳！」

正門から城へとまっすぐに続く道の両脇には、勇者一行を一目見ようと民衆が群れをなしていた。

わあわああと勇者を見て思い思いに叫ぶ者。花の雨を降らせる者。理央は馬が興奮しないよう宥めながら、慎重にその中を進んだ。

馬上にいるおかげで、人々の顔がよく見えた。大人も子供も皆、笑顔で理央に手を振っている。

何故か、視界がぼやけた。

「……………」

「勇者殿、余り速度を落とされては……………」

「え？」

理央の横に馬を寄せてきた兵が、理央の顔を見て言葉を失う。どうしたのだろうか。余りにも顔を凝視するもので右手を顔にやると、頬が濡れていた。

泣いていたらしい。

「あ……ごめんなさい」

「ついえ、こちらこそ申し訳ありません。女性の顔を凝視するなど……」

慌てたように目を逸らす兵は、確かカーウエル隊長と呼ばれていた。参謀長の信頼も厚く、この隊の指揮を任された人間だ。

「余り速度を落とされませんよう、お願いします」

「はい、分かりました」

改めて注意され、理央は手綱を握り直す。理央の馬となっている白馬が、ぶるぶると鼻を鳴らした。そのまま元の位置に下がるかと思いきや、カーウエル隊長は理央に話しかけてきた。

「勇者殿……ありがとうございます」

「は？」

しかもそれがされる覚えのない謝辞だったもので、間抜けな声が出てしまう。だがカーウエルは真面目な顔を崩さず、目礼した。

「私達をお救いくださり、ありがとうございます」

「……いや、そんな」

言葉が見つからない。そんな風に言われたら、理央がこの国の人々のために頑張ったみたいではないか。理央は

「……今回の勝利は、皆さんの尽力のおかげです。私1人では、到底なし得なかった。

だから、そんな風にお礼など言わないでください」

理央は、自分のために頑張ったのだ。

『勇者の答え』をすらすらと口にしながら、理央は瞼を伏せた。

何故だか、胸が痛む。この痛みの理由は、なんだろう。

罪悪感か、それとも苛立ちか。

多分、気付かない方がいい類のものだと思った。

「勇者殿。ここにいる人々の中には、私の妻や娘もいます」

理央が胸の痛みから目を逸らそうと苦心していると、カーウエル隊長が尚も話しを続ける。

理央は黙って耳を傾けた。

「私の家族だけではない。連合軍の兵士達にも、帰るべき場所や待っている人がいる。

勇者殿、謙遜するのは構いません。ですが、その者達が貴女に贈る感謝の念を、笑顔を、どうか否定しないでください。

…私共の想いを、拒絶しないでください」
「……………」

苦しそくに顔を歪ませて、懇願するカーウエルに、理央まで苦しさを覚える。

『……貴女は、私の世界に影響を与えすぎたのです』

ああ、こういうことなのか。

セイヤレイ、一人や二人の問題ではない。王都で理央を迎えた人々だけでない、世界中の人が、理央を想う。その想いが、理央の足枷

になる。

ようやく、理解した。

そして、絶望する。

(……ねえ、)

空を仰ぐ。広がる青空は、故郷となにも変わらない。

その青空の向こうで、きっと自分を見ているのだろう神に、心の中で理央が問いかけた。

わたしは、どうしたらいいの？

答えは、当然のように返ってこなかった。

11 (前書き)

お気に入り登録や評価、ありがとうございます。

今回は隊長から見た勇者様を書いてみました。

娘がいるからだろうか。

リヒト・カーウエルの目に、リオウ・ハヤサカは華奢な身体に重すぎる荷物を背負わされた、哀れな少女にしか見えなかった。

凱旋した勇者を迎えた王都は、凄まじい熱狂に包まれていた。人々の感謝や、笑顔 全てが、斜め前で馬を歩かせている少女へと注がれている。そう思うと、胸に熱いものがこみ上げる。

『化け物』

少し前まで、彼女はそう呼ばれていた。

魔物の群れと相対しても息一つ乱さず、傷一つ負わずに全滅させる姿を見て、そう評したのだろう。

自分も彼女の能力をはじめて間近で目にした時、正直恐れを抱いた。一騎当千、どころの話ではない。

しかしそれは戦闘の時だけのことだ。確かにこの年頃の少女にしては肝が据わっていたし、独特の雰囲気を纏っていたが、彼女はリオウ・ハヤサカはただの少女だった。

弱音ひとつ吐くこともできない、不器用な少女。

「……………？」

一生忘れることなどできない光景に感動していると、不意にリオウの馬の足が遅くなった。

戦いでは一己大隊の力を発揮する彼女だが、馬術はそれに比べると少し心許ない。

何かあったのかと慌てて馬を寄せれば、彼女の頬に一筋の涙が流れていた。

「あ……………ごめんなさい」

「ついえ、こちらこそ申し訳ありません。女性の顔を凝視するなど……………」

涙を見て、ただただ美しいと感じたのははじめてだった。

吸い寄せられる視線を無理やり外し、謝罪する。失礼なことをしてしまった。

「余り速度を落とされませんよう、お願いします」

「はい、分かりました」

口にした注意は、取り繕ったように聞こえてないだろうか。

そつとりオウの様子を窺うが、リヒトの注意に従い手綱を握り直す姿はいたって真面目だった。

そう、彼女はとても生真面目な人間でもあった。

真っ直ぐと前を見据える凜とした横顔を、眩しい思いで見つめる。

きつと、リヒトとこうして近くで見つめることができるのも、あと少しだろう。

「勇者殿……………ありがとうございます」

だからだろうか、気がつけば胸の内に閉じこめていたはずの想いを、口にしていた。

突拍子もない言葉は、案の定リオウに理解されずに彼女は虚をつかれたような顔になる。だから、リヒトはもう一度同じ言葉を繰り返した。

「私達をお救いくださり、ありがとうございます」

もう一度、万感の意を込めて。この場にいる全員の思いと同じ言葉を。

ずっと、言いたかった。この世界に来てくれたこと、自分達と共に戦ってくれたこと。

なのに言うことが出来なかったのは、こうして彼女が戸惑った顔をするのを、なんとなく理解していたからだろう。

「……今回の勝利は、皆さんの尽力のおかげです。私1人では、到底なし得なかった。

だから、そんな風にお礼など言わないでください」

ああ、やはり。

『勇者』として答える彼女に、リヒトは悲しくなる。

人々が彼女を求めれば求めるほど、彼女は『勇者』という殻に閉じこもってしまう。

分かっている。周りの期待が、重圧がそうさせたのだ。

確かにリヒトを含む連合軍は、今回の戦の勝利に貢献しただろう。

だが、それも彼女の存在があつてのことだ。

魔物の群れに恐れをなすことなく、先陣をきつて向かっていくリオウに、当初陰で彼女を「化け物」呼ばわりしていた兵士達も、いつの間にか彼女を畏怖ではなく尊崇の目で見えるようになった。

彼女がいたからこそ、自分達は生きて帰ることができたのだと、連合軍の兵は皆知っていた。

そしてそれは強大な力によるものではなく、彼女が彼女であつたからこそなし得たことだとも。

勇者など、彼女の肩書きの一つにすぎない。

(きっと、貴女は知らないのだろう)

我々の想いを。

ならば少しずつでもいい。彼女が、いつか受け入れてくれる日まで自分達が想いを伝え続ければ、あるいは。

「勇者殿。ここにいる人々の中には、私の妻や娘もいます」

そうして、リヒトはゆっくりと語りはじめた。

どうか、拒絶しないでほしい。ただそれだけを、子供のように願ひながら。

11 (後書き)

リヒトさんは妻帯者。

でも作者の中では今の所、男性陣の中ではダントツにいい男です。
いい旦那さん。

しかし性別問わずなら多分主人公が一番男前。

セイは馬を走らせ、理央より一足先に王都に入っていた。祭りの賑わいを見せる城下町に余所見することなく駆け抜け、セイが訪れたのは、ある一軒の屋敷。

赤レンガの壁を蔦が飾る、將軍の地位にいる人間が住む場にしては少しこじんまり印象のあるそこは、ロドル・ゴラント所有の屋敷である。

「セイ！」

呼び鈴を鳴らすまでもなく庭に出ていた夫人と子供達に見つかり、熱烈な歓迎を受けた。

「まあまあ、大きくなって！」

「セイだー！」

「リオウは？いつしょ？」

とても二児の母親とは思えない美貌のゴラント夫人がセイを抱きしめ、その周りを子供達がくるくる走り回る。セイはまず全く変わってないゴラント家の様子に安堵し、自分がここに来た経緯を説明した。

「お久しぶりです、クリステイーナさん。ゴラント將軍から手紙を預かったので、お忙しいリオウ様に代わり自分が届けに来ました」「まあそうなの。うちのバカが面倒押し付けてごめんなさいね。

ほら、立ち話もなんだし家に入って入って！ レイもきつと喜ぶわ！」

夫人に笑って促され、セイは屋敷の中へと入った。

+++++

「レイ、入るよ」

双子の弟が過ごす部屋の扉を、ノックしてから開ける。

「……セイ？」

部屋の主は、驚きをもってセイを迎えた。ベッドの上でまた本を読んでいたのだろう弟に対してセイは笑顔を浮かべる。

「ただいま、レイ」

「帰ってきたの？リオウ様も？」

双子の兄のことよりもまずリオウのことを気にする弟に、セイの笑顔が苦笑に変わる。

離れていても近くにいても、自分達にとってはリオウが至上的なことに変わりない。それを再認識する。

セイは寝台の縁に腰を下ろし、ゴラント夫人らにも話した経緯を繰り返した。

「將軍から手紙を預かって、僕だけ先に王都に入ったんだ。リオウ様ももうじき王都に入るはずだよ」

もともと、ここに来るのはかなり後になるだろうけど。

細かな部分は口にせずとも伝わったらしく、レイは人形のように整った顔を悲しげに歪めた。

「そう……戦いは終わっても、リオウ様は解放されないんだね」
「ああ………」

王城のある方向へと視線を向ける。そこにあるのは壁だったけれど、セイの脳裏にはしっかりと城の姿が浮かび上がっていた。

隻眼に浮かぶのは、はつきりとした嫌悪。

セイもレイも城に入ったことなどない。けれど、リオウのことを思えば 出会った頃のあの人と、その周りの状況を見れば、そこが良い場所であるとは到底思えなかった。

「……護らなきゃ、ね」

「そうだね。僕達が、リオウ様を護るんだ」

どちらからともなく、囁きあう。

これまでではリオウに護られるばかりでいたが、これからもリオウの傍にいたためにはそんなことではいけない。

そつと、手の平を合わせる。1日の殆どを家の中で過ごすために白くて細いレイの手と、リオウに付き従った半年以上の時間のおかげで日に焼け、ごつごつとしたセイの手。

「僕の足は動かないから、知識で」

「僕はレイの分も、リオウ様の傍で」

「あの方の、盾となり剣となる」

全ては、あのやさしい人のために。
半年以上前に立てた誓いを復唱した彼らは、そっくりな微笑を浮かべた。

どれだけ汚泥を被せられようが、世界中の人間に罵倒されようが構わない。
貴女が、そこにいてくれるなら。

「勇者、リオウ・ハヤサカ殿、入場！」

若干ハヤサカの部分が言いにくそうな侍官の声に続き、扉の前に控えた衛兵が手にした金属製の杖を打ち鳴らす。

そして、目の前で重い音を立てながら開かれていく扉を、理央はどこか他人事のような気持ちで見守った。

一年前も、こうして玉座へと続く赤い絨毯の上を歩いたっけ。限られた者しか歩くことは許されない赤い道を踏みしめながら、理央は思い出す。

あの時の理央は当然こちらの作法など知らず、謁見の間にいた一部の者は、そんな理央を人間社会に紛れ込んだ猿でも見たような目で見下ろしていた。

被害妄想と思われるかもしれないが、理央は実際に彼らが、野蛮な娘だなんだと陰口を叩いているのを耳にしている。

今の自分は、あの時の彼らの目にはどう映るのか。ふとそう思ったが、すぐに考えても無駄なことだと頭の中で処理される。

嫌悪されようが歓待されようが、どちらでも構わない。むしろ、理央の状況を鑑みれば嫌われた方が好都合のような気がした。嫌がらせをされるのはごめんだが。

多分理央は、放っておいてほしいのだ。

(……………つと、)

頭の中に気をとられて、所定の位置まで来ていたことに気が付き理央は足をとめ、跪いた。

段になっている場所から、三步下がった位置。それが、理央に許された距離だった。

煩わしいと、思う。

細々とした作法も、こういった場のために詭えられた、装飾過多な勇者の鎧も　すべて。

「……………顔を上げよ」

絨毯を見つめていた理央は、囁れた声に少しもつたいぶつてから顔を上げる。

壇上の王は、相変わらず玉座ではなく寝台の上で大人しくしておいでくださいと懇願したくなるような風貌だ。確か、理央の祖父より少し上ぐらいの年齢だったと記憶しているが……………それよりもっと年上に見える。

老けて見えるのは、個人の体質のせいか、環境のせいか　老王を見つめながらそこまで頭を巡らせた理央は、思いの外見つめすぎたことに気付いて慌てて視線を少し下にずらす。

余所見をしても不敬だが、真っ直ぐ見つめすぎても不敬に当たる。本当に七面倒なことだ。

「リオウ・ハヤサカ。

そなたの此度の戦での活躍、まことに見事であった」

声量が控えめな王の言葉は、王の言葉を聞き漏らすわけにはいかない周囲によって、他の音を退ける効果を持つ。

しんと静寂を保つ謁見の間に、陛下の声が響いた。

「そなたは我が国だけでなく、世界をも救ってくれた。まずは、そのことに謝辞を」

バツという音と同時に、王のそばに控える宰相をはじめとする臣下達、その両側に並ぶ貴族達、そして、衛兵達が一斉にそれぞれの最上級の礼の形をとる。

「ありがとう、リオウ。そなたの名を、我々は子々孫々の代まで語り継ぐことだろう」

重そうな瞼の奥にある青い瞳で王はまっすぐに理央を見下ろし、謝辞を述べた。

「そして、その働きを評してそなたに褒美を与えよう」

その申し出には思わず「は？」と素で返しそうになり、表情を取り繕う。

(褒美……)

そういえば、ここに来るまでの道のりでもそのことは匂わされていた気がする。

全く気に留めていなかったが。

「なにか欲しいものはあるか？」

陛下に答えを促すように言われたが、理央は黙り込んでしまう。

欲しいもの　と言われてとっさに思いついたのは、元の世界に帰

してほしいという願いだった。だがそれはすぐさま却下した。

召喚の儀とは神殿の神官が執り行うものだが、彼らだけでは召喚を成すことはできない。

神官達の行う儀とは、勇者を直接召喚するものではなく、神へお伺いをたてるものだからだ。勇者を喚びたい神官達が儀を行うことにより神に願いが届き、願いが聞き届けられた場合のみ神が異界から勇者たりえる人物を連れてくることができる。

つまり喚ぶのも還すのも、最終的な決定は神が下すものなのだ。

そしてその神は現在、理央を帰すことはできないと判断している。更に、理央を帰すと両方の世界に悪影響が出ると言われている今は、下手なことはできなかった。

いつまでも答えを出さない理央に、謁見を見守っていた者達が小波のように揺れるのを感じる。

「 リオウ? 」

「 …身に余るお言葉、光栄に思います。 ですが、欲しいものと言われても… …すぐには思いつきません 」

周りの空気に押し出されるように、言葉を選び口にする。

とりあえずは保留にしておいた方がいいだろう。後回しにしたところで、欲しいものが出てくるかどうかは分からないが。

「 そうか。 まあ、急ぐ話でもない。 褒美の話はまた後日として、今日のところはゆっくりと休むがいい 」

「 ……ありがとうございます 」

目を閉じ頭を垂れる。

そうすることでより一層強く感じた一対の視線に、理央は気付かない振りをした。

14 (前書き)

今回かなり短いです。

「もういいんです」

そう言つて、彼女は微笑んだ。

「もう、いいですから」

血まみれの姿で、何もかもを諦めたような、突き放すような彼女の声と笑顔は、今でもヴェリオスの脳裏に焼き付いている。

「勇者、リオウ・ハヤサカ殿、入場！」

彼女がこの謁見の間に入ってきた瞬間、その場にいた誰もが、息を呑んだ。

王族も、貴族も兵士も関係なく、一瞬にして彼女に　　リオウに目を奪われた。

赤い絨毯の上を迷いのない、威風すら感じさせる足取りでこちらに歩んでくる彼女は、一年前にもこの道を歩いた少女とは別人のように見えた。

　　こんなにも、美しかったか？

ヴェリオスは立場も忘れてリオウをひたすらに目で追っていた。幸いにも他の者もヴェリオスと同じようにリオウに魅入っていたので、

誰に見咎められることはなかった。

真っ黒な髪と瞳、白い肌。背は少しのびただろうか？

髪が短かったこともあってか、少年のようにも見えた中性的な顔立ちには、女性らしいまろみ加味されたことでどこか危うげな艶を感じさせ、彼女のために詭えられた白地に金の装飾がなされた硬質な鎧も、彼女の女性的な身体の線をむしろ引き立てていた。そして、凜とした輝きが宿る黒い瞳は、見るもの全てを魅了するだろうと確信を持って言える。

戦女神がいるとすれば、きっとこんな姿をしているのだろう。ヴェリオスの呆けたような視線は、彼女が定められた位置で跪くまで注がれ続けた。

「……………顔をあげよ」

父王が、リオウへと声をかける。魔竜の死の報せを受けてから、父王の衰えていくばかりだった体はゆっくりと快復の兆しを見せていた。

囁れた声も僅かだが力を取り戻しているように聞こえる。

自分ももたらした変化を、果たして彼女は気付いているのだろうか。許しを得たりオウが、少しの間をおいて顔をあげる。

その視線をまっすぐに受けることができた父を、ヴェリオスは羨ましく思ってしまった。ヴェリオスは玉座の隣に立っていたのに、彼女がちらりともこちらへ視線を向けなかったせいだろう。知らない仲でもないのだから、少しくらいその瞳に自分を映してくれたとて構わないだろうに。王がリオウに言葉をかけるのを聞きながら、苛立たしいようなむずがゆいような、そんな気持ちにとらわれていた。

この気持ちはなんなのだろう。とにかく彼女に自分を見て欲しかった。

あの頃のように、馬鹿みたいに自分を目で追っていれればいいと思うのに。彼女はその日、ヴェリオスに何も与えることはなかった。

14 (後書き)

丸無視される王子様。

その日、ハイグレードの城は俄かにざわめいていた。

勇者として召喚された少女が、何を思ったのか城から消えた。そのことを知った者達は、まさか逃げ出したのかと騒然となったが、一夜明けてあっさりと戻ってきた彼女に城内は更に騒然となった。

彼女は全身血まみれになって帰ってきた。

聞いた話によれば、彼女は王都の周りの魔物を一掃してきたそうで、全身に纏う血の殆どが魔物の返り血だったという。ヴェリオスは、偶然にもその場に居合わせたのだ。

「勇者さま！ お怪我は……っ」

周りが遠巻きに勇者を見る中、女官長がリオウに走り寄る。

「……女官長、さん？ ごめんなさい、服、汚してしまっ……っ」
「っそんなこと、どうでもよろしい！ さあ、早くお部屋へ！」

血まみれの勇者を一喝し、野次馬を視線で蹴散らした女官長がリオウを連れて行くこうとするのを見て、ようやくヴェリオスの唇が動いた。

「リオウ……」

その時の自分は一体何を言おうとしたのだろう。それは、きっと一生分らない。

何故なら彼女の視線がこちらを向いた途端、ヴェリオスの体は再び金縛りにあつたように身動きがとれなくなったからだ。

ぞく、

戦慄というものを、ヴェリオスはこの時はじめて感じた。

「……殿下」

ヴェリオスの姿を見留めた理央の瞳が、すうつと色を薄くした。いつも少女らしい甘やかな色を含んだ瞳も、声も、あの瞬間から自分に向けられることがなくなったのだと、ヴェリオスは後に知る。

だがこの時のヴェリオスはリオウのそんな変化すら察知できずに、愚かにも彼女に手を伸ばした。

しかし、

「汚いですよ」

すい、とリオウはその手を避けた。

愕然と自分の手とリオウの顔を見たヴェリオスに向かって、リオウが微笑んだ。

今までに見たことのない笑みだった。

そして、今までで一番美しい彼女だった。

綺麗に弧を描いた唇を動かして、リオウは言った。

「もういいんです」

噛んで含めるように、誰かに言い聞かせるように。
それは、ヴェリオスにか彼女自身にか、今でも分からないけれど。

「もう、いいですから」
ただ、拒絶されたことだけは感じた。

「……殿下、ヴェリオス殿下」
宰相の声に、ハッと現実に引き戻される。

「…あ、ああ。何の話だったか」
「明日の祝勝会のことです。」
リオウ様のエスコートは殿下が務めるといっことで、よろしいですね？」
「…ああ、分かった」

そう、執務室で明日行われる祝勝会の最終確認をしていたのだった。
訝しげな宰相に気にするなと手を振り、頭を巡らせる。

（エスコート、か）

明日の祝勝会には我が国の者だけではなく、周辺国の王族や重要人物が参加する。

主役は勿論リオウだ。
そして、彼女のエスコートは自分が務める。そのことに、何故か心が湧き立つ自分がいた。

謁見では視線ひとつあわなかったが、エスコートとなれば視線は勿

論、言葉も交わすし体だつて

「……………」

謁見の間で見たリオウの姿が頭をよぎり、ヴェリオスは頭を振った。今更、初心な少年でもあるまいし、少し腕や肩やらが触れるのを想像しただけでこんな風になるのはおかしい。

「殿下？」

「い、いや、なんでもない。そうだ、リオウには話を通してあるのか？」

「え？ ええ、女官長がお伝えして、準備も滞りなく進んでいるようです」

「そうか……………」

さつきから赤面したり安堵したりと忙しいヴェリオスの顔を、妙なものを見るような目で見ていた宰相が少し悩む素振りを見せてから、口を開く。

「殿下……………勇者殿にはもう謝られたのですか？」

「謝る？ 何をだ」

「前にも申したでしょう。しきたりによって勇者殿を利用しようとしたことを謝罪した方がよいと」

「ああ……………」

またその話か。

うんざりしたような気持ちで、何度も繰り返した反論を口にする。

「しかし別にリオウはそのことを知らないのだから、わざわざ謝る

こともないだろう」

一年前、リオウが召喚された時、ヴェリオスはある役目を任された。勇者の枷となる役目だ。

髪と瞳の色が珍しいくらい今の今いちパツとしない少女に甘い言葉を囁いたり一々気を遣ったりしないといけないこの『仕事』は正直ヴェリオスにとって面倒だったが、これも国のためとヴェリオスは役目を放り出すことはなかった。

目の前にいる宰相はそんなヴェリオスに、その頃から苦い顔をしていたが。

「知らないからといって罪がなくなるわけではないのです。

しでかした罪はいつか白日のもとに曝される。その時に謝罪したのでは遅いのですよ?」

物怖じせず言うべきことを言い、時には王族さえ諫めようとするこの男は、潔癖すぎるとヴェリオスは思う。

リオウに関しても彼はうるさかった、ヴェリオスの『仕事』を『悪しき慣習』だといい、リオウが城を出て行った時もヴェリオスのせいだと言わんばかりの態度だった。

有能ではあるのだが　その高潔であろうとする精神が、時々煩わしいとも感じる。

「それに　」

更に言い募ろうとした宰相に目をやると、少しの間があっただけからため息を吐かれる。

「どうした」

「いえ……なんでもありません。私はまだ仕事がありますのでこれで」

ヴェリオスに背を向け退室していく宰相の言いかけた言葉が僅かに気にかかったが、まあいいかと黙って見送る。口にするのもくだらないことだと自分で気付いて引つ込めたのだろう。

執務室に1人になったヴェリオスは、窓の傍に立ち、中庭を見下ろす。

ヴェリオスは、間違ったことなどしていないと思っている。むしろ、自分は正しいことをしたのだと。

宰相はリオウを一人の人間として扱いたいようだが、それがなんのためになるというのか。

ついこの間まで世界は魔竜と、その軍勢に苦しめられていた。ヴェリオスが役目を放棄し、リオウが勇者として勤めを果たさなければ今も尚その状態は続いていたのかもしれない。

現に今のような慣習が生まれるまでは、勇者を喚びだしたものの全く務めを果たさない者もいたと記録に残っている。

世界の敵を退ける。それが、勇者の存在理由なのに。

「何をごちゃごちゃと……」

リオウのためにも世界のためにも、これが一番良い道だったのだと、ヴェリオスはそう思っていた。

彼は知らない。自分の心も、彼女の心も。

『……もう、いいですから』

あの日彼女が言った、言葉の意味も。

「お帰りなさいませ、リオウ様」

「……………お久しぶりです、フィアンナさん」

ただいま、と言えない自分は、やはりひねくれているのだろう
と思った。

謁見を終え、城内にあてがわれた部屋へと案内された理央を迎えたのは、女官長のフィアンナ・シエンマルトニーだった。

普段にこりともしない上に、少しつり上がった目尻が厳しそうな印象を与える彼女だが、城にいた頃世話になった理央は、彼女が暖かな人物であることを知っていた。

思えばこの人には大分苦勞をかけた気がする。主に礼儀作法とか、人間関係とかの面で。

「早速ですが、湯殿の用意が出来ておりますのでまずはそちらで長旅の汚れを落としてください」

だからだろうか。彼女にはどうも逆らえない。断ることの出来ない雰囲気を醸し出すフィアンナに、理央は引きつった笑みを零した。

「あの、自分で洗えますから」

「いいえ、そういうわけには参りません」

「フィアンナ様の御命令ですので！」

「諦めてください」

1対3。これが魔物相手なら相手の数が十倍になっても負けない自信があるのに。

脱衣場でお仕着せを着た女性3人にじわじわと迫られながら、理央はそんなことを考える。どうしよう、勝機が全く見えない。

人に体を　しかも比べるのも馬鹿馬鹿しいくらい自分よりも綺麗な女性3人に洗われるなんて、苦痛以外の何物でもないというのに引く様子を見せない女官達に、どうにかこの場を逃げ切れないものかと考えを巡らせた時だった。

「っ今よ！」

「え……うわっ」

どたばたどすん。

金髪の女官の合図により、他の女官2人が抑えにかかってくる。下手に抵抗して相手を傷付けたらどうしようという不安からろくな抵抗も出来ずにいると、今度は服を脱がそうと手がのびてくる。

「あつ、ちよっ」

「はいはい、大人しくしてくださいねー。わあ、肌きれー」

「傷一つないですね」

「あら本当」

「ひゃっ?!」

あらぬところを触られ素っ頓狂な声が出る。服を脱がすのにどうしてそんなところを触る必要があるのだろうか。

「っわかりました、大人しくしますから！だから、せめて服は自分で脱がさせてください……」

ぶにぶにとあらゆるところをつつかれた理央が諦めて譲歩の提案をすると、女官達は一斉に不満げな声をあげながらも渋々ひいてくれた。

彼女達は仕事だというけれど、理央には面白がっているようにしか見えなかった。

その後の風呂場での攻防は割愛しておく。部屋に戻った理央の頭のとつぺんからつま先まで磨き抜かれた姿を見れば、軍配がどちらにあがったかなど誰が見ても一目瞭然だっただろうけれど。

バスローブのようなものを着せられたぴかぴかの理央を見て、やはりにこりとはしないまでも満足げに頷いたフィアンナは、「ではこちらをお召しになってください」と当然の流れのように理央にあるものを差し出した。

「……なんですか、これ」

「ドレスです」

「はあ……」

見れば分かる。

レースやらなんやらできらきらしい白い布の集合体は、まさか普段着ではないだろう。

よくよく見ればきらきらしいのは小さな宝石が布に縫い付けられているからで、こんなので外を歩けば一瞬でこれ着た令嬢ごと盗まれるだろうなあと考えながらドレスを眺めていた理央は、フィアンナの言葉を思い出し「ん？」と首を傾げる。

『では、こちらをお召しになってください』

と、いうことは

「え、私が着るんですか？」

「貴女以外誰がいるんですか」

「……女官さん？」

多分理央よりもずっと美しく着こなすことだろう。理央の後ろに控えていた女官達を見れば、とんでもないと言わんばかりに首をぶんぶん横に振っていた。

「……明日行われる祝勝会のことは聞いていますね？」

こちらはそのためになされたドレスです。直しもありますので一度試着してみてください」

明日の祝勝会。そのために作られたドレス　それを着る自分。理央の頭の中でようやくすべてが繋がる。

「私、明日ドレス着なきゃいけないんですか！？」

しかもこんな盗賊ホイホイみたいなドレスを身につけて？

驚きを露わにする理央に対し、フィアンナは呆れた風のため息を吐いた。

「ドレスでなければ何を着るおつもりだったのですか」

「いや……鎧を」

「……どこの世界に、晩餐会で鎧を着る女性がいますか！！」

びりびりと大気を震わすような怒声を浴びて、理央は肩を飛び上がらせる。

この怒声を浴びるのも久しぶりだった。

「全く……貴女は自分が女性であると自覚していないのですか」

「う……すみません」

フィアンナの言葉が胸に突き刺さる。自分が女らしくないことなど百も承知だが、人にそれを言われると結構イタい。そして自覚しているために反論も出来ない。

はあ、と俯き気味に溜め息をついた理央だが、続いて聞こえてきた言葉に息を呑む。

「……貴女はもう勇者としての務めは果たしたのだから、鎧だとか剣だとか、そんなものからは離れてください」

「フィアンナさん……」

「私が、一体どれだけ心配したことが……っ」

常でない弱々しい声で吐露するフィアンナの目からは、ぼろぼろと涙が零れていた。

そつと、理央は震える肩に手を添える。

「ごめんなさい、フィアンナさん……ありがとうございます」

ずつと、心配させていたのだ。

フィアンナは理央を理央として見てくれた数少ないひとだった。あれこれうるさく言うけれど、それら全ては理央のためのものだといいことは、ちゃんと知っていた。

(「ごめんなさい……」)

泣き出したフィアンナの、思いのほか小さな背中をさすってやりな

がら、理央はもう一度心の中で謝った。

どんなに心配されようが泣かれようが、きっと自分はまたこの人を裏切ってしまうだろう。そんな確信があったから。

16 (後書き)

理央さんは女性に弱い。

「つつかれた……」

ベッドに倒れ込むと、多分国内でも最上級なのだろう寝具が極上の柔らかさで迎えてくれる。

泣き出してしまったフィアンナを宥めた後、ドレスを試着して直しの手配をして　その他諸々の用事を済ませてようやく理央が解放された頃には、日はとっぷりと暮れていた。

長い1日だった。そして明日も、きっと長いのだろう。

「祝勝会、か」

多分軍の人達がやってたどんちゃん騒ぎみたいなのとは違うんだろうなあ……

名は同じでもかなり内容というか雰囲気は異なるだろう。なにせハイグレードだけでなく周辺国の王族まで招いているという話だ。それに加え、理央が試着したドレスの煌びやかさ、更に王子様のエスコート付きということを考えれば、多分フィアンナの言うとおり祝勝会というより晩餐会と言った方がイメージがしっくりくる筈だ。

「……逃げたい」

女官達は下がらせ、1人になった理央はベッドの上で仰向けになっ
たまま呟く。

逃げられるものではないと、分かっているけれど。でも、口に出さずにはいられない。

自分が祝勝会の主役であるのも、王族やら貴族やらが集う中に珍獣よろしく放り込まれるのもそうだが、何より　王子殿下のエスコート付きというのが、理央の心を重くする。

謁見の間では無視を決め込んだのに、まさかこんなイベントがあるなんて　理央は目を閉じて、彼の顔を思い浮かべてみる。

もうずっと前に見たきりの彼は、記憶の中ですっかり臃気になっていた。

ヴェリオス・リア・ハイグレード。理央を利用した彼に対し、理央は怒りだとかそういつた感情は不思議と抱いていなかった。

それは、決して短くはない時が理央の棘を和らげたのかもしれないし、勇者として過ごす間に、特殊な立場に立つ者の事情というものをもつて知ったからかもしれない。

だが、だからといって許しているわけでもないのだ。

本当は、できればもう顔も見たくないとすら思っている。彼の顔を見れば、愚かだった頃の自分を思い出して自己嫌悪に走ってしまいたい。そうで。こういう感情を、なんて言えばいいのだろう。

謁見する間、ずっと感じていた視線の意味は分からないし、彼がどんな顔で自分を見ていたのかも知らない。でも、そんなことはもうどうでもよかった。

寝ころんだまま、目を腕で覆った理央の心に浮かんだのは、あの日ヴェリオスに向けたのと同じものだった。

(もう、いいから……)

理央は魔竜を倒したのだから、縛り付ける理由も無くなったはずだ。

もういいから、わたしに構わないで

それが、理央が彼に願う、ただ一つのこと。

女官達の腕前はすごかった。

城で一夜を過ごし、翌日の昼から夜に行われる祝勝会のために準備をはじめた理央　　というか女官達は、自らが磨き上げた理央の姿を絶賛した。

「とてもお美しいですわ、リオウ様」

「凜として、艶やかで」

「その上お可愛い」

昨日今日と風呂場で理央と攻防を繰り返した三人官女は鏡にうつった理央にうつとりとした視線を送る。今日も息ぴったりなようでありだ。

(まあ、確かに……見違えるくらいにはなった……かな)

理央も鏡の中の自分に目をやる。華美な白いドレスを身に纏った理央は、髪も結び上げられ化粧も施され、別人のようだった。とりあえず剣や魔法をぶんまわすようには見えないだろう。少し窮屈で辛い、これもある意味武装と思えば耐えられる。

「あら、そろそろお時間ですわね」

ひとしきり理央を褒めそやした女官達のうち1人がその声を発すると、一旦は落ち着いたはずの空気がまた慌ただしくなる。

「よいですか、リオウ様。」

何があっても背筋をのばし、まっすぐ前を向く。この2つを守れば、大抵のことはなんとかなります」

「はい、フィアンナさん」

最終確認をしたフィアンナの言葉に理央は頷く。以前もよく背中が曲がっていたり俯いたりしているとすぐさま飛んできた言葉だ。確かにこうしていると、気持ちがいっかりとして揺らぎにくい。城の中だろうと戦場だろうと、まっすぐ立っていられた。しっかりと頷いた理央を見上げた瞳に、うっすらと涙の膜がはる。

「…本当に、お美しくなれましたね」

「フィアンナさんは涙もろくなりましたね」

「誰が泣かせてると思ってるんですか」

理央のせいなのか。

ぐずぐすと鼻を慣らしながら涙目で睨んでくる、母より少し年上なぐらいの女性に向かって、理央は困ったように微笑んだ。

背筋をのばし、真っ直ぐに前を向く。

大広間へと続く扉の前に立ち、理央はフィアンナの言葉を実行していた。

この向こうには、どれくらいの間があるのだろうか。さざめくような話し声が扉越しにも聞こえてくる。

「すまない、待たせたか」

きびきびとした足音が聞こえてきて、理央は顔を横向けた。

「……………いえ……………」

こちらに向かつて歩いてくる彼を見留めて、理央の記憶の中の殿下の顔が鮮明になる。そう、こんな顔だった。

後ろに数人の共を連れた彼は、正装なのだろう複雑そうな衣装をきつちり着こなし、当たり前だが記憶の中よりも大人びて見える。

顔つきが引き締まった、というのか。物語の中の王子様が、少し現実味を帯びたような印象だ。

久々に見たヴェリオスを観察していた理央だが、向こうも理央のことを見ていることに気づき、首を傾げる。

何か変だったろうか。

「……………殿下？」

頭一つ分高い彼の顔を見上げ呼びかけると、ヴェリオスは一拍遅れて反応した。

「……………手を」

何か言いたげに形の良い唇が動いたものの、結局出てきたのはその二文字と、白い手袋に包まれた大きな手だった。

理央も、彼の手に自らの手を重ねることとそれに応える。

理央は再び扉へと視線を戻した。

相変わらず彼からの視線は感じたが、謁見の時と同じように無視を

決め込む。

「では、よろしいですか」

「ああ」「はい」

理央とヴェリオスが頷くと、扉の脇に控えていた者が扉をノックし、向こう側へと合図を送る。

ゆっくりと向こう側から開かれていく扉を、理央は息が詰まりそうな思いで見守った。

ヴェリオスと共に大広間へと足を踏み入れた理央を迎えたのは、いくつもの視線だった。

途端に足が重くなる。以前のように刺々しかったりあからさまに嘲笑を含んでいたりするものは流石に少ないが、これだけの数だろうとたとえ好意的な視線でも理央にとって圧力であることには変わらない。

(100人以上はいるかな……)

登場したのが階段の上であつたので、大広間の様子が理央からはよく見渡せた。

女官や給仕の者達を合わせれば200人近くにはなるだろう。食事の載った丸テーブルが規則性をもって並び、立食パーティーのような雰囲気だ。

ヴェリオスのエスコートに従い、理央は慎重に階段を下りる。本当に理央のために作られたのだとわかるドレスの裾を少し持ち上げて、慎重に、慎重に。

流石は王子様というべきか、そのないエスコートのおかげもあって、理央は特にヘマをすることなく大広間の床へとたどり着くことができた。

「どござ」

階下へ下りた理央達に、給仕の者からソーダ水のような液体が入ったグラスが手渡される。

見れば賓客と思しき人達は皆、グラスを手にしていた。

「陛下に代わりまして、私が発言することをお許してください」

理央から手を離れたヴェリオスが一礼をしてから、よく通る声で広間の人間を見回しながら話し出す。結婚式のスピーチを思い起こさせる殿下の話を、理央は隣で黙って聞いていた。

「では、此度の戦で、我らが連合軍に勝利をもたらしてくれた勇者、リオウ・ハヤサカに敬意を表して 乾杯を」

そう言つて、ヴェリオスがグラスを掲げると広場の面々も同じようにグラスを掲げ、理央もそれに習った。

「乾杯」

いくつもの声が重なり、唱和する。

グラスに口を付けると、炭酸とは別の、灼けつくような刺激が喉に流れ込んで、理央は噎せそうになるのをこらえた。

18 (後書き)

お酒は二十歳になってから。

「勇者殿、私のことを覚えておられるかな？」

「ええ、もちろん覚えています。ロイアネル公爵」

「いやあ、立派になつて」

「覚えていらつしやるかしら。我が国にいらした時勇者殿とお話する機会があつただけけれど」

「ええ、ヘルナウラ夫人」

「勇者殿は」

「勇者様の」

勇者殿、勇者様　そつちこそ理央の名前を覚えてないのでは、とそれぞれ自国を勇者が訪れた時の思い出話を語る面々を見ながら理央は思った。

「というか、ヤバイ。」

理央はぐわんぐわんと揺れ始めた頭をさりげなく押さえ、理央を取り囲む人々の会話をなるべく聞き取ろうと努力した。

祝勝会がはじまってまだ30分も経ってない内に理央が理解したのは、理央に聖徳太子のような能力は備わっていないということと、思っていた以上に自分の対人スキルがないということだった。

（殿下と離れたのは、失敗だったかな……）

乾杯のあと別れたきり、今は人垣のせいでどこにいるのかも分からないヴェリオスのことを考え、理央は慌ててその考えを振り払う。関わりたくないか思っていたくせに、困った時には頼るなんて虫が良すぎる。

自分でなんとかしないと。

そう自分を奮い立たせた時だった。

「リオウ」

名を　しかも呼び捨てで呼ばれたせいか、それとも彼のゆったりとした声質のせいか。その声は、驚くほどすんなりと理央の耳に滑り込んだ。

あれだけ騒がしかった周囲も、その声をきっかけにしん…と静まり返っている。

理央が視線を向けると、その人垣が割れて、1人の人物が残された。

「ノマライト王」

「久しいね、リオウ」

その残された人物は、金色の双眸を細めて理央に微笑みかけた。

ノマライト王　グラエル・ノマライトはまだ18という若さで王位についた、現在25才のノマライトの若き王だ。

ノマライトはハイグレードの隣国であり、理央も魔竜討伐への旅の途中で立ち寄った折り、面識を持っていた。

「迷惑だったかな」

庭に出ると、花の芳しい香りが風にのって理央のもとへと運ばれてくる。

そこでほっと一息つけた理央は、ふるふると首を横に振った。

「いえ……正直助かりました」

正直な気持ちを打ち明けると、華やかではないが精悍に整った顔をくしゃりと歪めた。

相変わらず笑うのが少し下手だ。

「よかった。　　周りに嫌われているこの身も、なかなか役に立つようだ」

「嫌われてる、ということでもないと思いますけど」

彼、グラエルが現れると理央の周囲から潮が引くようにあつという間に人々が消えた。その中にはグラエルを嫌っている人もいたかもしれないが、大半は彼のオーラというか、威風に気圧されたのが殆どだろう。

理央はグラエルの隣に立つて、彼を見上げた。身長は理央よりも頭二つ分は高いのでこうして見上げると首が痛くなりそうだ。体つきもがっしりしているため、立っているだけでも妙に迫力がある。

そう、ライオンみたいだと思ったんだ。

初めてグラエルを見た時を思い出す。濃紺の鬘と金の瞳を持つ、ライオン。理央も初対面の時にはその迫力に少し気圧された。

きつと、彼に惹かれてはいても、身分的にも雰囲気的にも近寄りが

たいのだろつと理央は思う。

本人は、穏やかで身分にも余りこだわらない気さくなひとなのに。

「久しぶりだね、本当に。半年ぶりくらいか」

「あ……はい。その節は、お世話になりました」

「いや、リオウが滞在してくれた期間は俺も楽しかったよ」

そう言われても、理央は請われるままに理央が住んでいた世界の話をしたくらいしかした覚えがないのだが。

「言っておくが、社交辞令などではないよ」

理央の頭の中を見透かしたように言葉が飛んでくる。

瞳を瞬かせた理央に対し、グラエルはやはりとでも言うように笑った。

「本当に楽しかったんだ。貴女がしてくれた異世界の話はとても興味深いものばかりだった。

良ければまた聞かせて欲しい」

「ええと……はい」

「じゃあ、約束だ。確かこうだった？」

そう言っつてグラエルが差し出したのは、ぴんとたつた小指だった。

一瞬彼が何をしようとしているのか理解できずに目を丸くした理央だが、それが以前理央が教えた故郷での約束の仕方であることに気付いて、噴き出した。

グラエルが怪訝そうに理央を窺う。

「何か間違っていた？」

「いえ、合っています」

やり方自体は間違っではないのだけれど、大の大人　しかも彼のような美丈夫がやると、なんだか妙に可愛らしい。

笑われていい気がしないのだろう、むっすりとしはじめたグラエルにまだ笑い混じりの声で謝って、理央は小指を絡めた。

「えーと、なんだっけ、あの怖い歌」

「ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのます、です」
「そうそれ。」

「ゆびきりげんまん……」

腰にくる、というのはいくつという声を言うのだと理央に教えた美声が真剣に唄うのが理央の故郷の童歌。

理央はまた笑いを堪えなければならなかった。

「ゆーびきった。……これでいい？」

「はい」

頷き返し、指が離れる　だが、離れたはずのグラエルの手が、理央の手を包み込んだ。

「陛下？」

「……陛下だけじゃ、誰を呼んでいるのかわからないな」

「……ノマライト王？」

「……どうしてそっちへ行くんだろう。」

まさか俺の名前忘れてる？」

「いえ……グラエル、陛下」

「ん、よくできました」

満足げにそう言ったグラエルが、繋いだ手をぶらぶらと揺らす。

「リオウは、これからどうするんだ？」

「これから……？」

「そう。すぐに元の世界に帰るの？」

問いかけに、理央は瞼を伏せた。

グラエルは、理央の願いを知っていた。彼に故郷のことを話す内、郷愁に駆られてうっかりとこぼしたことがあったのだ。「帰りたい」と。

「それは、しばらく無理みたいで」

「何か問題でも？」

「まあ、そんな感じですよ」

そういえば、彼も理央をこの世界に留める枷となっているのだろうか。理央の手を包み込むようにしているグラエルの手を見ながら考える。

嫌われてはいないと思うが……そこまで執着されているとも思えない。

(…私がいなくなったら悲しむ人が、世界を歪める、だっけ)

神が言っていたことを思い出す。理央がいなくなったらグラエルも悲しんでくれはするだろうけど、世界に影響を齎すほどとは思えなかった。そもそもグラエルがそういう人間ならば、「帰る」「帰らない」の話をした時にもっと取り乱したり悲しんだりするのではないか。

ぼーっとしてるようにも真剣に考えことをしているようにも見える

彼の表情を窺っていると、視線に気付いたグラエルが首を傾げる。

「リオウ？」

「……グラエル陛下って、不思議なひとですよね」

「変、とはよく言われるけれど。不思議と言われたのははじめてだ」

何故そこで嬉しそうにするのか。

やっぱり不思議。と、理央が心の中でグラエルの位置をとりかねていると、そっと手が離される。

「……あんまり主役を独り占めにするものじゃないね」

どうやら話している内にそれなりに時間が経っていたようだ。理央も遠巻きにこちらを窺っている視線の数を感じて、グラエルに笑みかける。

「ハイグレードにはまだ滞在なさるのですよね」

「ああ。約束、忘れないように」

「はい」

また広間の方へと戻ろうと踵を返した理央を、気遣わしげな声が続ってくる。

「……大変だろうけど、がんばって」

振り返ると、グラエルがやっぱり下手くそに微笑んでこちらに手を振っていた。

19 (後書き)

これで大体の登場人物が揃いました。

グラエルさんは、理央の……友達？

割とこの人もひねくれてます。ていうかねじ切れてます。

リオウが人々に囲まれ、人酔いに陥っている頃　　ヴェリオスはヴェリオスで、鼻孔を絶え間なく攪る匂いに酔いそうになっていた。

「先ほどのご挨拶、とても素敵でしたわ。ヴェリオス殿下」

夢の中にいるような声で言ったのは、自国の伯爵令嬢だ。まだ年若い彼女はヴェリオスに憧れを抱いているのか、こうしてあう度に甘ったるくうっとりとした視線を寄越してくる。

「ええ、本当に。このようにご立派な王子殿下がいらっしゃるなら、ハイグレード国も安泰ですわね」

その伯爵令嬢の隣で彼女の言葉に頷き、妖艶な笑みをヴェリオスに向けたのは西の隣国、エンデルシアの公爵令嬢。

丁度適齢期なのだろう彼女は、扇で口元を隠しながらどこか挑発的な目でヴェリオスを見ていた。

「魔竜の脅威もなくなったことですし、そろそろ戴冠のお話も出ているのではなくて？」

そういったのは　誰だったのか。もはやよく分からない。

ヴェリオスの周囲を取り巻く令嬢方はその誰か分からない娘が言った言葉に、色めき立った。

それを適当に宥めながら、ヴェリオスは自分は一体どうしたのだろうと疑問を抱く。

舞踏会でも、夜会でもこういった華やかな場では、ヴェリオスが令

嬢方に囲まれるのが常だった。

華やかな容姿と立場。ヴェリオスは自分がとても女性受けがいいことを知っていたし、何もしくとも寄ってくる女性達と恋愛紛いのようなことをして楽しんでもいた。

こうして華々しく着飾った令嬢方に囲まれるのも嫌いではないはずだったのだが。

「ヴェリオス殿下？」

令嬢の一人が首を傾げ、ヴェリオスを窺う。そんな仕草ひとつに、苛立ちのような感情を覚える自分に気付く。

「どうかありませんでした？ お顔の色が優れないような……」

その言葉を皮切りに、令嬢達はヴェリオスを気遣う言葉を口にしはじめる。

心配するのなら黙っていてほしい。甲高い声が正直耳障りだった。匂いにしてもそうだ。一人一人の香水が、集まり混ざること余りいい香りとはいえないものになっていた。

ヴェリオスの顔色が悪いのには気付くのに、それが自分達のせいであることにどうして彼女達は思い至らないのか。

いや、おかしいのはヴェリオスの方なのだろうか？

ふと違う答えにたどり着く。彼女達はいつもと変わらない。今までヴェリオスもこんな風に令嬢方の行動が一々気に障ることもなかったはずだった。

なのに、今は今すぐにでもこの輪を抜け出したいと考えている。抜け出して、そして

(……そして?)

不意に頭に浮かんだのはこの祝勝会の主役だった。いや違う。さつきからずっと、彼女の姿が頭から離れなかった。

令嬢の声が耳を刺せば、彼女の高すぎず低すぎない声を思い出し、ぎらついた視線を感じれば、彼女の透き通った黒い瞳を思い出し、香水が入り混じった匂いに酔えば、彼女の香りを夢想し　さつきから、彼女達とリオウをずっと比較していた。

ヴェリオスは無意識のうちに周りに視線を巡らせる。相変わらずの社交性ならば、きっと広間のどこかで困っているはずだ。

広間に入る前を見た、彼女の姿を思い出す。白いドレスを身に纏った彼女は、百合の花をヴェリオスに思い起こさせた。

凜と立つ姿は犯しがたい神聖さを醸し出すのに、その癖下品でない程度に開いた胸元と、結び上げられた黒髪と白い頂の対比が男の目を吸い寄せる。

ある意味目の毒なあの格好を、無防備に他の男にも曝しているのかと想像すると、更に胸が騒いだ。

どうしてリオウのことを考えるだけでこんなにも心が荒れ狂うのか。疑問に思いながらも妙な使命感に突き動かされていたヴェリオスの目に、ある人だけが目に入る。

多分あの中心にリオウがいるのだろう。

直感的にそう感じたヴェリオスが周りにいるご令嬢方からどうやって逃げるか考えた時だった。

人だかりが綺麗に割れて、リオウが中から現れる。やっと姿が見えた彼女に近づく、一人の男。

「ねえ、あれ……」

いつのまにか広間は静まり返り、時折囁き合うようなさざめきが聞こえるのみになっていた。

ヴェリオスの周りにいたご令嬢も異変気付いたらしい、扇で口元を隠しながら囁き合う。

「ノマライト王よね……素敵」

そんな周りの目などまったく気にしてない風の男のことを、ヴェリオスも知っていた。

隣国ノマライトの王、グラエル・ノマライト。ヴェリオスよりも七つ上だが、既に賢王と名高い彼は、何故かりオウの手を自らの手で包み込んでいた。

勇者と一国の王という関係だけでは説明できない親密そうな雰囲気
が二人の間に漂っているのにも驚いたが

(……リオウ?)

彼女が、笑っている。それも下手くそな愛想笑いでなく、ごく自然に。

どうしてあそこにいるのが、自分ではないのだろう。

彼女の微笑みも、眼差しも、小さな手も　すべて、ヴェリオスのものだったはずなのに。

視線の先では、グラエルがリオウを庭へと連れ出していた。

20 (後書き)

ひとりじめじめする王子様。お前はヒロインかといづくらい、じめ
じめじめじめし続けます。

祝勝会もつつがなく終わり、ようやく肩の荷が下りたとその日は清々しい気分で眠りについたリオウだったが

「リオウ様、面会の申し込みが殺到しておりますが、いかがなさいますか？」

どうやらまだ解放されないらしい。

「はあ…」

「お疲れ様にごさいます、リオウ様」

午前の予定を全て終え、服の襟元を緩めながら長椅子に倒れ込んだ理央に、女官の一人がぱたぱたと扇で風を送る。

香水を振ってあるのか、清涼感のある香りが風によって理央の鼻孔をくすぐった。

「ありがとうございます。ティルファさん」

金髪の女官の名を思い出し礼を述べると、彼女　ティルファは、ぽっと頬を染めた。

「によ、女官として当然のことをしているだけですわ」

ハイグレードでは一般的とされる金髪碧眼に、整った容貌。黙って立っていると高嶺の花のような印象があるのに、こうして話してい

ると彼女も年相応なのだ実感させられるし、和む。理央が微笑ましさに口元を緩めると、ティルファの顔が更に真っ赤になった。

「午後は……お茶会でしたっけ」

これからの予定を思い出し、ティルファに尋ねる。祝勝会の翌日から、理央には各国の要人達から面会の希望が殺到していた。その数は到底1日でこなせる数ではなく、ついさつきも隣国の外交大臣と面会を終えたばかりだが、理央の予定表は一週間先まで真っ黒になっていた。

「ええ、セルヴァー公爵夫人らと中庭でお茶会をすることになっております。

お召し替えはどうなさいますか？」

「できれば、このままで」

「かしこまりました」

衣服のことで特に何も言われなかったことに、内心ひどくほっとする。

現在理央が着ているのは、煌びやかなドレスではなく軍服を改造したようなものだ。勇者のイメージカラーなのか、白地に金の刺繍が入った上着とパンツは、少々装飾がうっとうしいものの、ドレスよりは余程機能性を重視しているため動き易い。

それに、意外と周りの特に貴族の夫人や令嬢達の受けもよかった。

（男装しているようにでも見えるのかな）

理央は長椅子に寝転んだまま、今日は頂で一つに結わえて肩に流し

ていた髪を一房つまむ。
召喚された時は耳にかかるぐらいだった髪の長さは、今や胸に届くくらいまでのびていた。

だがこちらの世界の女性に比べると、理央の髪はまだ短い方なのだという。

理央に余り自覚はないが、その短めの髪もあいまってご婦人方の中には理央が男装しているように映っているのかもしれない。

理央もこちらの格好の方が楽なので、受け入れてくれるのはありがたいのだが　一応年頃の娘としては、心中複雑でもあった。

フィアンナの命で勇者リオウに付くことになった女官のうちの1人であるティルファの心は、充実に満ち満ちていた。

それは、仮といえど今の主であるリオウによってもたらされたものだ。

リオウに付くよう命じられた当初は、ティルファにもかなりの戸惑いがあった。相手は貴族の姫君でも、ましてやこの世界の人間でもない女性で、しかも勇者。

従来の仕事の仕方と通用するのだろうかという不安は、他の女官2人も抱いたようだった。

だが、心配は杞憂に終わった。

確かにリオウは貴族の姫君とは違ったが、素直で優しいひとだとティルファは思った。世界を救った英雄なのに女官長相手にたじたじになっている姿を最初に見たせいかもしれない。

何気なく「ありがとう」と言う声だとか、肌を見られることを恥づかしがるところとか、困ったように微笑む顔とか、ティルファ達限られた女官だけが見られるくつろいだ姿とか
ティルファはリオウが大好きになっていた。 ようするに、

そして、リオウに魅了されたのはティルファだけではなかった。

「リオウ様とお呼びしてもよろしい？」

「ええ、どうぞお好きなようにお呼びください」

リオウが微笑み了承すると、ご婦人方が色めき立つ。

中庭で白いクロスがかかったテーブルを囲むのは、リオウ以外いずれも結婚して5年以上は経つ夫人達なのに、リオウをうっとり眺める様はまるで恋する少女のようだった。

（まあ、気持ちは分かりますけれど）

リオウの後ろに控えたティルファも、密かに心の中で夫人達に同調した。

リオウはなんとというか……同性すら惹きつける艶のようなものを持っているとティルファは思う。中性的な雰囲気や仕草がそうさせるのだろうか。

その抗いがたい魅力に早くも虜になったらしい、夫人の1人がほう…と熱を孕んだ息を吐く。

「リオウ様のお召し物、素敵ね。まるで物語に出てくる騎士様のよう」

「そうですか？ 私も実は気に入っているのです。

私には女性が着るようなドレスは……その、似合わないでしょう？」

「まあ、そんなことありませんわ！ 先日の祝勝会でお召しになっていたドレスもとてもよくお似合いましたもの」

「ええ、今が騎士様なら……そう、聖女様のような神々しさでしたわ」

「ヴェリオス殿下と共に登場された時は、老若男女問わずリオウ様に見惚れていましたもの」

きやあきやあと沸き立つ夫人方の勢いに押され気味なりオウが、困ったように微笑む。そして、

「ありがとうございます」

ずきゅん。

夫人達の心が撃ち抜かれる音がティルファには聞こえたような気がした。

「でも、私は着慣れていないのもあってか、どうもドレスに着られるような感じがして……やはり綺麗なドレスは皆さんのようなきれいな人に着てもらってこそ輝くものなのでしょうね」

ずきゅんずきゅん。

一度だけでなく、二度三度と正確に心を撃ち抜かれた女性達を見て、ティルファは思った。

（ああ、落ちましたね）

自分も一度通った道だ。彼女達の心情は手に取るように分かる。

きつと今頃、その胸の奥では忘れかけていたときめきや、暖かな母性が溢れそうになっていることだろう。こうなったらもう誰にも

勿論自分自身も止められない。次々と陥落していく貴婦人達を碧の瞳に映し、ティルファはどこか誇らしげな気持ちで微笑みを浮かべた。

ねえ、私達の勇者様は、素晴らしいでしょう？

22 (後書き)

自分で自分の首を締める勇者。

歴代の勇者は代々女たらしとかいう記録があつたりなかつたり……
理央さんは無自覚です。褒められたら謙遜して褒め返すのは日本人の礼儀というか癖。

「だから言ったたろう？ 大変だろうけどがんばって、って」

「……あれ、そういう意味だったんですか」

てっきり祝勝会の間だけのことを指していたのかと……

隣でのんびりと空を見上げるグラエルを横目に、理央はがくりとうなだれた。

面会ラッシュが3日続いた頃、理央が部屋でぐったりしているところにひよっこり現れたグラエルは、理央を庭に誘った。本当に、王にあるまじき気さくさである。

「なにか嫌なことでもされた？」

「いえ…そういうことはなかったんですけど、なんていうのか…
…疲れました」

贈られる美辞麗句や高価そうな物。贈る相手間違つてませんか？と言いたくなるほど理央には勿体無いそれらは、下手に突き返すことも出来ず理央の心と部屋に積み上げられていく。

思わずグチグチとそのことを吐露すると、グラエルは不思議そうな顔をしていた。

「俺が贈り物をした時は、全部突き返したじゃないか」

「あれは、旅の途中でしたし」

「確か邪魔だからいらないうって言われたな」

「……もしかして根に持ってます？」

「いいや？」

にっこりと笑むグラエル。絶対嘘だ。

ノマライトに滞在していた頃、理央はグラエルに物を贈られたことがあった。ドレスや装飾品、珍しい食べ物。多岐に渡った贈り物はどれも高そうなものばかりで、理央はあわててそれらを突き返したのだった。

そう、意図の分からない贈り物なんて恐ろしいだけだ。それが高価なものであればあるほど、裏に潜む思惑が見え隠れしているような気がして。

もう、利用されることなんてないと思ったのに。

「リオウ……」

名前も知らない真つ赤な花に目を落とした理央の頭に、気遣うようなグラエルの声が降ってくる。

彼自身は周囲をすぐに煙に巻く癖に、どうして他人の心情はこつも容易く読んではしまうのか。ずるい、と思う。

「まあ、貰えるものは貰ってしまっただ構わないと思うよ」

「でも……」

「下心なんて知らぬふりをすればいい。

口に出さない見返り要求など、叶えてやる必要はないよ」

「口に出された場合は、どうしたらいいんでしょうか？」

「何を言われたの」

問われて理央は、記憶を手繰り寄せる。

一番多かったのは「是非我が国にも来てください」だった。社交辞令のように言う人もいれば、かなり本気で誘ってくる人もいた。あとは

「……あ、グラエル陛下のことを訊かれました」

「俺？」

「ええ、仲がよろしいのね、とか……恋人なのか、とか」

グラエルのこと、というかグラエルと理央のこと、というか。

「ああ、祝勝会では目立っていたから」

「……なんだか、こうなること分かってたみたいですね」

「暇な人達っていうのは、邪推が何より好きだからね」

予想はしてたということか。嘆息する理央の頭を、グラエルがぐしやぐしやとかき混ぜる。

「わ、」

「そういうのが嫌なら、どんな男が相手でも2人つきりになつたりしない方がいいよ。最悪相手にも誤解される」

「そんなこと言われても……」

乱れた頭を直しながら彼を見上げる。

今までそんなこと気にしたこともなかったが、よくよく考えてみればそれも当然だ。

グラエルが言ったのは、『女性として気にすべきこと』で。

ずっと勇者としての姿を求められ、応えてきた理央には縁がなくて当たり前だった。

「貴女はいまや世界を救った英雄だ。

そんな貴女を取り込むことで利用しようとする国は、少なくない。

例えば、結婚とかでね」

「……………」

他国の人達との面会でやたらと異性の話題が出たのは　つまりは
まあ、そういうことだったようだ。
なんというか……溜め息しかでてこない。

どこそこの王子が美しいだのうちの息子は年頃だの言われても理央
にはさっぱり興味が湧かなかつたし、グラエルやヴェリオスとの仲
をそういう風に邪推されるのにも正直辟易していた。

どうして皆、恋愛だの結婚だの当然のように口にするのか。
理央は、元いた世界に帰るのに。

「まあ、心配はいらないだろうけど、中には強硬手段をとるような
人もいるかもしれないし、充分気を付けるようにね」

グラエルの忠告に、理央はやはりため息しか返せなかった。

24 (前書き)

過去です。時系列がごっちゃりしてすみません。

「特別、仲が良い家族でもなかったんです」

頬に影を作る睫毛。華奢な肩。迷子になった子供のような、声。全てが少女を少女らしく見せていた。

初めて見た『勇者』のリオウではなく、ただの少女であるリオウの姿。

リオウがグラエルにとっての『特別』になった瞬間だった。

気付けば世界は腐敗していた。

長く魔竜の脅威にさらされていた国々の行く道は、腐敗するか、研磨されるか。その、2つだった。

ノマライト国は前者で、当時の国王　グラエルの父は、女と酒に溺れ享楽に耽る日々。放り出された政務はそんな父におもねる姦臣達に自分達の都合のいいように回され、そのしわ寄せは民衆へと向かう。

収入を遥かに上回る税をかけられた下々の者はある者は飢えて死に、ある者は国を捨て、ある者は逆らい　殺された。

その様はまるで、沈みかけた船のよう。

幼かったグラエルが自国の腐敗具合に幸いにも気付けたのは、正妃であった母と一部のまともな人間のおかげだろう。

母は強い人であったのだと思う。自分以外の女に夢中になり、こちらを見向きもしない夫は早々に見限り、我が子を守ることを考えた。

その結果、グラエルは13の時に隣国であり母の故郷でもあるハイグレードに留学させられ、その後、母は亡くなった。

死因は未だにはっきりと分かっていない。葬儀すらも行われることなく、すぐに別の女が王妃の座に付いたという。

それから5年、耐えた。

自国が坂を転がり落ちるように腐敗していく様を、母が我が子と愛しんだ民が国に喰われていく様を、隣国からただ黙って見つめて。

『国を救えるのは、あなただけ』

だから簡単に命を投げ出してはいけない。留学に出る前に母がグラエルに言った言葉が、まるで呪いのように感じた。

グラエルは何もできない苛立ちと焦燥をぶつけるように己を研磨した。そして5年後、漸くハイグレードの力を借りてグラエルは自国を取り戻したのだ。

リオウがノマライトを訪れたのは、それから更に7年が経った時だった。

はじめて見た時、母に似ていると思った。容姿がではない。生き様が、その姿勢が母によく似ていた。

夫を諦め、息子に望みをかけた母のように。何かを諦め、別の何か

を取り、そのために生きる者。切り捨てるということを知った者の姿。

この娘は、一体何を諦めたのかと、最初に抱いた興味はそれだった。

「陛下、いきなり現れるのは止めてください」

「何故」

「うっかり切り捨てそうになるんです」

窓から現れたグラエルに向かってそう言った彼女の手は、確かに剣にかかっていた。

はじめは興味本位で近付いただけだったが、グラエルはいつの間にかリオウを好ましく思っていた。

それは気の置けない友人に対するような「好き」だったかもしれないし、もっと甘い色を含んだそれだったかもしれない。

気付けばグラエルは日課のようにリオウのところへ通っていた。「異世界に興味がある」フリをして。

「さて、今日は何の話をしてくれる？」

リオウのために用意した部屋の椅子に陣取り、彼女を見上げると彼女は頭が痛そうな顔をしていた。

「分かりました。では今日は」

嫌そうな顔をして、結局グラエルの願いを聞いてくれる。そこもまた、グラエルが好ましく思うところだった。そっけなくて面倒くさがりの癖に頼られると無碍にはできない。そんな人間くささが、好きだった。

「どうして、リオウはそんなに頑張るんだ？」

そんな問いを投げたのは、どうしてだったか。城に滞在する間も鍛錬を怠らず、鍛錬場で剣を振るう姿を見たからだったと思う。

あるいは、その時にはもうグラエルは感じ取っていたのかもしれない。リオウがこの世界を決して好いてはいないことを。

グラエルが王になったのは、母のためだった。母の愛したノマライトを取り戻すためだった。だからグラエルはここまでやってこれたのだと思っている。

だが、リオウは？

異世界のことを話す時のリオウは、いつも愛おしさと切なさが入り混じった顔をしており、確かにそこに彼女の世界を感じた。

けれど、こちらの世界には？ 彼女が守るべきものや愛すべきもの

勇者になる理由が、彼女にはあるのだろうか。

不意に湧いた疑問をグラエルが投げ掛けると、リオウは虚をつかれたように目を瞬いたあと、ぽつりぽつりと語りはじめた。

「特別、仲が良い家族でもなかったんです」

彼女の周囲の　小さな、世界の話。

「両親はどちらも働いていて、たまに二人とも休みがとれても家のんびりしていることが多くて、その時だって会話もそんなになくて……でも、仲が悪いわけでもないんですよ」

苦笑する彼女は、けれどどこか幸せそうで、眩しかった。

「友達もいました。なんとなく仲良くなった子達で、なんてことない話で何時間も話したりして……」

長い睫が、ふろりと震えて頬に影を作った。儚げな姿に、思わず華奢な肩を抱いてやりたくなっただけで、できなかった。彼女を取り巻く空気は、グラエルの手を拒絶していたから。

「私が頑張るのは、元いた世界でまたそんな日常を送るためです」

黒目に強い光を宿して、まっすぐに前を見るリオウに、グラエルは魅入られた。

そして、理解した。

彼女が諦めたのは、世界であり そこに生きる、自分達であるのだと。

「私は、帰りたいんです」

そしてグラエルは、想いに蓋をした。
暖かな気持ちは、そのままに。

25 (前書き)

説明のついていうか説明。

現在の国王ルイゼアス・リア・ハイグレードには4人の子がいる。その内の三人は姫で、既にそれぞれ他国や臣下の元に嫁いでいる。そして最後に産まれたのが待望の王子、ヴェリオスだった。

産まれてくる子に姫が続き、長姫を女王として即位させるか、それとも婿をとらせてその者に などなどと臣下達が頭を悩ませていたところへヴェリオスの誕生は、どれほど喜ばしかったか。待ち望んでいた男子、その上国王にとっては年をとってからの子だ。大事に、それはもう大事に育てた。勿論ゆくゆくは父にも負けない良き王になってほしいと、時には厳しくもしていた。

なのに、どうしてあんな風になってしまったのだろう。

宰相のユディル・フォドラは痛む胃をさすった。

(いや、悪い方ではないのだ。王子としての責務もきちんとなし
ておられるし、度胸もある。ただ)

ただ、どうも調子に乗りやすいところがあるだけで。

嗚呼、擁護しようとしても何故かその一言で全部霧と化してしまう。
なまじ割となんでもこなしてしまう上にあの容姿だから、余計に質
が悪い。今まで特に大きな失敗をしていないのも、あの性格に拍車
をかけているのだろう。

そんな殿下が犯したはじめての失敗が今、1人の少女を苦しめている。その事実がユデイルの胃をきりきりと締め上げた。

リオウ・ハヤサカ。異世界から喚びだされた彼女は　きっと、気付いてしまっているのだろう。

自分が利用されたということ。

これは勘だ。本人に訊いたわけでも、確証を得たわけでもない。だが　城を出て行く前のリオウは、既にもう周りを『拒絶』していた。

どういう経緯を辿ったかは知らないが、恐らくその時にはもう、彼女は知っていたはずだとユデイルは考える。そして、ぞつとする。

当時の彼女はどんな気持ちで魔竜を倒す旅に出たのだろう。そして今、どんな気持ちで此処にいるのか。

王子だけが、悪いわけではないのだ。あの悪しき慣習を今まで踏襲してきた神殿も、それを黙認してきた国も　宰相という位置にながら何も変えられなかった自分にも、責はある。

責めてくれたのなら、まだ楽なのに　そんなことを考える自分に嫌気が差す。

リオウは、自分の状況を理解していたようなのに何も言わなかった。ただ、黙々と勇者としての責務を今もこなしてくれている。以前よりは分かり難くなつてはいたが、『拒絶』の空気はそのままに。それがユデイルにとって、何よりも恐ろしかった。

怒っているのではない。けれど、許してくれたわけでもない。

拒絶、無関心　リオウの目に宿るのは、ただそれだけで。謁見にて彼女を再び目にしたユディルは、彼女と自分達との間にある分厚い壁の存在を知った。

壁を作ったのは彼女だが、その原因が自分達にあることも。

（　　もしも、　　）

ユディルは考える。

もしも、王子にこのことをユディルが洗いざらい打ち明けたら、彼は己の罪を自覚するのだろうか。

もしも、自分達が心を尽くし謝罪して、彼女がそれを受け入れてくれたのなら　その先にある未来は、どんなに優しいだろう。

きつとそんなことは有り得ないと、理解している。

リオウは伝説の中の『勇者』ではなく、自分達と同じ人間だ。

自分達が彼女と同じ立場に立たされたらと考えれば、この先に描かれる未来など容易に想像できた。

（殿下……）

彼女はもう、自分達を許すことはないのだろう。

決して易しくない未来で、彼はようやく自分の罪を知るのだ。そして、ようやく自分の中にある感情に気付くのかもしれない。

（初恋は叶わないというが……）

まさしく、その通りだった。

誰も彼も、全てが遅すぎたのだ。

25 (後書き)

宰相は胃痛持ち。

彼からしてみれば王子は息子みたいなもんなので、本当は理央と結ばれてくれればいいと思ってるんですが理央に対する罪悪感などもあるので単純に王子を応援できないんでしょうね。

近頃、城内も城下も、世界中がリオウ一色に染まっていた。

世界を救った勇者なのだからそれぐらいは当然とは思っただが、他人の口からリオウの名が出る度、ヴェリオスは靄とした気持ちを抱えていた。

おかしい。

1日の仕事を終え、自室でくつろいでいたヴェリオスは、到底くつろいでいるとは言えない表情で椅子に座り、テーブルの表面を苛立ち紛れに指の爪で弾いた。

日増しにこの形容しがたい感情は、胸の内で領土を広げていく。甘くて苦くて、病気かと思うほどに苦しい。それは決して清々しいものではなく、もっとどろどろとした、感情。

その中心にあるのは、多分

「……………?」

ふと、ヴェリオスの伏せられていた瞼が持ち上がる。

扉の外が騒がしい。もう夜も遅く、殆どの者が眠りについてるだろうに　何かあったのかと腰を浮かしかけたヴェリオスだったが、それよりも先に回廊と自室とを繋ぐ扉が勢いよく開かれた。

「やあヴェリオス。邪魔するよ」

まるでここが自分の私室であるかのように堂々とヴェリオスの部屋に入って来たのは、隣国ノマライトの国王、グラエルだった。

「グラエル…陛下」

「公式な場ではないのだからグラエルでいいよ。なんなら昔のように兄上でも」

「それは遠慮させていただきます」

即答すると、グラエルはつまらなさそうな顔でヴェリオスの向かいに腰を下ろした。

あまりにも堂々とした振る舞いに文句を言う気にもならず、ヴェリオスは入り口でオロオロとする見張りの衛兵に、気にするなと手を振った。

グラエルはヴェリオスが小さい頃に留学という名目でハイグレードに4年ほど滞在しており、ヴェリオスにとっては兄のような存在だ。今でもその関係性が変わらず、こうして突然グラエルが訪問してくることも珍しくはなかった。

「何か御用ですか？」

「いや、こうしてこちらに来るのも久々だから、色々と話したくてね」

「はあ」

ヴェリオスはグラエルをなんとはなしに見つめた。強さをそのまま表したような立派な体躯と、座っているだけでも他を圧倒する威風

王という存在を体現したような男。それが、グラエル・ノマライトで、自分が持っていないものを持っている彼を、ヴェリオスは誇ら

しくも妬ましくも思っていた。
今は、どちらかと言えば妬ましさの方が勝っている。

リオウとは、どういう関係なのですか？

脈絡もなにも関係なくそう聞けたら、どれほど楽だろうか。
あの日からずっとヴェリオスの脳裏には、祝勝会で親密そうな雰囲気
を醸し出していたリオウとグラエルの姿がちらついていた。
そして本人が目の前いる今、その映像はより鮮明になってヴェリオ
スの胸を締め付ける。

軍人と並んでもまったく見劣りしない風貌を持つグラエルの隣
に立つリオウは、いつもよりもその線の細さや娘らしい淑やかさが
強調され、またグラエルもリオウの隣にすることでか空気に柔らか
さが増し、いつもより包容力に満ち満ちているようにヴェリオスに
は見えた。

互いが互いを引きたて合う2人は、似合いの恋人同士のように。
ヴェリオス以外の者の目にも同じ様にうつつたのだらう。今巷では
勇者とノマライト王の仲が噂されているようだ。
その事実が妙に腹立たしくて、ヴェリオスは無意識のうちに嫉妬と
戸惑いの入り混じった視線をグラエルに向けていた。

26 (後書き)

突然ですがヴェリオスは17〜19才。グラエルは25才。理央は16か17才くらいです。

グラエル以外の年齢は殆どアバウト。あんまり深く考えてはいけません。

(おや、まあ)

一丁前に嫉妬の視線を向けてくるヴェリオスに、グラエルは端から見て分からないくらい僅かに目を丸くした。弟のように可愛がっていた親戚が、少し見ない間に男になっていたことに驚きを覚える。それでもグラエルから見ればまだ半人前であることに変わりはないが。

さて、これを良い変化と捉えるべきか。

ヴェリオスの恐らく見当違いの嫉妬を受け流しながら考える。兄のような立場をとってきたグラエルとしては、数年前より遥かにマシな顔つきになった弟のような彼の成長を喜ぶべきなのだろうが……男としての部分が、『面白くない』と誤ってしまふ。それは多分、ヴェリオスの変化にリオウが少なからず関わっているのが要因だろう。

リオウ。そう、リオウだ。

グラエルが今夜ヴェリオスの私室を訪れたのは、兄弟のように育ったヴェリオスと、久々に仲良く談話するためではない。グラエルは 八つ当たりをしに来たのだ。

「なあ、ヴェリオス」

「はい」

「リオウを弄んだというのは本当かい？」

「っ」

唐突すぎる切り出しに、青空のような色の瞳が丸くなり、揺れる。その様子をグラエルは冷静に観察していた。

どうやら罪悪感はそれなりにあるらしい。結構なことだ。

「どこで、そのようなことを……」

「ひとりの女官が面白おかしく吹聴していたのを偶然聞いたんだ」
半分は嘘だった。

グラエルはずっと、気になっていたのだ。リオウは理由もなく他者を切り捨てられるほど冷たくはない。母もそうだったように、何かしらの理由があったはずだ。今回グラエルがハイグレードに来たのは、その理由を知りたいがためでもあった。

そして、それは質の悪そうな女官に一言一言甘い言葉をかけるだけで知ることができた。

国がリオウをいよいよに利用するため、ヴェリオスを使って彼女を騙していたこと。騙されていることも知らずにまんまと利用されたとリオウを嘲笑った女官は、グラエルに向かってこう言った。

『あなたもそうなんでしょう？』

思わずその女官を殴りそうになったが、殴るべきはこの女ではないとその場は押しとどめた。

その殴られるべき男　ヴェリオスは、忙しなく視線をさまよわせたあと、観念したように口を開いた。

「……確かに俺は、彼女を弄んだと言われても仕方ないと思います、でも」

「『仕事』だったから、か」
「……はい」

それは本当に 結構なことだ。

自分の眼光で、ヴェリオスがたじろぐのを感じたが気にしない。今グラエルが振りかざそうとしているのは正義感からのものではなく、理不尽なものだ。

グラエルは考える。

理央が何故自分達を切り捨てたのか、理由は簡単だ。

一度、酷い仕打ちを受けたから。

もう利用されないように、自分から周りを切り捨てた。それは当然の帰結だろう。

『私は、帰りたいんです』

はつきりとそう言った彼女の声は、今もグラエルの心の奥深くまで突き刺さっていた。

この想いが報われぬことを知った。それでもそばにいたいから、想いに蓋をした。

リオウは、グラエルにとって何ものにも代え難いひとだ。

人として、友として そして、女性としても。

想いに蓋をしても、それは変わらない。だって、捨てたわけではないのだから。

だから、グラエルは思ってしまふ。もし、国がリオウを利用しようとしなければ、違う未来があったのではないかと。

「ヴェリオス。俺はね、もし望みがあるようならリオウに求婚しよ

うと思っていた」

「は？」

一国の王子としては余りにお粗末な反応だ。驚きを露わにするヴェリオスを前に、グラエルは笑みを深めた。笑うのが下手、と彼女に言われたことがある。でもそれはリオウに對してだけだということを彼女は知らないのだろう。

（貴女だけ、なのにね）

彼女を前にすると、自分を取り繕うこともできなくなる。そんな妙に苛立たしくて、幸せな感情をグラエルに教えてくれたのはリオウだ。

「もし彼女が受け入れてくれるのならば、王妃にと思っていた」

それは、なんて甘美な想像なのだろう。

彼女が隣にいて、自分と共に歩んでくれる。ただそれだけで、幸せを感じられる。グラエルがもつと傲慢であれたなら、或いはそれを実行していたかもしれない。

「でも、できなかった」

だって、どれだけ想像したところで、グラエルの隣に立つリオウは笑っていなかったから。

所詮、自分も臆病なただの人間なのだと思い知らされる。

リオウに、母のような顔をさせたくなかった。そして自分にも、そうさせない自信が持てなかった。

言葉も出ない様子のヴェリオスに笑いかける。

こうしていると、鏡を見ているようで酷く苛々した。

「なあ、ヴェリオス」

そこにあるのは、ひとりの愚かな男の、顔。

「リオウにはリオウの世界が、家族があることを、どうしてみんな気付けないんだろうな？」

代わりがきくことのない世界は、誰の中にもあるはずなのに。

27 (後書き)

王子の方もグラエルに劣等感を抱えています。グラエルも王子に対してコンプレックスみたいなものはあると思います。

っていうか王子がわりと他人をイラッとさせるタイプ。

大事に大事に育てられた上、それが普通だと思っている人間って、それなりに辛酸を舐めてきた人にとっては見ててイラっとなるんじゃないかと。

別に嫌いあってるわけじゃないのです。

どうして自分だったのだろうか、理央はずっと考えてきた。

召喚される勇者の条件は『こちらの神が干渉できる人物』とされている。神は誰にでも加護を与えられる訳ではないらしい。その干渉できる人物にも、与えられる加護の量にそれぞれ制限があり、理央はそれなりに多く加護を受け入れられたからこそ、ここにいる。

理央はいわば、選ばれた人間だということだ。全く嬉しくないが。

理央が考えるのは、他にも当てはまる人物がいるはずなのに、どうして自分だったのかという話だ。

たとえば、理央以外に喜んで勇者をやってくれるような人はいなかったのかとか、そうでなくとも男性の方がよかったのでは、とか。色々、色々 考えてきた。

考えても仕方のないこと。そんなことは分かっている。

(こんなのばかりだ)

たとえば、もしも。

それで現状が変わるわけでもない、知ったはずなのに。

「理央……」

理央は目を開けた。

真っ暗な空間に浮かぶ、光の球。まだあれから1ヶ月もたっていない

はずなのに、妙に懐かしく感じた。

「お久しぶりです」

「還る方法は、見つかった？」

開口一番に聞くべきは、やはりそれだろう。自称神は、ゆっくりと明滅を繰り返しながら理央の前をふよふよと浮いている。

「まだ、確証はありませんが…恐らく」

「可能性はあるのね？」

「はい」

「世界に影響は？」

「ありません。ただ、今すぐという訳にもいきません」

「時間がかかるの？」

「ええ」

「どれくらい」

「5年……くらいでしょうか。ですが還った時には、向こうの世界と貴女の時間を貴女が召喚された時まで時間を巻き戻させます」

5年　理央はその言葉を噛み締めた。

それは多分目安としての数字。本当はもっとかかるかもしれない。でも、その時間を耐え抜けばこれまでの時間を、今度こそ夢にすることが出来る。

ならば、理央が出すべき答えは一つだ。

「分かった。どうすればいい？」

ぴた、と動きが止まる。

「……迷わないのですね」

「私は、帰れるのならなんでもいいの」

願いはずっと、一つだけだった。

理央の家族は特に仲のいい家族なわけでもない。友人だつて、理央がいなくなっても大して支障はないだろう。

もしかしたら、こちらの世界の人達の方がずっと理央を求めている人は多いのかもしれない。でもそれがなんだというのか。

郷愁に、理由などないのだ。

だからこそ、そう簡単に消すことはできない。こちらに喚ばれてから理央はそのことを知った。

「帰った時には、向こうの時間は殆どそのままなんでしょう？
だったら、問題ない」

ああ、でも　と理央はそこで一旦区切ってから、にっこりと笑む。

「少々待たしておいて、いざ帰るって時にまた『できません』なんて言いやがったら　今度は私、何するか分からないから」

「は、はい、それは重々承知してます」

ならいいのだけれど、と理央は殺気をしまい、口を開く。

「それで、私はどうすればいいの」

28 (後書き)

男2人が生産性の無い会話をしている間に、理央は帰ることを決めました。

こっから理央視点中心で進んでいきます。

「すみません、突然お呼び立てするような真似をしてしまって……」

一国の主を前に恐縮する理央に、その一国の主は孫を見るような目で理央を見、朗らかな笑い声を上げた。

「そう恐縮せんでも、とって食いはしない」

「はあ……」

謁見の間ではなく応接間のようなつくりの部屋で相對したハイグレード王は、目線がほぼ同じところにあるせいか、いつもとはまた違うように見えた。

妙に威厳のある好々爺というか、なんとというか。なんだか変に緊張する。

しかも長椅子に腰掛けた王の後ろには、宰相が人のよさそうな笑みを浮かべて王と理央とを微笑ましげに見守っているものだから、妙に気恥ずかしい。

「そなたが魔竜を倒してくれてから、急に具合が良くなってな。医者にも驚かれたよ」

そう言った王の口調は、確かに謁見の時よりもはきはきとして希望に満ちている。

「だからこれくらい、どうとということもない」

「……ありがとうございます」

何を言うべきか迷って礼を述べると、「礼を言うのは私の方だろう」

とまた笑われてしまった。

本当に、元気そうだ。

理央は膝の上に置いた手を握りしめた。

「あの、お話があるんです」

「おお、そうだったな。なんの話だ？」

握りこんだ爪が、手のひらを突き刺す。

「城を、出ようと思います」

間。

何秒か、何分かの沈黙が部屋に落ちて、理央の神経をすり減らした。

「それは、短期的に、という意味ではなさそうだな」

やがて返ってきた声は、ついさっきまでとはまるで違う、疲れきったような継るような声だった。

理央は小さく顎を引いた。

「城を出て、どこへ？」

「まだ決めていません。ですが……どこか、人のいないところへと考えています」

「……何故、そんなことをするのか聞いても？」

「私が、私のいるべきところへと帰るためです」

そのためには、ここにずっと滞在するわけにはいかないのだ。理央は神の言葉を思い出す。

『貴女をすぐに元の世界に還すことができないのは、貴女がわたしの子らに慕われすぎているからです。だが、嫌われれば良いという訳でもない。強すぎる憎しみもまた、貴女を引き止める枷となるでしょうから。』

好かれすぎるのでも、嫌われすぎるのでもいけない。

一番いいのは、忘れられることです』

だから、理央が今いる状況は還るためにはとても良くないと言われた。

要するに理央は民衆の目からフェードアウトしなければならぬ。突然消えるのではなく、徐々にその姿を消していけば理央を勇者として慕う人々からの枷はなくなるという話だった。

「いるべき所、か。……そうか、あなたにとって、ここはそうではなかったか」

「……はい」

眉間の皺を深くして言った王に、理央は逡巡しながらもしつかりと頷いた。

同情などしてはいけない。それは、これから去る人間がしていいことではない。

王はしばらくの間、瞑目していた。

理央はじつと、彼の言葉を待った。

「私は、幼い頃よりずっと、勇者の伝説を聞かされてきた。

その強き力と優しき心は、私の憧れだった。魔竜が現れてからは勇者の降臨を待ち望み　そしてあなたは、伝説その通りの力と優しさを持って、私達の世界を救ってくれた」

王はそこで一旦言葉を区切っていた。そして、細く息をつく。

「だが……本当は、気付いてもいたのだ。召喚された勇者が、伝説の中の存在ではない、1人の人間であることも。リオウ、貴女にはどれだけ感謝と謝罪をしても、足りない。

すまなかつた」

一国の王に頭を下げられて、理央は一瞬何を言っているのかすら理解できないほど戸惑った。

王は頭を下げたまま、続ける。その姿はまるで懺悔をするようでもあった。

実際、そうだったのかも知れない。

「国のため、と言いながら貴女にはとんでもない重荷を背負わせてしまった上……貴女はもう気付いているだろうが、息子を使って貴女を騙そうとさえした。

全ての責は、私にある。この老いぼれの身で罪が全て購えるとは思ってはいるが、どうか　許してほしい」

「そん、な」

そのあとに続く言葉を、理央は飲み込んだ。巻き起こったのは、あまりにも醜い感情の渦。

例えばこれが、理央が騙されたと知った直後だったならば、感情のままに怒り、詰り、けれど最終的には許せたのかもしれない。

しかし今更そんなことを言われても、理央には怒ることすら出来なかった。

「陛下、頭をあげてください」

「しかし、」

「もう、私の中ではそのことは、許すとか許さないの問題じゃないんです」

そう、理央の中の感情はそんな段階にはないのだ。

理央は唇を噛んだ。ここで、あの日覚えた怒りややるせなさを吐き出したとして、きつと周りは愚か自分さえも傷付けるだけだ。

「リオウ」

「っもうそのことには、触れられたくもないんです！」

ようやく塞がりかけていた傷口を抉って、一体何になるのか。いや、彼らは謝罪したことに満足を得るのかもしれない。だが 理央は？

許すこともできない自分は、どうすればいいのだろう。

大きく空気を震わした理央の声は、けれどすぐに溶けて消える。

まるで自分のようだと、思う。

ほんの一時空気を揺らしても、すぐにその空気に飲み込まれてしまふ。

（駄目、だ）

許してはいけないのに、許してしまいそうになる自分が、一番許せなかった。

『そして、もう一つ。貴女が特に関わってきた人とは、城を出る前に一度話をしてください』

『話って……なんの？』

『元の世界へ帰ることを。とにかく、はじめをつけていただきたいです』

そう、はじめを着けに来たのだ、理央は。

「リオウ……」

王の途方に暮れたような声を聞いて、理央は幾分か冷静さを取り戻す。

「私は、故郷に帰りたいがために、今日までやってきました。自分の為です。この世界の為でも皆さんの為でもありません」

だから、と続ける。

好かれようだなんて思っではいけない。

もう、枷は外さなければ。

「感謝も、謝罪も要りません。

私が望むのは、自由です」

理央は真っ直ぐ前を向いてそう言いきった。

「……そうか」

答えた王は、がくりと落ちた肩のせいがこの数分ですっかり老け込んで見えた。

その光景に、僅かに胸が痛んだ。けれど気付かないフリをして、膝に視線を落とした。

まるであの頃に戻ったようだ。

いきなり召喚されて、勇者なんて肩書きを押しつけられて、1人で心細くて俯いてばかりいた頃の理央に。

はじめて対峙した時の王は今にもぽっくり逝ってしまっただけじゃないかと思うほど弱々しく、理央は自分の状況も忘れてすっかり心配してしまったのを覚えている。だからだろうか、理央はそこまで王に対しては嫌悪感を抱いてはいない。

(だから、駄目なんだ)

もっと悪い人とか、元氣そうな人が相手であれば理央だってまだここまで良心は痛まなかつたはずだ。

けれど王は、いい人だった。

この数十分の間の王の言葉が、態度が理央にそれを教える。

もっと息子のように悪びれないひとであれば　と理央が思っていたところに、王の溜め息が重なる。

「……そうだな。それが貴女に対する一番の礼であり、償いなのだから」

「では」

「ああ、好きにするといい」

しわくちやの顔を更にしわくちやにして述べた王に、理央は自然と頭を下げていた。

「ありがとうございます」

歓喜と、ほんの少しの寂しさを噛み締める理央の頭に、「ただ」と王の声がかかる。

「ただ、ひとつだけ貴女に頼みたいことがある」
「頼み、ですか」

訝り顔を上げた理央に、「個人的なことだ」と前置いてから王は口を開いた。

「息子のことだ。あれは恥ずかしいことに、中身はまだまだ子供でな。

貴女が帰ると聞いて、みつともなく駄々をこねるかもしれない。

その時は一度だけでいい。話を聞いてやってはくれんか」
「……………」

父親の顔でなかなか厄介な頼み事をした王に、理央は正直言葉に詰まった。

ヴェリオスは理央のトラウマそのものだ。彼の話を知ること
は いや、彼が駄々をこねると思えないが、もしあったとして
そのトラウマと対峙するということだ。

（でも、彼ともけじめをつけないといけない……………の、かな）

殿下が理央を失いたくないと願っているとは理央には到底思えないが……………まあ、関わりならばあったし。一度話はしておいた方がいいかもしれない。

理央は迷ったが、結局頷いた。

「わかりました。一度、だけなら」

不承不承といった感じが顔にでていたのだろう。王は「ありがとう」とほろ苦く笑った。

扉の閉まる音のあと、室内に重く長い溜め息が響いた。

「陛下……」

宰相は、うなだれた王に対し言葉を見つけられなかった。

王と同じように、自分もどうしたらいいのかわからなくなるほどの衝撃を受けていたからだ。

リオウが城を去る。それは、考えてみれば当然の帰結だったのかもしれない。

自分達が今までやってきたことを考えれば、むしろ今まで城に滞在してしてくれたことの方がおかしかったのだと思う。

自分達はずっと、彼女の優しさに甘えていた。理解していたはずなのに、実際に感じたりリオウの怒りや戸惑いが、胸を抉る。

「後悔すること、許されぬ……か」

王の呟いた言葉が、抉られた胸に染み入る。感謝も、謝罪も不

要と言いつつたりリオウの顔は、はつきりと宰相らを拒絶していた。

もう関わりたくないのだと、あの澄んだ瞳が物語っていた。

我々は一体なんなのだろうと宰相はずっと疑問に思っていた。

リオウはこちらに来るまで剣を握ったこともなかったという。

そんな彼女に剣を握らせて、魔物と戦わせて、ただひたすらに救いを待つ我々は、一体なんなのだろうと。

民が窮地に陥る度ハイグレードは勇者を召喚し、そして世界が救われる。それがこの世界の『普通』だった。けれどその一方で、戦うことを厭い、「帰りたい」と嘆いた勇者がいたこともユディルは知っていた。彼らは今では誰にも語られることなく、限られたもののみが見られる歴代の勇者の記録でのみ、記述が遺っている。

『失敗』として扱われた彼らの末路は、往々にしてひどいものだった。

ある者は自ら命を絶ち、ある者は「勇者にふさわしくない」と始末され、ある者は、その力を人間に向かって振り回した。

(救いを待つだけでは、駄目だ)

うなだれたままの王の前に、ユディルは決意する。

悪しき慣習を無くしたところで、きつと自分達の子孫はまた同じ過ちを繰り返すだろう。

そうではなく、自分達の世界を、自分達で救えるようにならなければ 勇者という役目を、なんの関係もない異世界の人間に負わせることのない世界にしなければならない。

きつとそれが、彼女に 彼女達に、我々ができる唯一の償いだろうから。

31 (後書き)

宰相を書くのが本当に難しい……

32 (前書き)

毎度短くてすみません。本日二回目の更新です。

「あ、グラエル陛下」

庭園でぼんやりしていたグラエルに声がかかる。それは愛しいひとのもので、グラエルは些か驚きながらも振り返った。見ればグラエルに向かって、彼女が駆けよってくるところだった。

「ようやく見つかった……お付きのひとを探しましたよ」

「探してくれてたの？」

「あ、はい。お話があって」

すぐそばにまで来たリオウがそう言って笑むので、グラエルは心が綻ぶを感じる。

そんなそわそわとした空気が漏れ出ていたのだろう、リオウがグラエルを見上げて不思議そうに首を傾げた。

「どうかしました？」

「……どうして？」

「なんだか嬉しそうだったので」

グラエルは口元をゆるめた。

貴女が自分を探してくれた。それがたまらなく嬉しいなんて言っても、リオウは信じてはくれないだろう。

「なんでもないよ。それで、話って？」

だから、グラエルはゆるめた口元はそのままに、リオウを促した。

「そう。帰るの」

その時自分が何を思ったのか、それは自身にもよく分からなかった。ただ、唇から零れでたのは、安堵したような、置いて行かれた子供のような　そんな声だった。

リオウが、帰れることになったと言う。

「今すぐ、という訳ではないのですが……城は近い内に出ようと思ってます」

自分の気持ちを掴みかねているグラエルとは対象的に、彼女はとも自然に微笑んでいた。ようやく故郷に帰れることになって、気負うものがなくなったのだらう。

ぐっと柔らかかみを増した雰囲気、こちらまで幸福になる。

これでよかったのだ。元よりリオウの幸せは、こちらには無かったのだから。

「そうか。…もう、会えなくなるのか」

だからといって、寂しさがなくなるわけでもないけれど。

自分も自由な身ではない。そろそろ自国に帰らねばならないだろうし、そうなればたとえ同じ世界にいたとしても、リオウとは会うことができなくなる。

会うのはこれで、最後かもしれない。

その思いが、グラエルの背中を押した。

「リオウ」

右手を上着の内ポケットへと潜らせる。

ずっと渡したいと思っていた。けれど渡せずじまいだった。彼女を困らせるだけだと、思って。

でも、最後に、一つだけ叶うのであれば

「我がママを、言ってもいいかな」

懐から取り出したそれは、きらりと日の光を反射して煌めいた。

(ゆび、わ?)

グラエルが懐から取り出したものを見て、理央はぱちりと目を瞬いた。

日の光を反射して輝く華奢な銀色のソレは、紛れもなく女性用の指輪だ。それと彼の我が儘と、何の関係があるのだろうと理央は視線を指輪からグラエルへ戻すと、彼はどこか苦しそうに笑って指輪を差し出した。

「これを、貰ってほしい」

「え……?」

「貴女の指に合うか、自信がないんだけど」

「や、ちょ、ちょっと待ってください。」

「こんな高価そうなもの、いただけませんっ」

思いもよらないことに言葉を失っていると、左手をとられ指輪を少し強引に渡されそうになり、慌てて手を引っ込めた。

一体どうしたというのだろう。ノマライトに居た頃されたこういつた贈り物は全て突き返したし、この間だって未だに増え続けている色んな人からの貢ぎ物について愚痴を零したばかりだ。理央がこういうものを単純に喜べない性質なのは、グラエルが一番よく分かっている。そういうものなのに。

(それに、指輪なんて)

理央が躊躇する理由は他にもある。

こちらの世界ではどうか知らないが、理央の育った世界では数あるアクセサリーの中でも指輪は特別な意味を持つことが多い。それが左手薬指に填めるものでなくとも、友人相手に指輪を贈るような人は中々いないはずだ。

その慣習は彼に教えたことがあったらどうかと理央が混乱しながら記憶を探っていると、グラエルは指輪を差し出したまま口を開く。

「貴女の世界でも、指輪は特別なものなのだろうか？」

俺の国でも親しい身内や友人、それに恋人が戦地に赴く時には相手の無事を祈って指輪を贈る風習がある」

「は、はあ……でも」

「受け取って。故郷に帰る時には外して捨ててくれても構わない。」

でも、それまでは身につけていてほしい」

「……どうして」

どうしてそこまで？

喉まで出かかった言葉はしかし、口にだすことはなかった。

それは聞いてはいけないことだと直感が教える。暴いてはいけない、暴いてしまえばもう戻れなくなると。

理央はしばしグラエルと見つめ合った。熱っぽい金色の瞳は、飽きることなく理央を映している。

言葉より雄弁なその表情は理央の心をざわめかせる。

気付いては、いけない。

自分がソレを受け入れることは絶対に有り得ないと分かりきっている。知ってしまえば、自分も彼も傷付けるだけ。

だから、

「……ありがとうございます」

彼の手の中できらきらと輝くそれだけを、理央は受け取った。

グラエルから理央の手へと渡った指輪をじっと見つめる。はめ込まれた蜜色の石がまるで理央を見つめ返しているようだった。

「陛下の瞳と、同じ色ですね」

「指輪以外でもそうなんだが、ノマライトでは相手を見守るといっ願いをこめて、自分の瞳と同じ色の石を贈るんだ」

御守りのようなものなのか。どこかホツとしているようにも聞こえるグラエルの声を聞きながら、理央は左手の中指に指輪を填めた。彼が心配していたサイズは、ぴったりだった。

「大切にします」

蜜色の部分を指でなぞってから、理央は顔を上げた。

自分は上手く笑えているだろうか。

想いを受け入れることは出来ずとも、せめてこの喜びだけは彼に伝えなければいい。そう、願った。

33 (後書き)

グラエルとは割とあっさり。もっとながった感じがした感じでも良かったかなーとも思わなくもないですが。

グラエルに理央なりのけじめを付けた翌日、理央は鍛錬場へと来ていた。

よく晴れた空の下、整列して掛け声と共に剣を振るう兵達と、彼らに喝を飛ばす、遠目に見ると本当に山のような大男。

「おら、もつと声出せ！」

その巨軀と、相変わらずの大音量のおかげで探し人は容易に見つかった。

ロドル・ゴラント將軍。彼が帰還していたのは知っていたが、理央が忙しかったのもあり手紙を託されたきり会うことは叶わなかった。

(少し待った方がいいか……)

戦が終わってすぐだというのに いや、すぐだからこそなのか

真剣に鍛錬する彼らの邪魔をするのも忍びなくて、一段落するまで待つことにした理央。急がない話というわけでもないが、30分かそこら待たされても特に問題はない。

柱に背を預けて待つ体制に入ろうとした理央だったが

「あれ、勇者だ」

「本当だ、勇者様だ」

「どうしてこんなところに」

誰か1人の兵の声をきっかけに、自分に視線が集まってくるのを感じ

じた。

自分が有名人なこと、忘れてた。

「勇者」という名詞が飛び交うざわめきによって、彼も理央の存在に気付いたらしい。理央を見つけてぶんぶんと手を振ってくる。

「おうー！リオウじゃねーかー！」
「……………」

そのロドルの行動が決定打となり、鍛錬場の兵達の視線が一気に集まって……思わず、溜め息が出た。

「そうかあ、帰っちゃうのか……」

故郷に帰れることになったことと、城を出ることをロドルに告げると、立派な肩を落として残念がってくれた。

「……まあ、家に帰れるんだもんな。よかったなあ！リオウ」
「痛いから」

けれど次の瞬間にはロドルは笑顔でバシバシと肩を叩いてきたので理央は彼から少し距離をとる。
本当、何もかもが相変わらなずだ。これがロドル・ゴーラントで、彼のいいところでもあるのだけれど。

「それで、クリスティーナさんや、セイとレイに挨拶しに行きたい

「んだけど」

「ああ……ん？ セイとレイは連れてかねえのか？」

「妙なところで鋭いのも、相変わらずだ。」

理央は表情を引き締めた。

「そのことについても話があるから、なるべく早くに時間をとって
もらいたいんだけど」

「…ふうん。じゃー晩飯食いにくるか？ 今日」

「きょうって……いいの？急にお邪魔して」

「なに言ってるんだ。お前は家の子供みてーなもんなんだから、邪魔
もなにもねえだろ」

一切の裏を窺わせない笑顔でそう言ったのけたロドルに、理央は安
堵する。

「ありがとう」

胸に巣くっていた不安や心配が、僅かだが和らいだ気がした。

++++

「リオウ！！」

玄関が開かれた途端タツクルの勢いで飛び出してきた人物にがしりと抱きつかれ、理央は数歩よろめいた。

(と、とっ)

玄関前は石の階段があるため転けたらしゃれにならない。なんとかバランスを保ち、理央は自分をぎゅうぎゅう抱き締める彼女の背に手を回した。

「久しぶり、クリスティーナさん」

「ああもっつ、あなたっいたら全然顔を見せにこないのだから。」

私がどれだけ心配したか、ちゃんと分かってるの?!

「く、苦し」

ほっそりとした体のどこにそんな力があるのかというくらい強い力で抱きしめられ、ぎしぎしと背骨が軋み、胸よりも少し上あたりに押し付けられる柔らかなふくらみも、今は理央の気道を圧迫する凶器と化していた。

しかし彼女は止まらない。

「なんだか痩せたんじゃない?お城の人達はちゃんと食べさせてくれているの?お腹にたまらないお上品な料理ばかりだったんじゃない」

まあ!顔色も悪いじゃない!」

そこでようやく男性のロマンであり女性の夢でもある魅惑的な体が僅かだが離れ、理央はようやくとまともに呼吸することができた。

本当、似たもの夫婦というか、なんというか。

クリスティーナの方が同性であるためか夫よりも遠慮がないので、ロドルのパワーアップ版というべきかもしれない。

粗が全く見当たらない整った顔を間近で見ながらそんなことを考え

ていると、そつと顔をクリスティーナの手が挟む。

「……ちよつと見ない内に、随分と綺麗になつちやつて……もう一人前の娘ね」

「会いに来るのが遅くなつて、ごめんなさい」

「そんなこといいのよ。リオウは、私が腕によりをかけて作った料理をいっぱい食べてくれればそれでいいの！」

「……はい」

「俺も腹一杯食うぞ、ティナ！」

「あんたはそこら辺の雑草でも食つてなさい」

それまで理央の隣で置いてけぼりをくらっていたロドルが会話に突然乱入してきて、クリスティーナに冷たい言葉を浴びせかけられる。

彼らと知り合つて間もない頃は、夫に対して常に喧嘩腰なクリスティーナに理央も狼狽えたが今ではこれが通常営業だと知っているの
で苦笑するのみに留める。

「私がいくら背中叩こうがお尻を蹴ろうがリオウを家に連れてこれなかつたくせに」

「俺もリオウも忙しかったんだつて」

「黙らつしゃいこの穀潰し。リオウ、こんなバカほつといて行きましよう！」

「おい、待てつて……」

クリスティーナが理央の手を引っ張り、家の中をずんずん進む。その後を追いかけてくるロドルの情けない声。

慣れてくると夫婦漫才のようにも聞こえてくる会話に、理央は久々に声をだして笑った。

屋敷の中に入ってもセイの姿が見えないと思ったら、クリスティーナが買い物を頼んだらしい。

「リオウが来ることまだ話してないから、きっと帰ってきたらびっくりするわよ」

廊下を歩きながらエメラルドグリーンの瞳を少女のように煌めかせて言ったクリスティーナは至極楽しそうだ。

よかった。ゴーラント家のことだから特に心配はしていなかったが、セイとレイはこの家に馴染んでいるようでリオウは安心する。

「ごめんなさいクリスティーナさん。レイだけでなくセイの面倒まで押し付けるようなことになってしまった」

「あらいいのよ。セイが来てくれるから家は家も助かってるもの。力仕事や子供達の面倒も見てくれるし」
まったく、うちの夫にも見習わせたいくらいだわ。

ぷんぷん怒るクリスティーナはとても二児の母親とは思えないほど可愛らしく、理央の唇も思わず綻ぶ。ちなみに件の夫は、そのぐうたらぶりを遺憾なく発揮し居間でごろごろしている。多分今頃好奇心旺盛な子供達が、あの山のような体躯によじ登っていることだろう。

「あの子もしばらく見ない内がいい男になったわねえ……っと、私ばかりリオウを独占しちゃだめよね」

ある扉の前で立ち止まったクリスティーナが、振り返って苦笑する。理央も笑みを返してからチョコレート色の扉へと視線を移した。

自然と小声で話してしまう理央も共犯になるのだろうか。

「レイにも私ができること」

「知らせてないわ。夕飯までまだ時間があるから、ゆっくりしてらっしゃい」

じゃ、あとは若いもの同士で……なんて言いながら去っていくクリスティーナに会釈してから、理央は扉をノックした。
一拍の間を置いて「はい」とくぐもった声が返ってくる。

「ええと……理央、です」

ノックをしたものの何て声をかけるか考えていなかった理央の第一声は、どうにも情けないものになった。

（まあ、仕方ないか）

セイとは行動を共にしたが、レイは奴隷時代の主の酷い仕打ちにより足が不自由なこともあつて、ゴーラント家に預けたきり時折口ドルから近況を聞くくらいだった。

考えてみれば、レイのことはセイがロドルから聞くばかりで、レイ本人から聞いたことは数えるほどだ。

一応恩人とはいえ、すぐ他人にその面倒を押し付けた『勇者』が突然現れたら彼はどんな反応をするのか。決して前向きとはいえない想像をしていると、部屋の中からどごっという音が聞こえた。何か重いものが落ちる音だ。

理央はもう一度扉をノックし、中に向かって呼びかけた。

「レイ？　どうかした？」 「い、いえっ。大丈夫です」

「……入るよ？」

あまり大丈夫でなさそうな返答に、心配が勝り理央はドアノブに手をかけた。

きい、と僅かに軋んだ扉が開いていくと、ベッドの上で身を起こしているレイと目があった。

ちゃんとベッドにいるレイを見て、どうやらさっきの音はレイがベッドから落ちた音ではないらしいとわかり安堵する。

理央はレイに向かって笑みを浮かべた。

「久しぶり、レイ」

対するレイは驚きに目をみはり、やがて、震える唇からようやくといった風に声を絞りだした。

「本当に、リオウ様……？」

「うん。ごめんね、会いにくるのが遅くなって」

「リオウ様っ…！」

レイが瞳を潤ませて、両手のみでこちらへと這ってこようとしたりで、理央は慌てて自分から相手に駆け寄った。

「レイ、無茶しないで」

「リオウ様、リオウ様……」

理央の言葉など耳に入っていない様子でレイが手をのばし、理央を抱きしめる。兄と比べると華奢で、若干頼りなくもある骨ばった体は、けれど理央よりも大きくて、彼も成長しているのだと妙に感慨深い気持ちになった。

リオウ様、リオウ様と頭上から降ってくる声は止むことはなく、その余りにも必死なレイの声に、振りほどくこともできず身を任せる。

（大丈夫かな……）

まだ薄くはあるが、出会った頃よりは大分マシになっただろう胸板に頬を預けた理央の胸に甦るのは、不安だった。

レイと、セイ。

理央は、彼らにもけじめをつけにきたのだ。

別れという、けじめを。

一頻り理央の名を呼び、抱きしめたあとようやく落ち着けたのか、レイが理央から離れる。手だけは、繋がったままだったけれど。

「お仕事はもういいのですか？」

照れたように微笑んでレイが言ったので、理央はうん、と頷いた。

「大分落ち着いてきたかな。……ずっと会いにこれなくて、ごめんね」

「いえ、いいんです。こうして会いに来てくれたら、それで……」

レイが頭を振り、繋いだ手に力が籠もる。まるで幼子が母親から離れまいとするようなそれは、微笑ましくもあるがどこか切なくも感じた。

「でも、驚きました。いらっしやることを聞いてなかったから」

「ああ、それはクリスティーナさんが……」

と、苦笑しながらこれまでの経緯を話そうとした理央の耳が、どたどたという騒がしい音を捉える。

子供達が走り回っている音にしては少し重い音だ。なんだろうとレイの顔を窺えば、彼はにっこりと笑んでいた。

「多分、セイですね」

「セイ？」

お使いから帰ってきたのだろうか。いやでも、彼はこんな慌ただしい走り方はしなかったと思うのだが　と理央が考えている内にも

音は近付いてきて、扉が勢いよく開かれた。

「リオウ様?!」

果たして部屋に現れたのは、レイの言うとおり息をきらしたセイの姿だった。

これが双子の神秘というやつなのだろうかとか考えていると、徐に近付いてきたセイに抱きしめられる。

堅い筋肉の感触を感じるのと同時に、汗の匂いが鼻を掠めた。

「ちょ　セイ?」

「リオウ、さま…」

突然の抱擁に、理央は戸惑う。半年以上　いや、もう一年は会っていなかったレイは仕方ないとして、セイは1ヶ月前に別れたばかりだ。

もっと落ち着いた再会になると思っていたのに、熱烈な抱擁を受けて、その上レイよりも熱のこもったような声で名を呼ばれ　理央はどうしていいか分からず、とりあえず空いている方の手で宥めるように彼の肩を叩いた。

「セイ」

なるべく柔らかい声を意識して名を呼ぶと、拘束が僅かに緩んだ。少し見ない間にまた背がのびたんじゃないだろうか。顔をあげると思ったよりも上の位置にセイの顔があった。

彼は泣きそうな、けれどこの上なく嬉しそうな表情をしていた。

「びつくりしました……買い物から帰ってきたら、クリスティーナさんに貴女が来ていることを聞いて……」

ここまで急いで来た、と。どうやらそういっことらしかった。
今更自分のしたことに照れを感じたのか、目元を赤くしながらセイ
が訪ねる。

「今日はどうして？」

「…色々話したいこともあって、夕食に誘ってもらったの
話したいこと？」

「うん…まあ、それはあとでね」

理央は曖昧に微笑んで誤魔化した。

36 (後書き)

ようやくと双子と再会できました。

皆でとった夕食の時間は和やかに、時々騒がしく過ぎていき　そして、理央は食後の少しまったりとした空気が流れる中、城を出ることをクリスティーナに話した。

「そう……寂しくなるわね」

子供達と双子には一旦別の部屋に移ってもらっている。まずはゴーラント夫妻だけに話を通すことにしたのだ。

城を出て、どこか遠くでしばらく過ごすことを話すとクリスティーナは悲しんでくれていたが、それが理央が故郷に帰るためであることを告げると、彼女も夫と同じように喜んでくれた。

「向こうの世界にはご両親がいるんだものね。早く帰ってあげないと」

「はい……今まで、ありがとうございました」

理央は夫妻に向かって頭を下げた。

この人達にも本当に世話になった。最初ロドルに強引に屋敷へと連れていかれた時は驚いたが、クリスティーナが作ってくれた暖かいご飯を食べたり、子供達が理央の都合を構いもせず遊べとせがんでくるのに根負けして遊んであげたりしている間に、この家は理央にとっての数少ない落ち着ける場所になっていた。

時々、暖かすぎて、落ち着けすぎて……怖くなるくらい。

けれど、帰れることが決まった今は、素直に感謝ができた。

「色々と セイとレイのことも、ありがとっございました」

「やだ、そんなこと気にしなくていいのよ。家は賑やかなのが好き
なだけなんだから」

「そうだな。お前も、セイもレイも、皆俺達の子供みてえなもんだ
と思ってる。だから遠慮すんな」

「あら、あなたにしては良いこと言っじゃない」

ぺしんとクリステイーナがロドルの太い腕を叩き、居間に和やかな
空気が流れる。

理央も微笑んで夫婦のやり取りを見守っていたが、テーブルの下で
は両手をきつく握りしめていた。

暖かな空気に包まれば包まれるほど、理央の心はちくちくと
した痛みに苛まれる。

(分かってる)

分かっているのだ。理央がこれから言うことが、自分勝手なこと
であることは。

でも、言わなければ。理央自身のためにも、彼らのためにも。

頼れるのは、この人達だけなのだから。

「ゴーラント將軍、クリステイーナさん」

決意を固めて呼ぶと、見つめ合っていた二対の瞳が理央を映す。

「どうかしたの？リオウ」

「……お願いが、あるんです」

苦しげな声音から何かを感じ取ったのか、クリスティーナの表情が
気遣うような声で「お願い？」と聞き返してくる。

理央は小さく顎を引いた。そして、唇を開く。

「はい　私が居なくなつたあとも、セイとレイのことを、お願い
したいのです」

クリスティーナが目を瞬く。ロドルは……もしかしたら予想してい
たのかもしれない、腕を組んだまま理央をじっと見つめていた。
クリスティーナが震える声で確認するように問うてくる。

「それは……あなたが異世界に帰ってから、ってことではないのね
？」

「はい。一人で王都を出るつもりです」

「彼らを捨てるということ？」

「……はい」

ずっと、考えていた。

人間は、誰とも関わらずに生きていくことなどできはしない。理央
も、この一年間誰かしらと関わってきた。

その中には、関わっていく内に簡単に切り捨てることなど出来なく
なってしまった人もいて　　セイとレイは、その最たる者だっ
た。

もしかしたら、少し離れていた間に彼らの執着とも呼べる強い情も
弱くなっているかもしれない。ここに来るまで、そんな希望を抱い

てもいたけれど……理央は抱きしめられた時の感触や、降ってくる愛おしげな声を思い出す。離れていた時間は、彼らの理央に対する執着をより一層強めただけのようにだった。

だからこそ、捨てなければと……そう思う。

(だって、このままいけば……きっと)

ぎゅっつと手を握りしめて、理央はまだ戸惑いを見せるクリスティーナと黙ったままのロドルに向かって再び頭を下げた。

今度は感謝ではなく、懇願の意味をこめて。

「お願いします。彼らが1人で　いえ、2人で歩いていけるようになるまででいいんです。

自分勝手なことを言っているのは重々承知です。ですが　私にはあなた達しか、頼れる人がいない」

もし受け入れてもらえたなら、理央は自分の持つてるものをできるだけ彼らに残していくつもりだった。ただのエゴでしかないとは分かっているけれど、理央にはそれぐらいしかできないから。しんとした居間に、クリスティーナのためらいがちな声が響く。

「ねえ、リオウ　」

彼女が何かを言いかけた、その時だった。

がたっ

「どづいづ、ことですか」

物音と、聞き慣れた声。

理央が頭を上げて声のした方を見ればそこには
睨む、セイがいた。

暗い瞳で理央を

37 (後書き)

修羅場の予感。

部屋まで運んでベッドに下ろすまで、レイは難しい顔で黙り込んでいた。

きっと、自分も似たような表情になっているだろう。

「何の話をしているのかな」

「うん……」

夕食のあと、ゴーラント夫妻とリオウだけで話したいことがあるからと居間から追い出された。

深刻な話なのだろうか。来たときからずっとどこか表情に陰りのあったリオウの姿が頭をよぎる。

「なんだか、イヤな予感がするんだ」

眉を寄せて呟くと、レイからも「そうだね」と同意見を貰った。

いつも、微笑む時はどこか寂しそうに、困ったように微笑むひと。けれど、今日のリオウはいつもとはまた違ったように感じた。苦しそうなのは相変わらずだったけれど、まるで、気負うものがなくなっただよう。

「……セイ」

「ああ」

片割れに名を呼ばれて、セイははつきりと頷いてから踵を返した。

居間へ向かうと、夫妻の賑やかな声がセイの耳に届いた。けれどそれは不安を全てぬぐい去ってくれるものでもなく、セイは僅かに開いた扉の隙間から聞こえる声に耳をそばだてた。

「ゴーラント將軍、クリステイナーさん」

リオウの声を、耳が捉える。相変わらず凜としていて、けれどどこか張り詰めた弓のような声だった。

「どうかしたの？リオウ」

「……お願いが、あるんです」

「お願い？」

「はい 私が居なくなつたあとも、セイとレイのことを、お願いしたいのです」

頭を殴られたような衝撃が襲う。

どくどくと胸が嫌な感じに波打つて、セイはリオウが何を言ったのか、しばらく理解できなかった。

その間にも、話が進んでいく。

「それは……あなたが異世界に帰ってから、ってことではないのね？」

「はい。一人で王都を出るつもりです」

「彼らを捨てるということ？」

「……はい」

(捨てる?)

その言葉がわんわんと耳なりのように頭に響く。リオウが　自分達を捨てる？

有り得ない未来ではなかった。

セイはリオウのことを、ずっと見てきた。だから当然、彼女が故郷に帰りたいと願っていることも、その願いのためなら、セイ達だつて捨てることも　知っていた。

(…でも、)

セイもレイも、彼女の願いならなんでも叶えてあげたいと思う。けれど

セイは扉を開き、中に飛び込んだ。驚いた顔でこちらを見るリオウを見つめ返す。

「どっぴいっ、ことですか」

けれど、離れたいという、その願いだけは叶えてあげられそうにはなかった。

「どういうことですか」

セイは同じ言葉を繰り返した。

その声も、隻眼も理央に近付いてくる足取りも 怒りに燃えてい
るように見えた。

いや、実際怒っているのだろう。

理央の座っている椅子が音を立てて軋む。彼らとも、ちゃんと向か
い合って話し合いをするはずだった。
でも、こんな形で知られるなんて。

すぐ目の前で立ち止まったセイを見上げて、理央は唇を引き結ぶ。

逃げてはいけない。それが、自分のためであり彼らのためでも
あるはずだから。

セイが、理央の両肩を掴んだ。

「どういうことですか！？ 帰る？ 捨てる？ どうして、 どうして
そんなことを！」

「セイ……っ」

肩に爪が食い込んで、理央は痛み顔に顔を歪めた。クリスティーナが
止めようとする声が聞こえたが、それもセイの耳には全く届いてい
ないようだった。

「僕達が、どれだけあなたを想っているか、 どうして分かってくれ
ないんです！」

「……っセイ、」

「嫌です！！ 離したりしない。貴女から、離れたりなんかしません！」

「まって、」

「もし僕達を捨てるというのなら、それなら ipp そのこと僕達を殺してくださいさ、」

言い終わるか終わらないかのところで、視界からセイが消える。代わりに現れたのは、頬をぼりぼりと掻くロドルだった。

「わりいな。あんまりにも馬鹿なこと言い出すもんだから、手が出ちまった」

「……いや、ありがとう」

肩にかかる圧力がなくなりホッと息を吐いた理央は、セイが吹っ飛ばされた方を見る。そこには壁際でうずくまるセイがいた。

ロドルのことだから一応手加減はしているだろうが、頭を打ってやしないかと心配になる。かといって近寄ることも出来ずにいると、ロドルが先にセイへと近付いた。

「おいセイ、惚れた女に対して『俺を殺せ』はねーだよ。ちつと頭冷やせ」

「すみ、ません……でも」

「でもじゃねえ。そんなにリオウから離れたくないんならまず足掻け。追いかける。俺はそうした」

「……………」

ロドルの説得の方向性がなんだかおかしい気がするが、セイの耳にはちゃんと届いてるようだ。

「まったく、いいこと言ったと思ったたらすぐに道を逸れるのよねえ」
「クリスティーナさん」

「リオウ、大丈夫？」

「……はい」

いつの間にか理央のそばにはクリスティーナが来ていた。理央の顔を覗きこみ肩を指差し訊ねてきたので、頷きを返す。

まだセイの指の感触は残っているが、特に痛みは感じなかった。

「ホント、男ってバカよね。ロドルはその中でも特大級だけど、セイもなかなかのバカだわ。」

やっぱり、近くにいと移るのかしら」

そのまま語り出したクリスティーナの瞳は、ロドルを映していた。

口では色々言っているけど、その穏やかな視線一つで彼女の気持ちは丸分かりだった。

その視線が、理央を振り向く。

「で、リオウ。あなたも割とバカだわ」

「え」

慈愛のこもった笑みを向けられながらそんなことを言われるとは思わず、理央は目を丸くした。

クリスティーナは細い指でそんな理央の顎を持ち上げ、微笑みながら続ける。

「あなたはあの子達を助けて、拾った。なのにあっさり捨てるなんて、残酷だと思わない？」

「それは……分かってます。でも」

「いいえ、分かってないわ。あなたはあの子達があなたに向ける想

いの強さを、全く理解してない。

知ってる？ レイがここに来てからどれだけの本を読み、知識を蓄えていたか」

「……………」

理央は思い出す。レイのいた部屋には、大量の本が置かれていた。理央が来たとき、驚いて読んでいた本を床に落としてしまったと苦く笑う姿が、頭をよぎる。

「セイは……………まあ、旅にでていた間のことはあなたの方が知っているだろうけど、こっちに来てからも暇があればロドルに師事して鍛錬に励んでた」

抱きしめられた時のがっしりとした腕の感触と、肩を掴まれた時に感じた強い力を思い出す。それは、日頃からきちんと鍛えてるもののみが手に入れられるものだ。

「それもこれも、全部リオウ　あなたのためよ」

「……………」

顎を持ち上げられているためクリスティーナの視線から逃れることもできずに、理央は唇を噛む。

彼らが理央のために努力を重ねていたことは、知っていた。けれど、気付かないふりをしていた。

気付いてしまえば、きつと捨てることが更に難しくなるだろうから。

「ねえ、リオウ。」

あなたの帰りたいって気持ちもよくわかるわ。あの子達のことを、全部受け入れるとも言わない。

でもね、あの子達とちゃんと向かい合ってあげて。

あなた達の間にある絆が、そう簡単に切れるものではないことだけは、知っておいて」

滲んだ視界の中で、クリスティーナは困ったように微笑む。

（ああ、この人達は本当に　　）

この家の人達は、いつだって理央の都合などお構いなしに心をこじ開けて、するりと中に入ってしまう。そして、いつのまにか馴染んでしまうのだ。

本当に　　夕チが悪い。

噛み締めた唇が、じんじんと痛んだ。

39 (後書き)

まあ簡単に切れない縁もあるよなってことで。なんかセイじゃなくてゴーラント夫妻の方が目立った。

『ついて行きます』

レイにもセイにしたのと同じことを話すと、彼は取り乱すことはなく、けれどはつきりと理央に宣言した。

『連れて行つてとは言いません。リオウ様がどこに行つても、僕は這つてでもあなたについていきます』

いつも穏やかな双眸に、強い意志をのせて。理央の意志をまるきり無視した返答に、理央は泣きたくなつた。

「リオウ様、本当にお荷物はこれだけで……？」

理央にあてがわれた城の一室には、まるで通夜のような湿っぽい空気が漂っていた。荷物などの準備をしてきている三人官女の目は赤かつたが、理央はあえて見ないフリをして笑つて頷く。

「はい。元々私が持つてたのつてそれぐらいですし。頂いた品々はこちらに置いていった方がいいでしょう？」

2・3着の普段着と、一振りの剣。ずっと旅をしていた理央が持つていたのは、それぐらいだった。どこへ行くのかもまだ定まっていない旅に出るのなら、身軽な方がいい。

(あと、これも)

理央は指に填めたままにしている指輪をそつとなぞる。

これをくれたグラエルは、理央より一足先に城を出て、自国に帰っていった。最後まで理央に『元の世界に帰るまでは絶対に指輪は捨てないで』と念押ししてきたので、また指切りをして。

結局、全て捨てることもできずに今日、理央は城を出る。

「……うっ、……り、リオウさまぁ〜」

ぐず、と鼻を嚼る音がして顔をあげると、女官のティルファが顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。

理央が城を出ると告げた日に枯れてしまったと思っていた涙だが、まだ残っていたらしい。美人が台無しだ。

他の2人も似たようなもので、しゃくり上げる声が理央の耳を打つ。だけど理央は、彼女達に何も言わなかった。彼女達まで、連れて行くわけにはいかない。

「ごめ、なさっ、……でも、離れたくないんですっ」

「どうしても、でて行かれるのですか……?」

「いやです、リオウさまぁ……」

「……ごめんね」

理央に言えるのは、それくらいのことだった。我ながら酷い奴だとは、思っけれど。

理央の態度に、女官達の涙が止まるわけもなく。理央がどうしようかと悩んだ時、ぱんぱんと湿っぽい空気を払うように手を叩く音が部屋に響く。

「あなた達、泣いている暇はありませんよ。これ以上リオウ様を困らせるつもりですか」

「女官長……………はい」

フィアンナの一言により、女官達は涙を引つ込めた。まだ時折鼻を鳴らしてはいたけれど、テキパキと荷造りをし、外に運びはじめる。さすがは大勢の女官の上に立つ人だ。理央がフィアンナのことを見ていると、彼女がこちらを向く。

「……………リオウ様、殿下がお待ちです」

「はい」

理央は立ち上がった。

こうやって城の中を歩くのも、これで最後かもしれない。そう思いながら理央は、前を歩くフィアンナの背中を見つめていた。

しゃんとのびた背筋からは全く老いを感じないけれど、きつちりと纏められた髪は白髪混じりで、彼女が生きてきた年数や、乗り越えてきた苦労を感じさせる。

「フィアンナさん」

「はい」

「今まで、本当にありがとうございました」

顔も見ずに言うのは失礼だとは思ったが、真正面から向き合っている言葉を言うのは避けたかった。

よくもらい泣きという言葉は聞くが、果たして涙腺が弱いのもうつるものなのだろうか。

「……なんですか、唐突に」

歩みを止めないまま、振り向きもせずになんか言ったフィアンナの声は、不機嫌そうだった。

「ずっと、言おうとは思ってたんですけど………なんだか照れてしまつて」

まるで親に改まってお礼を言う時のような、そんなこそばゆい気持ちになるのだ。

「だから、そのまま聞いてください」

丸い肩を見つめながら、理央はそのまま続けた。

「私、最初はフィアンナさんのこと口うるさい人だと思ってました」

「知ってます」

即答されて、理央は苦笑する。まあ、多分顔に出ていたのだろうと思う。

あの頃はフィアンナとその他の口さがない人達を一緒くたに見てい

た。

「でも、今は違いますよ」

その他の口さがない人達には、間違っていることを指摘せずに陰で笑う人や、指摘はしてくれても正解を教えずにただ理央の無知を責める人が多かった。

その中でフィアンナは、とても厳しかったけれど正解を教えてくれる数少ない人だった。

そして、服を汚したらいつも怒るのに、理央が血まみれになって帰ってきた時は、泣きそうな顔で近寄ってきた、唯一の人。

あの時理央は、本当はとても嬉しかったのだ。

「ハイグレードを出てからも、フィアンナさんの教えてくれたことがずっと、私を助けてくれました」

たとえば通貨の種類や、身分の高い人に対する態度の取り方。本当に、上げ連ねればキリがない。

その中でも一番役に立ったのは、やはりあの教えだろう。

どんな時でも背筋をのばし、真っ直ぐ前を向くこと。

そうするだけで不思議と力が湧いてきた。　　今も、そう。

「フィアンナさん。ありがとうございます」

清々しい気持ちで、理央が感謝を言葉にのせる。

すると、フィアンナの足がぴたりと止まった。こちらを振り返るかと思っただが、彼女は肩をふるわせるだけだった。

「……私をはじめて、あなたを見た時になんて思ったか、知っていますか」

「いえ……」

「野生の獣の、ようだと」

「そうですね」

そう聞いても、別段嫌な気持ちにはならなかった。本当のことだったからかもしれない。

「警戒心が強くて、いつも嫌なことや私達からは逃げ回って。それなのに殿下には簡単に騙されるし、突然血まみれになって帰ってきたと思えば、すぐにまた出て行って今度は帰ってこない」

「……すみません」

改めて並べ立てられると、本当に馬鹿だったなあと自分でも思う。自分のことで手一杯だったとはいえ、あの時もっと広い視野をもっていたのなら、何か変わっていたのかもしれないと。

フィアンナが顎を上げ、更に続ける。

「 思えば、此処はあなたにとって狭すぎたのでしょね。」

野生動物を捕まえて、無理やり檻に押し込めたようなものだったのだと、思います」

「 ……そうかもしれません」

「 今も、そうなのでしょう? 」

「 はい」

理央が頷く。

フィアンナさんや、女官達。城の中にも理央を大切に扱ってくれる人はいるけれど、やっぱりこの場所は窮屈だと感じる。

此処は、自分の居場所ではない。

「リオウ様」

「はい」

「ひとつだけ、願いがあります」

「……はい」

「元の世界に帰っても、私達のことを忘れないでください」

フィアンナの肩の震えが、大きくなる。

「憎く思われても構いません。女官達のことや、私のこと、すべて」

その後はぐすぐすという音に邪魔されてよく聞き取れなかった。理央には、それだけで十分だったけれど。

理央は震える肩に手をのばす。そして、フィアンナを後ろから抱きしめた。

「忘れることなんてできません」

夢にはなるかもしれない。でも、忘れることなど有り得ない。特に、この人のことは。

だって、理央の体にはもう彼女が教えてくれたことが染み付いてしまっているのだから。

「お待たせして申し訳ございません、殿下」

王子殿下が待つ部屋に通された理央は、まず謝罪した。途中フィアンサさんの会話で、思ったよりも時間を食ってしまった。

理央は顔をあげる。自分を見下ろす、人。

「堅苦しい挨拶はいい。こちらへ」

「はい」

しかめっ面のヴェリオスに促され、理央は用意されていた椅子に腰を下ろす。その間もヴェリオスのそのしかめっ面は崩れることはなかった。

「気に入らない」と視線で語ってくる彼に、やはり嫌われているのだなと再認識する。謁見の時からそうだったが、殿下はずっと物言いたげな視線を理央に向けていた。

理央が召喚された当初、偉そうなことは変わりなかったが、しかし理央を気遣う言葉をかけてくれた彼とは別人のようだ。

多分、こっちが本当のヴェリオスなのだと思う。理央を利用する必要がなくなったから、演技もなくなったのだろう。

彼とこうやって話す必要は、なかったかもしれない。

王から頼まれたのもあってこうしてこの場を設けてもらったが、全てが無意味に終わってしまいそんな予感を理央は抱いていた。

「城を、出ると聞いた」

理央の向かいの席にヴェリオスも腰を下ろし、まずそう切り出してきた。理央は顎を引き答える。

「はい」

「何故？」

「元の世界に帰るため、です」

「だからどうして、それが城を出ることに繋がる」

「このまま此処にいては、一生帰ることは叶わないだろうと言われたので」

それに理央自身、もう限界だった。衣食住を世話してもらっておいでこんなことを言うのは恩知らずかもしれないが、フィアンナの言う通り理央には此処は窮屈すぎる。

だが、あっさりと理央を放り出すと思っていたヴェリオスは意外にも食い下がってくる。

「言われた？ 誰に」

「……神です」

「神？」

まるでその存在を信じていないような声。理央も何を信じるかは個人の自由だと思うが、仮にも神の守護を受けるこの国の王子として、それはいかなものだろうか。

「……そもそも、何故帰るだなど…」

神のことは一旦置いておくことにしたらしいヴェリオスを、理央は黙って見やった。

貴方が、それを言うのか。

胸に冷ややかなものが広がる。もし彼が理央を利用しようとしなかったとしても、結局理央は帰ろうとしたかもしれない。しかしそれはもしもの話で、実際にヴェリオスは理央の引き金を引いたのだ。そして、今も彼は引き金を引こうとしている。理央の怒りの、引き金を。

「リオウ、何が不満なんだ」

何もかも。貴方に名を呼ばれることさえ本当は嫌。

「部屋も、食事も衣服も、何不自由なく整えたはずだ」

全部貴方が作ったわけでもないでしょうに。

「ここにいれば、何不自由のない生活を送れる。名声も、富も、思いのままなのに」

そんなものになんの価値があるというの？

「どうして、それらをわざわざ手放すような真似を……」

（ やめた ）

組み合わせた両手の上に額を載せたヴェリオスを冷めた目で見つめながら、理央は心の中でうねり荒れ狂う怒りを唐突に断ち切った。

急に、馬鹿馬鹿しく思えてきたのだ。

目の前で沈みこむヴェリオスも、彼に対し怒りを抱く自分も。元来怒りが長く持続しない性格であるのも関係しているのだろう。理央は溜め息を1つ吐いて、立ち上がった。

「リオウ？」

「何を言われても、私の意志は変わりません。それ以外のお話がないのでしたら、これで」

こうなるとここにいることすら馬鹿馬鹿しく思えてきて、理央は退室しようとして一礼をしてからヴェリオスに背を向けた。だが、

「待ってくれ！」

手首を掴まれ、理央は振り返る。切羽詰まったようなヴェリオスの顔が、そこにあつた。

「…なんですか？」

「……………行かないでくれ」

「何故？」

今度は理央が問い返す番だった。どうしてヴェリオスが自分を引き止めようとするのか知らないが、城を出るといふ理央の意志は絶対に変わらない。これ以上話しても時間の無駄だろう。

しかしヴェリオスは理央を離すことなく、むしろ抱き寄せ間近で理央の瞳を見つめながら言った。

「好き、なんだ」

理央はゆっくりと瞬きをした。

腰に回ったヴェリオスの腕が、拘束を強める。

「愛している。王妃として、俺のそばに」

言い募るヴェリオスの声が、途中で途絶える。どうしたのだろうか
疑問に思うが、その答えはすぐに見つかった。

目の前の蒼い瞳に映る自分は　笑っていたのだ。

ああ、なんて、歪な笑顔。

瞳の中の自分が、笑みを深めたように見えた。

「……リオウ？」

「今度は誰に命令されたんですか？」

「なにを、言って、」

「陛下はもう諦めてくれたと思ってたんですけど……ああ、神殿の命令ですか」

「何を言ってるんだ、俺は」

「また私を騙して、利用するつもりなんでしょう?!」

声を荒げ、理央はヴェリオスを睨め付けた。一瞬虚を突かれたように呆けた彼は、やがて理央の言葉の意味を理解したのか色を失う。

「知って、いたのか？」

どうやら理央が今まで気付いていないと、本気で思っていたらしい。

この人は、どこまで人を馬鹿にすれば気が済むのか。

理央はヴェリオスの胸板を押して、彼から距離をとる。

そして、真正面から彼の蒼い目を見て口を開く。

「もじいって、言ったでしょっ？」

青空のような瞳の中に浮かぶ自分は、やはり歪んだ笑みを浮かべていた。

41 (後書き)

理央さんがブチ切れました。大分病んでますね。

リオウが部屋を出て行った。恐らくもうじき城からも出ていくのだろう。

なのにヴェリオスは、どうしてここにいるのか。

(知っていた?)

床に座り込んで、ヴェリオスは額を片手で覆う。暑くもないのに、汗が滲んでいた。

ヴェリオスを突き放し、振り返ることもせず去っていったリオウは、ヴェリオスがしたことを知っていた。リオウを籠絡し、意のままに操ろうとしたことを。

(いつから?)

その答えは、彼女が教えてくれた。

『もういいって、言ったでしょう?』

彼女が血に塗れて城に帰ってきたあの日。あの日彼女が言った言葉は、いわばヴェリオスにつつけた最後通牒だったのだと、今更になって理解する。

そして、自分はそれを破り捨ててしまったのだと。

彼女に告げた想いは、真実だった。「王妃に」という言葉はグラエルへの対抗心から飛び出したものだったかもしれないが、それもいいと思えた。

今まで女を一時の快楽を得るためだけの存在としか考えていなかったヴェリオスが、はじめてずっと一緒に居たいと想った女性。大切にしたいと願った。決して傷つけようと思って想いを口にしたわけじゃない。

けれど彼女はヴェリオスの告白を聞いて　笑った。

妖艶さすら感じさせる壮絶な笑みは、ヴェリオスを震撼させ　そして、ヴェリオスは自分の犯した罪ようやく自覚したのだ。

『リオウにはリオウの世界が、家族があることを、どうしてみんな気付けないんだろうな？』

グラエルの言葉が、頭をよぎる。

その通りだった。リオウの世界に、自分はいない。もう入ることすら許されない。

先に手を離れたのは　いや、彼女が差し伸べてくれていた手を掴もうともしなかったのは、ヴェリオスの方なのだから。

どれだけ苦しもうが、どれだけ謝罪しようが、もうリオウはヴェリオスに無邪気に笑いかけてくることはない。目を向けてくることもない。信じることもない。

もう彼女は、自分に会いに来ることすらないのだろう。

彼女の触れた胸が、ずくずくと痛みを訴えていた。

42 (後書き)

一応これでハイグレードの人々とはお別れです。
あとは双子ですね。理央にとってのラスボスは彼らかもしれない。

43 (前書き)

本日2度目の更新です。

がたごと揺れる馬車の窓から顔を出して小さくなっていく王都を眺めてから、理央はようやく帽子を取った。念のため帽子の中に隠していた黒髪が、肩に落ちる。

多分もう、あそこを訪れることはないだろう。

安堵のような、寂しさのような気持ちを覚えながら、理央は馬車の中に顔を引っ込めた。

「リオウ様」

「ん？」

そのまま手持ち無沙汰に帽子をいじっていた理央に、向かい側に座ったセイの声がかかる。顔を上げると、一対と片方だけの瞳が自分を見つめていた。

「よかったですか。僕達を連れて行って」

「……ついてくっていったのはあなた達じゃない」

呆れ顔で双子を見るが、彼らは緊張の面もちを崩さない。這ってでもついていくと言っていた癖に、どうして理央が連れていかうとすると疑うような目で見つめてくるのか。

「だって、リオウ様あんなに僕達を離そうとしていたのに」

「離してもついてくるんでしょ？」

「はい」

さすが双子。声をぴったり揃えて即答されて、理央は眉間に皺を寄せた。

「……ストーリーカーされるくらいなら、いつそ一緒に連れてった方がいいと思っただけなんだけど……」

「すーとーかーってなんですか？」

「セイとレイは知らなくていいことだよ」

揃って首を傾げる2人に「それより」と理央は尋ねる。

「あなた達こそ、本当にいいのね？」

言っておくけど、楽な暮らしじゃないよ」

「リオウ様がいれば、それでいいです」

これも2人揃って即答。

自分の元の世界への執着もわりと凄まじいとは自覚していたが、双子の理央への執着はそれと張るものがある。

まあ、負ける気はないけれど。

「一応、これも言っておく。

私の意志は変わらない。元の世界に戻る時はあなた達が泣き叫ぶがすがりつこうが絶対帰る。

でも、できれば納得した上で別れたいと思ってるからあなた達を連れて行く 以上」

これはクリスティーナに諭され、セイとレイの言い分を聞いた上での結論だ。元々、彼らが理央を簡単に手放そうとしないのはなんと

なく予想していたから、長期戦も覚悟してはいた。

覚悟していたよりも、かなり長くなりそうな気もするが。

「分かった？」

「はい。その時は頑張つて泣き叫びますね」

「じゃあ僕はすがりつきます。力の限り」

「うん、全然分かってないね」

しかも役割分担まで考えている。

清々しいまで自分の意志を無視されて、理央は溜め息しかでなかつた。これは、本当に長期戦になりそうだ。

「でも、しばらくは一緒に居てくれるんですよ」

「……まあね。とりあえず、ゴーラント将軍が昔山籠もりしていた時に使ってたっていう山小屋に身を隠すとして……」

しかし一、二年したらまた移動になるだろうか。実際に暮らしてみなければ分からないこともあるからまだはつきりとは言えないが、勇者がどこにいるのか分からないようにしなければならぬ。

そのため、この馬車も目的地の途中までしか行かない。御者に理央達の行く先を知られるわけにはいかないからだ。

そしてそれは、隠遁場所を紹介したゴーラント将軍にしても同じことが言える。彼が誰かに勇者の居場所を漏らすとは思ってはいないが、念のためだ。

そんな、ごちゃごちゃと考え込む理央の頭など知らぬげに双子はここに言葉を交わし合う。

「なら、しばらくはリオウ様を二人占めできるね」

「うん。絶対に離れないようにしないとね」
くすくすと笑い合う姿はどこか妖しげで、交わされる会話は不穩の一言に尽きる。

本当に、この2人から離れることはできるのだろうか。
理央は溜め息の数をまた一つ増やした。

43 (後書き)

やっとハイグレードを脱出。

一応あと四話で本編は完結予定です。

「今日が貴様の命日だ！魔竜王グリストフェレス！」

小さな舞台の上で、剣を持ち甲冑を身につけた人形がびよこびよこと跳ねながら高らかに宣言する。

対峙するのは、おどろおどろしい赤色の竜……らしきぬいぐるみ。

「ふん、目障りな…死ぬのは勇者、お前だ！」

地を這うような声で竜が言うと、竜の大きな口から赤い布が飛び出した。勇者の飛び跳ねる動きが大きくなる。

「なんのこれしき！ふっ、やあっ、たあ！」

炎に見立てているらしい赤い布を勇者の人形がびよこびよここと避け、ついに魔竜へと近づく。

そして、大きくとびあがった。

「覚悟　　！！」

「グルオオオオオオっ！！」

勇者が魔竜の体にぶつかると、けたたましい雄叫びのあと、魔竜がぱたりと倒れた。

「やったぞ！魔竜を倒した！」

横になった魔竜の上に勇者が立ち、勝利を宣言したところで、舞台の幕がするすると下りる。

「こうして魔竜王グリストフェレスは倒され、世界にようやく平和が訪れたのでした　　めでたしめでたし」

「なあ、アレそんなに面白いか？」

広場の真ん中で行われていた人形劇を、少し離れたところから観ていたセイは声をかけられて視線をそちらに向ける。

声をかけてきたのはまだ十才にも満たないような少年で、猫のようにぱっちりとした瞳でこちらを見上げていた。

見知らぬ少年に話しかけられ、内心疑問に思いながらもセイは答える。

「面白い……というか、懐かしくてね。つい見入ってしまった」

先程上演された人形劇は、ところどころ脚色はあつたが紛れもなく『彼女』の物語だ。寝物語、人形劇、戯曲、書物……色んな形で語られる彼女の物語は今や世界中に溢れ、人々に勇者が存在したことを教える役目を担っていた。

セイの答えに満足したのかしていないのか、少年は「ふうん」とつまらなそうに声を漏らした。

「君は？」

「おれ？ おれはもう飽きたよ。だってみんな似たような話ばっかなんだもんよー」

「ふうん」

「大人はみんな勇者勇者って言うけどさー、正直おれら子供はよくわかんねーし」

「……君、今いくつ？」

「6才。もうすぐ7才」

少年の返答に、セイは成る程と頷く。

彼女が表舞台から姿を消した後に生まれた子。彼らのような子にとつて勇者は物語の中の存在でしかなく、彼女の活躍によって平和がもたらされたことは理解していても実感してはいないのだろう。

けれどきつと、これこそが彼女が望んだ変化なのだ。

目の前にいる少年の存在は、彼女にとつての希望

(そろそろ、なのか)

リオウが魔竜を倒してから、7年の時が経っていた。

+++++

街から山奥の家に帰ったセイは、小屋の裏手から聞こえるパカンスと小気味よい音が響くのを聞いて、裏手に回った。

「……リオウ様？」

そこにいたのはやはりリオウで、セイが声をかけるまでに持っていた斧で薪をまたひとつ、危なげのない動きで割った。

高い位置で結んだ髪を尻尾のように揺らして、彼女が振り返る。

「ああ、セイ。おかえり」

「何やってるんですか。そういう仕事は僕がやるって……」

薪割りをしていたらしいリオウに近づきそう言うと、リオウはにっこりと笑った。

「いいの。偶には体動かさないと。……それに、今日は気分がいいから」

その言葉に、朗らかな笑顔に、セイは嫌な予感を覚える。……確か
に、ここまで機嫌のいい彼女はここ最近見たことがなかった。

そして、リオウの上機嫌の理由など、一つしか思い浮かばない。

「今夜、帰れるって」

その瞬間、セイの周りから一切の音が消えた。

彼女がずっと待ち望み、自分がずっと来なければいいと願っていた
時が、とうとうやってくる。それも、今夜。

気付けばセイは、リオウを腕の中へ閉じこめていた。こんなことで

彼女を止められはしないと、知っていたけれど。

「レイには、このことは？」

「言ったよ。…諦めてくれたのかな」

「諦めることなんてありませんよ」

鼻をくすぐる甘い香り、柔らかな体。くすくすと笑う声。彼女を手放すなんてこと、有り得ない。

(……手放すものか)

リオウの願いがずっと変わらなかったように、セイとレイの願いもずっと変わらない。

何があっても、リオウの側に。

たったひとつの願いを胸に、セイは抱きしめる腕の力を強めた。

44 (後書き)

7年経つても「理央さん逃げて!」って感じ。でも双子にも変化があったのか、表面上はおとなしめです。なんか逆にこわい。

今夜、ずっと願い続けていたことが、ようやく叶う。

嬉しいはずだ。涙を流して、喜んでもいいくらい。

ようやく、本当にこの世界と別れることができる。

なのに　胸の内に蟠る、この気持ちは一体なんなのだろう？

いつもより少し豪華な夕飯を終え、簡素な木製のテーブルには今、小さな指輪がひとつ載っていた。

「これは、ノマライト王に」

蜜色の石がはめ込まれた指輪を、すっと人差し指で双子の方に押しやって、リオウは双子を見つめた。

「私が帰ったら、彼に会いに行つて。そしてこれを返して、私が無事帰れたことを伝えてほしい」

双子はやはりというべきか、複雑そうな表情で指輪を見つめていた。……まあ、こんな形見分けみたいなことされたら、当然の反応かもしれない。

けれどリオウは、途中で止めることはなかった。次に手に取ったのは、テーブルにたてかけていた剣。

リオウがこの世界に来てからずっと使っていた、言わば愛剣だ。

「こつちはゴーラント将軍に。彼らにも、同じことを伝えて」

聖剣というわけでも、特別な装飾がなされているわけでもない、一般兵士が使うものに比べれば少し上等な程度のなんの変哲もない剣だが、鞘には理央の名が刻まれており身分証の代わりになるはずだから、

「もし、向こうがいらないと云ったなら、これらはあなた達が持つていてほしい」

もし、とは言ったがグラエルもゴーラントも思い出に縋るタイプではない。おそらくそうするだろうと、理央はどこかで確信を持っていた。

本当は、双子に頼んだ言付けなどついでにしか過ぎない。これは、今日の前にいる彼らのこれからを考えてのことだった。

この世界での彼らの身分は、とても心許ない。たとえ元であっても奴隷であったことを知られば、彼らたちまち蔑みの対象にされるだろう。

しかし、指輪と剣を持つことで彼らの『勇者の従者』だった過去が証明されれば、そしてグラエルやゴーラント家の人々が理央が去ったあと彼らの助けになってくれれば、彼らがこれから歩くだろう道を固めるくらいは出来るだろう。

矛盾しているとは思う。彼らを捨てて去っていく身でありながら、彼らのその後を心配するなど。

けれど、彼らにはちゃんと自分の道を選んで欲しかった。理央にとっても彼らは　大切なひと、だから。

剣もテーブルの上に置いて、理央は双子をまっすぐに見つめた。

「あと、私が他に置いていったものは、好きにしていいいから」
「リオウ様」
「……なに？」

レイに唐突に名を呼ばれ、理央は思わず身構えた。今まで大人しく理央の話を聞いてくれてはいたが、それが自分を諦めてくれたわけでないことは、ずしりと重い空気で察していた。揃って眉間に皺を寄せた双子の内、セイが口を開く。

「ひとつだけ、聞きたいことがあります」
「……うん」

頷くだけなのに、妙に慎重になってしまふ自分がいた。だが、その次にレイが口にした『聞きたいこと』は、理央が予想だにしていな
いものだった。

「リオウ様は僕たちのこと、どう思っていますか」
「………え？」

「好きか嫌いかでいいんです。僕達と過ごした時間は、あなたにとつて無駄なものだったかどうかだけ、教えてください」
質問の意図を計りかねて逡巡する理央。だが注がれる真剣な視線に、嘘も誤魔化しも通用しないことを悟り、理央は正直な気持ちを感じた。

「……好き、だよ」

好きか嫌いかでいえば、好きに決まっている。彼らのその想いが枷になっていいることを分かっている、彼らを嫌いになることなど出来なかった。

このまま、3人でひっそりと暮らしていけたら　こうして隠遁生

活を送りはじめてから、そんな想像をしてしまったことがどれほどあったか。

(でも、そんなことは許されない)

理央はずっと、元いた世界に帰るための道を走ってきた。それなのに今更違う道を行くなど、許されない。

それは今までの理央を、否定するということだから。

(……でも、)

理央は躊躇いながらも、口を開いた。

「セイとレイと、三人で過ごした時間は決して無駄じゃなかった。私にとっても、大切な時間だった」

せめて、これだけは伝えても許されるだろうか。

「2人とも、大好き」

精一杯笑顔を作って告げると、双子も安堵したように微笑みかえしてくれた。

少しだけ、心の蟠りがほどけたような気がした。

「お話した時より、一年以上も長引いてしまいました」

理央が目を開くと、目の前にふよふよと浮かぶ発光物体。申し訳なさそうな声音に、理央は口端をあげた。

「いいよ、もう。今度こそ約束守ってくれたんでしょ」

「はい、それは勿論」

「……あなたと会うのも、これで最後なんだね」

「……………はい」

大分と間をあけてから、神が肯定する。

理央が元の世界に戻れば、もう理央に干渉することは難しくなるという話だ。彼はあくまであの世界の神であり、理央の世界には別の神がいるから。

「…ありがとう」

理央はそっと、丸い輪郭に手を沿わせた。こうして彼に触れるのは初めてで、手のひらに伝わってくる温かみに、理央は目を細める。

神というのはもっと、威厳があつて思わずひれ伏したくなるような力を持ったものだと思っていたのだけれど。

まあ、これくらいダメダメな方がいいのかもしれない。親近感が湧いて。

(約束破った時はホント、どうしてやろうかと思っただけ)

でも、彼が理央のために本気で怒ったり悲しんだりしていたことも知っている。この8年間、理央を元の世界に戻すために力を尽くしてくれていたことも。

ゆっくりと明滅を繰り返しながら、神が言う。

「こちらこそ、今までありがとうございました。……お元気で」

「うん。あなた達も、元気で」

その言葉を告げると同時に、意識が引き揚げられるのを理央は感じた。

「……、……」

目を開けると、理央は自分の部屋にいた。城の一室でも、セイとレイと長い時を過ごした山小屋でもなく、理央の世界の、理央の部屋。

「戻れた、の？」

理央は自身の手を顔の前まで持ってきて握ったり開いたりを繰り返した。

そこには、武器を扱うもの特有の固い皮も、タコもなく。どこにもいる、武器など握ったこともなさそうな女の手があった。

じわじわとこみ上げてくる実感を胸に、理央は今度はベッドを下り

て、灯りを付けてから姿見の前に立った。

「あ……」

肩に付かないくらいの短い髪、まだ少女らしい線の細い体。記憶にあるよりも幼い顔。

鏡の中にいたのは、間違いなく高校生の頃の　勇者として召喚される前の理央だった。

「……………」

理央は徐に、鏡に手を這わす。鏡の中の理央の手のひらと自分の手のひらがピタリと重なる。

夢じゃ、ない。

「戻って、これた」

そう呟いた理央の頬には、一筋、涙が流れていた。

46 (後書き)

次話が最終話です。

本日18時投稿予定。

……皆さんにちゃんと受け入れてもらえるか、今からびくびくして
ます；

理央は真っ白な空間にいた。

そして目の前にほわほわ浮かぶのは、真っ黒な球体。

(……………デジャブ?)

色彩を反転させただけの昔よく見た光景によく似た光景に、理央は首を傾げた。それと同時にある結論に達する。

これは夢だ、と。

「夢じゃありませんよー」

「うわっ」

と思つたら、目の前の球体に否定され、理央はびくりと後ずさつた。後ずさつた理央を見て いや、目があるのか知らないが 見て、球体が「あはははは」と棒読みっぽい笑い声を上げる。ちよつとイラつとした。

「ええと、夢じゃない……………?」

「はいー。というか、貴女以前にもこういう経験しましたよね?」

「……………まさか、あなたも」

「はいそのまさか。神です」

威厳も何もあつたもんじゃない自己紹介に理央は脱力する。神様つてみんなこんななのか。

「まあ神つてのは呼び名のひとつに過ぎませんから、そんなに落ち込まないでください」

「はあ」

「で、今回貴女を呼び出した訳なんですけどー」

理央は嫌な予感がしてがばりと顔を上げた。

「まさか、また召還、とか」

「違いますって」

即座に否定されて、途端に安堵が胸に広がる。『あれ』から何年か経って、今でも向こうの世界がどうなってるのか想うことはあれど、もう一度向こうに行く気などなかった。

「今回貴女を呼び出したのは……ええと、なんて言えばいいんですかねー。あんまりにも向こうさんがしつこくて通しちゃったんで、一応お話だけ通しておこうかと」

「話が全くわかりません」

「うん、僕も実はよく分かってません。……まあ、あれですね。とにかく すみません」

ぺこっと上半分を軽く曲げて謝っているらしい球体に、理央はなんのことかと尋ねた。だが、

「すみません、僕もまだ詳しく言えないんですー」。

あ、あともう一つ。アレ、返品不可なんでー」

ぐにゃぐにゃに黒と白が混ざり合って、球体の声が遠ざかっていく。それと同時に理央の意識も遠くなっていった、一旦途切れた。

++++

「変な夢見た……」

理央が朝目覚めて開口一番に呟いたのはそれだった。いや、夢じゃなかったのかもしれないけど。

夢の中の自称神（黒）は結局、なにが言いたかったのだろう。最後に返品不可とか言っていたが……よく分からない。布団の中でしばらくあの夢の意味を考えていたが、寝ぼけた頭で答えがでるはずもなく理央は起き上がった。

「おはよう……」

部屋を出て一階に下りると、リビングで母親が手際よくおにぎりを握っているところに遭遇した。

「ああ、おはよう理央」

「お父さんは？」

「とつくにお仕事よ。理央は今日は？」

「午後から授業……食べていい？」

多分これからお弁当箱に詰められるのだろう。皿の上に行儀良く並んだ三角おにぎりを指差し尋ねると、「二つまでなら」という母からの許しを得た。

立ったままだと怒られるので、椅子に座ってからおにぎりを口に運ぶ。

流石母の一番の得意料理。塩加減が絶妙だ。

「お母さんももうすぐ出るから、出かける時は戸締まり気を付けてね」

「うん」

「あ、あとお隣さん今日越してきたみたいよ。挨拶に来るかもしれないからよろしくね」

「んー」

母の言葉にうんうん頷きながら、理央は二個目に手を伸ばした。お隣さんか。感じのいい人達だといけれど。もぐもぐ口を動かしながら考えてると、母も理央と同じことを心配していた。

理央がこちらの世界に帰ってきてから、既に三年が経った。

神のおかげでこちらの世界での時間は、召還された時より一時間も経っていないことになっていたわけだが、精神的には8年のブランクを持つことになった理央は、久々の日常生活に内心苦労した。特に一番苦労したのは、勉強面だろうか。

戻ってすぐのテストなどは散々な結果で、元々成績はそこまで悪くなかった理央は、両親や教師達に心配されたのを今でも覚えている。

まあ、そのブランクを取り戻そうと猛勉強したお陰で今の大学に入れたとも思うので、悪いことばかりでもなかったけれど。

大学には面倒見の良い先輩がいて、友人もそこそこ。お陰様で理央も楽しくやれている。

「さて、私もそろそろ行かないと」

のんびり支度している間に大学に行かなければならない時間が迫っていた。

鏡の前で一応おかしいところがないかチェックしてから、理央は自

室を出た。

(そういえば……今日の夢、結局なんだったんだろう)

階段を下りながらふと思い出すのは、今朝見た夢のこと。

そもそもあれは夢だったのか、本当だったのか　理央がつくった夢にしては、妙に実感があつたため本当のような気はするのだが。のんびりとした話し方の自称神は、なんて言っていただろうか。何か、やたらと謝っていた気がするが。

(あと、返品不可とか、通しちゃったとかなんとか言っていたような)

朧気な記憶を手繰り寄せていた時だった。

ピンポーン

訪問を告げるインターホンの音が家の中に響く。ああ、そういえば新しいお隣さんが挨拶に来るかもと言っていたから、その人だろうか。

丁度出掛ける所だったこともあり、理央はそのまま玄関を開けた。

「はい、……」

そして、扉を開けたら何故か真っ暗になった。

(……えーと)

落ち着いて考えてみよう。

扉を開けようとしたら、まず手を引つ張られた。それで、顔面が何か堅いような柔らかいようなものにぶつかつた。視界を塞いでいるのはそれだろう。そして、腰に回つた大きな手の存在。

つまりはまあ、抱きしめられている。

お隣さんかと思つたら変質者だつたのか！

状況を理解した理央は、まずその変質者から離れようとさつきまで自分の目を塞いでいた逞しい胸板を押した。が、びくともしない。こんな時今はもう無いチート能力が恋しくなるが、今はそんなこと考えてる場合ではない。

力では叶わないことを悟つた理央は、相手を睨みつけ次いでに叫んでやろうとした。が、

「へ」

口から出たのは、脱力したような間抜けな声だつた。喉まで出かかつた悲鳴が、しおしおとお腹の方に戻つて、霧散してしまふ。

変質者（仮）は、声と同じく間抜けな表情を晒した理央を見下ろして、蕩けるような微笑を端正な顔に浮かべた。

じつと自分を見つめる瞳は、今時日本人でもなかなか見られないくらい純粹な黒で、どこか艶があつた。

年は、20代の後半から30代前半といったところだろう。スツと通つた鼻梁や形良い唇。繊細に整つた育ちのよさそうな顔に、程よく日に焼けた肌が親しみやすさを加味させている。

キツチリと着こなししたスーツと短めな黒髪は爽やかな営業マンといった雰囲気だ。

髪の色も瞳の色も、年齢だつて彼らと重なるところなどない。けれど、馬鹿みたいに男の顔を見上げていた理央の唇からこぼれたのは、彼らの名だった。

「セイ……？ レイ……？」

「はい」

落ち着いた涼やかな声が、耳を打つ。

じわりと、涙が溢れた。

「どう、して……」

「転生つて言うんでしたっけ。神様を脅、……………いえ、神様にお願いしました」

脅しつて言ったのを聞き逃さなかった理央は、やはり男が彼らなのだと妙に納得してしまった。

（あれ……でも）

理央は普通に彼らと言ってしまったているが、実際目の前にいるのは1人で。一体どうなっているのだろうと彼を見上げる。

心底嬉しそうな微笑は、やはり彼らと重なる。

首を傾げてそのことを問うと、こんな答えが返ってきた。

「どちらでも。僕はセイでもあり、レイでもあります。体が一つしか用意できなかったそうなので、こういう形になりました」

「えっと……つまり、2人入ってるってこと？」
「そういうことですね。まあ、元々2人で一つみたいなものから、特に不都合はありませんよ」

んな馬鹿な。

とは思ったが、やはり男からは2人の気配を感じるのでこの体に2人が同居してるのは間違いなさそうだった。
双子だからこそ出来た芸当……なのだろうか。

感覚では理解しているものの、論理的な部分がまだ混乱中な理央の体を、彼は隙間をなくすように抱きしめた。

「どこまでもついて行くって言ったでしょう？」

「……でも、異世界までついて来るなんて」

「理央様がいるところが、僕らの世界です」

だから、異世界なんて関係ありません。

きっぱりと言われて、理央はやっぱり泣きたくなった。いや、既に泣いていた。

(返品不可って　このこと?)

ぎゅっぎゅっ抱き締められながら、理央はようやく夢の中で黒い自称神が言っていたことを理解する。

よりもよって彼らを送りつけてくるなど　　本当に、厄介なことをしてくれる。

ああ、でも

「これからは、お隣さんとしてもよろしくお願いします」

甘ったるい声で囁く彼の言葉が、理央にトドメを刺す。

でも、一番厄介なのはきつと……彼の存在を喜んでいる、自分の心だ。

epilogue (後書き)

双子、まさかの「エへ、来ちゃったv」エンド。ストーリーカーは異世界の壁を超えたようです。

こんなエンディングで大丈夫かとも思ったのですが、色々書いている内に理央も簡単には異世界のことを　　というか、双子のことを切り離せなくなってしまったので、こういう形になりました。

双子がどういう道筋を辿って転生したのか、どうして今まで理央に会いに来なかったのかは双子視点の番外編で書きたいと思ってます。とりあえず理央の物語はここで終了、ということ。

ノリと勢いで書き始めた話ですが、多くの人に色んな形で反応をいただいたお陰で、ここまでたどり着くことができたのだと思います。本当に、ありがとうございます。そして、よろしければもう少しだけお付き合いください。

道筋・0 (前書き)

残酷な描写があります。一応読み飛ばしても大丈夫なようにして
ます。苦手な方はご注意を。

道筋・0

「じほっ……がはっ！」

ぼたぼたと口から吐き出されたモノが、絨毯をどす黒く染め上げる。まるで、体中を炎が暴れ回ってるようだ。内臓を焼き尽くすかのように、炎は容赦というものを知らない。

「ひっ、」

幼い悲鳴と、バタバタと遠ざかっていく足音を聞く。

杯を運んだのは、確か彼だった。では杯の毒も、彼が入れたのだろうか。

(どうでも、いいか……)

彼が自分達を殺そうとしたのか、それとも別の人間だったのかなどどうでもいい。誰であれ、自分達を殺してくれたことに感謝するのは変わらないのだから。

(やっと、だ)

長かった。ずっと、この日を待ち望んでいた。

これで、ようやく貴女の下へへ行ける。

血まみれの口元を、無理やり笑みの形に歪ませて、片割れの姿を探す。すると片割れも、床に転がりながらもこちらを見ていた。

「いっしょに」

がらがらとした声でそう言ったのは、どちらだったのか
分
か
ら
な
い。

だがそれも、どうでもいいことだ。

だって僕らは、一つになるのだから。

道筋・1

セイは夕食の載ったトレイを片手に、ドアをノックした。

「リオウ様。夕食を持ってきました」

返事は、ない。

それどころか物音一つ聞こえてこないことに心配が募るが、それ以上声をかけることもできずにセイは、いつも通り扉の前にトレイを置いた。

そして、踵を返す。

（もう、3日だ）

3日も、彼女の　　リオウの姿を見ていない。

「セイ」

大して広さもない家なので、居間にはすぐに着いた。深刻な顔で木製のテーブルに両肘をついていたレイが、待ちかねていたように顔を上げる。

「……………」

セイは、黙って首を横に振った。深い溜め息が、重なる。

「……………食べてくれるだけ、まだマシ、と思っべきなのか」

今のところ、量は少なくなっただけ、量はあるものの、リオウは食事を

とっつけている。

『食べなきゃ。死んだら帰れないもの』

もう 5年は前になるのか。昔、彼女がまだ勇者をやっていた頃に言っていた言葉を思い出す。

食べているということはつまり生きるといふことで。つまりはまだ、諦めてはいないということだ。

元の世界へ、帰ることを。

「 僕らは、間違っていたのかな」

ぼつりと、レイがそう言った。その声は余りにも冷静で、セイは思わず声を荒げる。

「でも！リオウ様と離れるなんて」

「出来ないよ、僕も」

「ならどうして間違ってるなんて言っただ！」

「離れないために、リオウ様を引き止めること」

細い指を組み合わせて思案するレイの瞳は、中空を睨みつけている。

「まずそこからして、僕達は間違っていたのかもしれない」

+ + + + +

その、次の日。セイは街に下りて教会を訪れていた。大して大きくはないが小さくもない街にある教会だ。ここに、果たして自分達の求める答えがあるのかは分からないけれど、ここくらいしか思いつかなかった。

「勇者の召喚について、ですか」

案の定、セイを応対してくれた神官は、自分の問いに目をぱちりと瞬いた。

旅人風の身なりの、しかも右目に眼帯をした自分はこの男にさぞ怪しくうつっていることだろうと思う。その上この質問。すげなく追い払われても仕方のないような気もした。

だが、セイとそう年も変わらないように見える若い神官は、まずセイにこう尋ねた。

「一体、どういった経緯でそのようなことを知りたいのでしょうか？」

それは予想の範囲内にあつた問いだったので、セイはあらかじめ用意していた答えを口にする。

「実は、旅をしながら勇者について調べているのです」

「それは、今代の？」

「ええ。勇者、リオウ・ハヤサカについて」

「そうですか……」

神官は、複雑そうに顔を歪めた。その表情が何を意味しているのか理解できず、セイは首を傾げた。

「何か？」

「いえ……まだ、あの方を追い求める人がいたのだな、と」

「あの方とは……」

「勇者様のことです。リオウ様……私はあの方とお話したことがあります」

「！」

思わぬことを聞き、セイの心が跳ねる。そして、目の前の神官を改めてまじまじと観察した。自分とそう変わらない年に見える彼は、神官らしいといえばらしい、柔和で人の良さそうな顔立ちをしていた。

どこにでもいそうな容姿だが、セイの記憶にはないとはつきりと言える。ということは、自分達と出会う前か、凱旋した時にリオウと接触があつたのだろうか。

まじまじと凝視された神官が、照れたように苦笑する。

「とは言っても、ほんの一言二言でしたが。」

もう5年以上前になりますか。あの方が召喚された時、私は王都の本神殿に見習いとして勤めておりました」

「……そうなのですか」

自分達とも、まだ出会っていない頃だ。自分の知らないリオウを知っているらしい男に、僅かながらに嫉妬心を覚える。

そんなセイの心中には勿論気付かない神官は、どこか遠くを見るような目で語った。

「これは、お恥ずかしい話なのですが……水を運ぶ最中に、転んでしまいました。その時偶然通りかかったあの方に、水がかかってしまったのです」

「ああ……」

知らず、その話を聞いてうめき声のようなものが漏れる。リオウと長い時間を共に過ごしたセイにも彼のしたような粗相は経験があるため、自分と重ね合わせてしまったのかもしれない。

だから、その時のリオウがどうしたのかも、目に浮かぶようだった。

「お優しい方でした。粗相をした私を咎めることもせず、気にするなどおっしゃられて」

「……でしょうね」

「は？」

「いえ……思いもよらず貴重なお話を聞けました。ありがとうございます」

素直な気持ちで礼を述べると、神官は恐縮したように首と手を横に振った。

「いえ、こちらの方こそ勝手に思い出話などはじめてしまってすみません。」

「……召喚の儀について、でしたよね」

「はい」

「私が知っているのは、召喚の儀は神にお伺いを立てるものであるということぐらいです」

「お伺い、ですか？」

「ええ、神官達はこちら側に扉を作ることは出来ませんが、その扉まで勇者様を導くことまではできません。」

ですので神にこちら側の扉まで勇者様を連れてきていただけるよう、

願うのです」

と、そこで神官は何故か憂うように眉をひそめた。

(神、か……)

セイもつられて難しい顔になる。こうして隠遁生活を送る前に聞いたりオウの話と、神官の話は一致していた。

つまり、神殿自体にはリオウを元いた世界に返す力は無いのだろう。そして、その力を持つ神も未だリオウを返すことはできない。

セイと、レイのせいで。

自分達の執着がリオウをこちらに留めているのだと知ったとき、セイは どうしようもなく、嬉しかった。多分それはレイも同じなはずだ。

だからいつか、自分達の想いが彼女の心もこちら側に留めることができるかもしれないと、考えていたけれど。

「 もう一つ、お聞きしたいのですが」

セイは、目の前の神官をまっすぐに見つめ、もう一つの問いを口にした。

「 神に会うには、どうすればよいのでしょうか? 」

道筋・1（後書き）

隠遁生活をはじめてから5年後の話。
リオさんが引きこもってます。

道筋・2

ずっと、考えていた。

こうして片割れと、リオウの3人で山奥にひっそりと隠れ住むようになっただけから、ずっと。

セイは、今頃教会に着いてるだろうか。居間で1人物思いに耽りながらレイは、細く息を吐いた。

今日もリオウは、自室から出てこない。

これで、4日目だ。

もし彼女が出てきた時を考えてこうして居間で待機しているのだが、今日も彼女の姿を見ることは叶いそうに無かった。

そのことが、レイの心を押し潰す。

自分達にとって、リオウは全てだ。彼女がいなくなればたちまち世界は色を無くし、音を失い、生きる意味を見いだせなくなるだろう。目も、耳も、手足も、心も、彼女を感じるために機能し、彼女がいるからこそ、色を感じる。

だから、なのだろう。

リオウが苦しんでいる今は、自分達も苦しいと感じた。その痛みは、甘くはあるけれど。

「……苦しめたいわけじゃない」

レイは、自分の頭の中を整理するように言葉を吐き出した。

そう、リオウを苦しめたいなんてことは、セイもレイも考えてはいない。

リオウと出会った頃の自分達ならば、ただひたすらにリオウから幸せを貪っていたのかもれない。リオウのことなど考えずに、リオウがなくなってしまうまで。

けれどこの5年の穏やかな時間が、自分達を変えた。

隠れなければならぬ身であるリオウは、殆どの時間をセイとレイと過ごしていた。まだどこか張り詰めた糸のようなどころはあつたが、ようやく勇者という責務から解放されたこともあつてか彼女は笑うことが多くなったように思う。

彼女が自分に笑いかけてくれたり、頼ってくれたりすることが自分達にとっては何よりも嬉しかった。リオウの幸せこそが、自分達の幸せなのだ、ようやく気付けたのに。

今の、自分達がリオウを苦しめているという状況が、双子を苦しめる。

一番良いのは、リオウの手を離してあげることだ。あれから5年もの時がたった今、人々の間で勇者は過去の人間になりつつある。きっとリオウを引き止める鎖は、自分達以外にはもうなくなっているだろうとレイは感じていた。

レイとセイが手を離しさえすれば、リオウは元の世界へと帰れるだろう。けれど、

「離れるなんて、できるはずがない」

2人にとって、リオウは命で、生きる意味そのものなのだ。それを手放した自分達の末路など、容易に想像できる。

「……………」

決して楽しくはない未来を想像して無言で頭を振ったレイの視界に、テーブルに載った水差しとコップが現れる。自分がいない間のことを考えて、セイが用意していつてくれたものだ。

片割れの気遣いを目にして、ささくれ立っていた気持ちが一瞬分かれ、和らぐ。

思案に沈んでいる間にそれなりの時間も経っていたようで、レイは喉の渴きを覚えてその水差しへと手を伸ばした。
だが

「あ」

手が滑って水差しが床に落ちる。ガラスの割れるけたたましい音が響いて、びちゃりと足元が濡れる感触。

少しの間、水たまりの中でただの破片になってしまった水差しを見ていたレイが、重くため息をついた。

「手の方は、弱ってないつもりなんだけど」

さて、どうするか。セイがそこまで予想していたかは不明だが、テーブルには布巾も置いてあったため、レイはとりあえず出来る範囲で片付けた方がいいかと身を屈めた。

そして、レイの指先が一番大きなガラス片へ触れようとした時だった。

だだだ、とこちらに近付いてくる足音。今ここにいるのはレイの他には、リオウだけで。

信じられない思いで顔を上げたレイの目に映ったのは、やはりリオウその人だった。

「……リオウ、様？」

レイは首を傾げる。

簡素なシャツとズボンという寝間着姿なりオウの目が、レイと床にぶちまけたガラス片を交互に見、次いで、戸惑ったように瞳を揺らした。

「音が、聞こえて……」

広くもなく、壁も薄い家だ。多分、ガラスの割れる音に何事かと心配して来てくれたのだらう。

レイはリオウに向かって微笑んだ。

「水差しが割れてしまったんです。すみません、驚かせてしまって」

「ううん……あの、怪我、してない？」

「はい」

気まずそうな表情のリオウだが、このまままた部屋に引っ込むことは出来なかったのだらう。レイに　いや、割れた水差しに近寄り、ガラスを拾い始める。

レイの足元に跪くような姿勢になってしまったりオウの旋毛を、レイはじつと見つめる。……見つめることしかできないのだ。

実に4日ぶりに見るリオウは幾分かやつれ、触れれば壊れてしまいそうな儚さがあった。実際、壊れる寸前なのかもしれない。

「……セイ、は？」

顔を上げぬまま、いつもより控えめな声でリオウが問ってくる。

「街へ買い出しに」

「そう……そういえば、そろそろだったね」

それきりリオウは口を閉じ、居間にはしばらく、かちやかちやとりオウの指が破片を拾い上げていく音だけが響いた。

「……ごめんね」

そして、リオウが再び口を開いたのは、大きな破片を粗方拾い上げたあとだった。

相変わらず顔を上げないまま、震える声で彼女は言った。

「家のことも何もかも、セイとレイに任せきりになっちゃってるよね」

「…そんなこと、いいんです」

リオウのそばに居られるのなら、自分達は何だってする。それがリオウのためになることなら、尚更だ。

しかし、リオウは首を横に振る。

「分かっているの、閉じこもっていても何の解決にもならないって。

でも レイと、セイの顔を見るのが辛くて」

「分かっています。僕らが、ずっとリオウ様を引き留めてるから」

「違う！！」

さっきよりも強く頭を振って、リオウは声を荒げた。レイは、思いも寄らぬ強い否定に、目を丸くした。リオウは幼子のように頭を振りながら二度、三度と繰り返した 「違う」と。

「違うの　閉じこもっていたのは、自分が、怖くて」

「リオウ様が？」

「考えてたの、ずっと。最初聞いてた5年が経って、なのに、帰れなくて。帰れないのは、レイと、セイの……せいじゃ、ないかなって、それで、それで」

「リオウ様、」

声にしゃくりあげるようなものが混じる。レイが思わず手をのばそうとした時、リオウが顔をあげた。

泣き濡れて真っ赤になった瞳が、レイをうつす。

「あなた達が、し、死ねば帰れるって思っ、て。思っ、て、しまっ、て」

ハッと息を呑む。

レイは、リオウが一刻も早く帰りたくて、自分達から離れたくて自室に籠もってしまったのだと思っていた。一向に離れようとしてない自分達を嫌悪しているのだと。けれど、その考えはリオウから否定された。

「怖かった。レイとセイのことを殺すなんて、一瞬でも考えてた、自分が！」

あなた達に会ったら、本当に……ころ、殺して、しまっ、て、ないかっ、て」

「……リオウ様」

レイは上体を屈め、途切れ途切れに心情を吐露するリオウの頭を抱えるように抱きしめた。びくりとリオウの体が揺れたが、レイは構わず彼女を抱きしめて耳元で柔らかく囁いた。

「大丈夫です、リオウ様はそんなことしません」

やさしい人だ。本来なら軽く扱われても何もおかしくない自分達の命を、こんなにも大切に思ってくれてる。

……本音を言えば、レイはリオウに殺されるのなら、それも良いと考えている。

彼女の綺麗な手が、自分の血で汚れる。それは余りにも甘美な想像だ。

(でも、それはだめだ)

彼女が大切にしてくれている命を、彼女の手で散らせるわけにはいかない。

何より、彼女がレイとセイを手にかけることは絶対にはないだろう。

”死”という言葉すら簡単に口に出来ないのが、良い証拠だ。

「大丈夫です。リオウ様は僕達を殺さないし、僕達も死にません」

幼子にするようにリオウの頭を撫でてやりながら、レイは目を閉じた。

双子の願いは変わらない。けれど、リオウを苦しめたくはない。

だから、

(引き留めるのではなく、追いかける)

たとえば、それが異世界だろうと。

道筋・2 (後書き)

レイ視点ってそういえば書くの初めてですね。とりあえず頭がリオ
ウのことで一杯なのは、二人とも変わりません。

道筋・3

家に帰ったセイは、扉を開けて驚いた。

「お帰り、セイ」

ぎこちなくだけれど笑うリオウが、そこにいたのだから。

「リオウさま……？」

「……ごめんね、急に引きこもったりして」

ぼかん、と口を開けて自分を見つめるセイに対し、リオウはすまなさそうに表情を曇らせてそう言った。

その目は赤く、瞼も少しはれぼったいように見えてセイは思わず自分の片割れに視線をやる。

レイがリオウに何かしたとは勿論思っていない。ただ、久し振りに見たりオウの姿はどこか不安定で、彼女に理由を問い詰めることも出来なかったからだ。

セイの視線を受けて、レイの唇が声を出さずに動く。

（ 「後で」、か ）

……つまり、今は聞くなということだろう。片割れの意思を難なく読み取ったセイは、夕食をとって自室に戻るまで、いつも通りに振る舞うことにした。

「僕達を、殺すかもしれないって？」

そして、自室に戻ったセイはレイからようやく自分がない間に起きたことを聞いた。

聞いて 再び驚いた。

リオウは、自分がセイとレイを殺すのではないかと怯えて部屋に閉じこもっていたのだそうだ。

目を見開き、驚きを露わにするセイにレイは微笑んだ。

「……リオウ様って、本当に予想外のこと考えるよね」

愛おしいと言わんばかりの微笑を見て、セイもじわじわと喜びが胸に広がるのを感じた。

「……どうしよう、嬉しい」

リオウが、自分達のことですこまで悩んでくれたことも、セイとレイを拒絶したわけではなかったことも たまらなく、嬉しかった。

リオウは、ただ単に自分が人を殺すかもしれないことに怯えを抱いたのかもしれない。あの人は誰よりも自分の力を恐れていたから。けれど、その対象に双子を選んだのはリオウが自分達の想いを知ってくれた証でもある。知った上で、それでも尚切り捨てられない存在なのだ、彼女の行動が教えてくれた。片目だけの視界がじわりと滲む。

「やっぱり、離れちゃダメだ」

離れられない、ではなく、離れてはいけない。そう思った。

レイの言っていた「間違い」の意味を、セイはこの時ようやく理解できた気がした。

彼女に自覚はないだろうがリオウの心には、既に双子の居場所があるのだ。決して大きくはないかもしれないけれど、失くせばリオウの心に穴が開くことには変わらない。

リオウを哀しませたくないからこそ、檻に困うのではなく彼女を追いかける。どこまでも　たとえ、どんな障害が道を塞ごうとも。

「セイは、どうだった？」

自分と同様に歓喜に瞳を潤ませたレイが尋ねてきたので、セイも教会でのことを話した。

リオウと会ったことがあるという、神官のことも。

「……縁、だね」

神官のことを聞いたレイが、ぼつりと呟く。

縁とは、リオウの故郷にある言葉だそうだ。人と人は細い糸のようなもので繋がっている。それを縁と言うのだとリオウが教えてくれた。セイとレイが彼女と出逢えたのも縁があったからで、何かしらの意味があるだろうと。

今日、あの神官と出会えたことも　縁、なのだろうか？

「その神官さんから、何か聞いた？」

「召喚は、神にしかできないって」

「……じゃあ、その神に会うにはどうすればいいのかな」

自分が神官にしたのと同じ問いを口にしたレイに、セイは苦笑を零した。他人から見れば自分達は、馬鹿馬鹿しい話をしているように見えるかもしれない。だが、2人共本気だ。

そもそも双子からしてみれば、願いを叶えるための障害が神だったという、それだけなのだから。

『神というのは、真に救いを求めるものの前に現れます』

セイの問いに、神官はそう答えた。実に神官らしい答えだと思った。

(救い……)

果たして自分達が求めているのが『救い』なのかは分からない。けれど、願いの強さでなら誰にも負けないだろう。そんな自信はあった。

「……絶対に、切らない」

彼女とセイとレイの間にある、縁だけは。

……双子の前に神が現れたのは、その夜のことだった。

道筋・4

気付けば、真つ暗な闇の中に二人はいた。

「ここは？」

どちらかが呟く。すると、目の前にぼんやりとした光が生まれた。

「夢の世界、といったところでしょうか。」

『、』

『……いえ、セイとレイ』

黒の中に浮かぶ真白ましろが喋る。

『』と『』。それは、両親から貰った名だった。

長い時の中で既に忘れ去っていた、二人の本当の名。

しかし真白が名を口にした時、雑音が邪魔をしてどんな名前かは分からなかった。辛うじて、それが自分達の名であったと思ひ出す程度。

多分それは、自分達がもう『

』と『

』ではなく、

『セイ』と『レイ』であるということなのだろう。

「あなたは？」

またどちらかが呟く。今度は目の前の真白に、はっきりと問うように。

真白が答える。

「あなた方が神と呼ぶモノ。」

理央を、召喚したモノです」

「！」

息を呑んだのは、きっと二人ともだったのだろう。

そして、次の瞬間には2人共叫んでいた。

「願いがあります！」

這い蹲るようにして目の前の神に懇願する。

これがただの夢であるかもしれないとは、考えなかった。夢でないという確信もない。

ただ、気付いたら叫んでいた。

「神は、異世界から人を連れてこれる唯一のものだと聞きました！」

「もしそれが本当なら」

「僕達を、異世界へ連れて行ってください！」

「リオウ様のそばに、いたいんです！」

あの人のそばに。

ずっと、二人の願いはそれだけだった。単純に、純粹に 二人の体は、魂は、あの人を求めている。

それだけは、絶対に変わらない。変えられない、願い。

「……っお願い、します」

その願いを叶えるためなら、何でもする。たとえ周りにみっともないと言われようと、馬鹿にされようと構わない。

叫んで、叫び続けて、二人の声が枯れた頃 神の音が響いた。

「人には、それぞれ道筋というものがあります。いつ産まれ、誰と出逢い、何を成し遂げ、そしていつ死ぬのか。それらはすべてさだめられたことで、それを变えることは神であるわたしにすら難しい。ですが、それを容易に変えてしまう存在があります。それが、あなた方が勇者と呼ぶ存在」

リオウ　誰かが、名を呟いた。

闇の中に、またじわりと光が生まれる。今度は細い糸のようで、くねくねと動いたそれはやがて、文字の羅列になる。

「セイ、レイ。あなた方の道筋も、理央との出逢いによって大きく変わった」

羅列の一番上には、セイとレイの名が。その下にはずらりと生まれてからの出来事が書かれていた。もう顔すら覚えてない両親から「
『と』
』として産まれたことも、その両親が殺され売られたことも、6年前までに二人の身に起きたことがすべて書かれていた。

「これは、あなた方が生まれた時に定められた道筋」

いわば、二人の年表だろう。そしてその年表の最後に書かれたのは6年前、リオウと出会った日に書かれていたのは『死』の文字。

「本来ならば、あなた方は理央と出逢ったあの日に死ぬはずでした。彼女と出逢うこともなく、ただの奴隷として」

けれど、と神が言ったのと同時に、年表の最後の部分がまったくねくと動いて、文字が増殖する。

「これが　今のあなた方の道筋です」

6年前で終わっていた二人の年表が、現在を越え、未来へと続いていく。二人は、文字で描かれていく自らの軌跡を追い　そして、目を疑う。

「セイ、レイ。

あなた方は、勇者が故郷へ帰還を果たした後、勇者の意志を継ぐものとして人々を導く。　　奴隷解放は、その一歩」

「違います」

二人は同時に否定した。闇に浮かぶ文字は、セイとレイが後世に名を残す英雄となる道を示していた。まるで物語のように華々しく、感動的な道筋。けれど、

「違う。こんなのは、僕らの人生じゃない」

どちらかが言った。もう片方も、あとに続く。

「リオウ様がいなくなった時点で、僕らに生きる意味などない」

「世界を救う意味もない。もし、それでも僕らに未来があるとすれば　　」

そう、もし彼女がいなくなったあとも二人の心臓が動いていたならば、

「世界を、壊します」

世界を破滅させ、そしていつか自らをも滅ぼす。
神の言うとおり未来が定められているのなら、それがきつと自分達の道筋だと思った。

「……やはり、道は違えませんか」

やがて神が、吐息のような声を漏らす。

そして、闇に浮かぶ文字がまた踊り 次を描いたのは、二人が思い描いた通りの道筋だった。

「これが、あなた方が歩む本当の道です」

「先程のは」

「あれは、偽りです。わたしも世界を崩壊させるわけにはいきませんから」

だから、英雄への道を提示することで、破滅を避けようとしたのか。それでも二人の意志が変わることはない、分かっているながら。

「セイ、レイ」

スウツと文字が闇に解け、神が二人の名を呼んだ。

闇が、濃くなる。

「願いを叶えるには、相応の覚悟と代償が必要です。あなた方に、

それがありますか？」

「あります」

二人同時に即答する。

この願いが、簡単に叶えられるものではないことはセイもレイも理解しているつもりだ。覚悟も代償も、差し出せるものならば何だって差し出そう。

迷いのない二対の視線を受けた神は、しばし沈黙した。そして、

「……分かりました。では、新たな道を」

神がそう言うのと同時に、闇の中にまた文字が浮かび上がる。

それは、先程神が『偽り』と言ったはずの、英雄への道だった。

「これは、偽りの道筋。ですが、あなた方がこの通りに生きれば真実にもなる」

「それはどういう」

「あなた方にはこの道筋通りに生き、一度死んでいただきます」

神の言葉を理解するのに、数秒の間を要した。

その者が奴隷だろうが英雄だろうが、変わらず最後に待つのは死だ。だから今描かれている年表の最後にも、当然二人の没年が記されていた。

英雄となった二人を疎ましく思う者に暗殺されるという、末路が。

「転生 この言葉の意味は分かりますね？」

「はい。生まれ変わることで、ですよ」

「その通りです。」

セイ、レイ。あなた方には一度死した後、理央の故郷である異

世界に転生してもらいます」

「だから、僕らに死ねと」

二人は、確認するように問うた。

神は、明滅しながら「ええ」と相槌を打った。

「しかし、ただ死ねばいいわけではありません。この道筋を生きた上で死ぬことも、代償の一つです」

「分かりました。やります」

頷いた二人に、表情も何も見えないというのに神が驚く気配が伝わった。

「……そのように簡単に了承してよいのですか」

「はい」

「先程述べたのは、代償の一つに過ぎません。あなた方は何もかもを失うかもしれない」

「リオウ様さえいてくれるのならば、他には何も要りません」

「自己を無くすことだって有り得る」

「構いません」

ずっと自分と、片割れしかない世界だった。色も、音もない世界。

そこへ、鮮やかな彩りを与えてくれたのが、リオウで。きっと何回生まれ変わるうが、記憶を無くそうが自分達は彼女を求めるだろう。

「だから、お願いします。何年かかってもいい。

彼女の、そばに」

そこに、一切の迷いはなかった。

道筋・4（後書き）

リオさんはいつの間にか二人の破壊神を生み出していたようです。脅したっていうか、存在自体が脅し。

道筋・5

ふわり、と柔らかな何か頬をくすぐり、レイは身じろいで薄目を開けた。

「……あ、起こしちゃった？」

「りおう、さま？」

いつもより若干抑え目な、いとしい人の声を耳が捉える。

「少し肌寒いから、何か掛けた方がいいかと思っただけ……」

広げた膝掛けを自分に掛けようとしてくれていたらしいリオウの手に触れて握り締める。

「どうやら、居間でぼんやりとしている内に寝てしまったようだ。」

「すみません……」

目を伏せて謝ると、リオウは微笑んで首を横に振った。

「ううん。私もうたた寝しちゃってたから気にしないで」

「……なにか、ありましたか？」

「え？」

リオウが目を瞬いた。それも当然だろう。レイ自身すら、己の唇から滑り出た問いに驚いた。

よく分からないが、彼女が笑うのを見て違和感が胸をよぎったのだ。何がおかしいのか、なんて分からないけれど。

けれど　なにかがおかしいことはわかる。

問われたリオウは、一瞬瞳を揺らした。
だがすぐに真顔に戻り、レイを真っ直ぐに見つめてくる。

柔らかそうな唇が紡いだのは、レイが待ち望んでいた、けれど聞き
たくなかった言葉。

「帰れることになった、って」

「……」

一方的に掴んでいたリオウの手を握り締める力が強くなる。けれど
彼女は、振り解くことも痛みに関をしかめることもなくただまっす
ぐにレイを見つめていた。

リオウが帰る場所と言えば、一つしか無い。

(今日、だったのか)

神と約束を交わした時点で、彼女との別れの日はそう遠くない未来
に訪れるだろうと予期していた。

けれど　最初に見せた一瞬以降、微塵も揺らがない凜とした瞳に、
レイの心がぐらつく。

「そう、ですか」

リオウの瞳の中のレイは、泣き笑いのような情けない顔をしていた。

+++++

帰れることになったリオウの行動は、迅速で迷いがなかった。もしかしたら、ずっとこの時のことを考えていたのかと思うほどに。

「これは、ノマライト王に」

いつもより少し豪華な夕食の後、テーブルに置かれたのは彼女が左手の中指にずっと填めていた指輪だった。

「私が帰ったら、彼に会いに行つて。そしてこれを返して、私が無事帰れたことを伝えてほしい」

そう言われては、2人は複雑な視線を指輪へと注ぐしかない。

件のノマライト王に実際会ったことはない。だが、こうして気にかけるということは、リオウにとってその人はそれなりに特別な位置にいるのだろう。

そして、向こうがリオウをどう想っていたかなんてことは、この指輪を見れば明らかで。

(でも、その人もリオウ様を引き止めることはできなかった)

腹の奥でどろどろと渦巻く、決して綺麗とは言えない感情を、そう考えることでレイは抑えこんだ。

彼と彼女の間にどんな気持ちが、やりとりがあつたのかは知らない。けれどこの7年間、リオウは隣国の王ではなく自分達と共にいてくれたのだから、と。

「こっちはゴーラント将軍に。彼らにも、同じことを伝えて」

2人が靄とした気持ちを抱えている間に、リオウはもう一つの品をテーブルに置いた。

一振りの剣が、指輪の隣に並ぶ。

「……もし、向こうがいらなと言ったなら、これらはあなた達が持っていてほしい」

多分、返事は期待していないのだろう。

はつきりとした決意を瞳に宿し話すリオウを前に、レイの心はぐらぐらと不安定なままで

「あと、私が他に置いていったものは、好きにしていいいから
「リオウ様」

気付けばレイは、彼女の話を遮っていた。

「……なに？」

空気が張り詰めるのが分かり、レイは少しだけ後悔した。

けれど、これ以上彼女の話聞いていたくなかったのだ。リオウがまっすぐであればあるほど、自分達の選択は本当に正しかったのか彼女にとってレイとセイは、本当に必要なかと問われているように。

遮ったはいいものの、後に続く言葉を持たないレイは唇を引き結ぶ。神と交わした約定のことを、リオウに話すわけにはいかない。それでも、聞きたいことがあった。

それをどう言葉にすればいいのかわからずに眉間に皺を寄せていると、隣に座る片割れが言葉を引き継いだ。

「ひとつだけ、聞きたいことがあります」

「……………うん」

レイからセイへと視線を滑らせ、リオウは神妙な顔で頷いた。

レイも片割れを見る。ここ数年で益々凛々しさを増したように思う片割れの横顔は、真っ直ぐにリオウを見つめ返していた。

そして、その左手はレイの右手と重なっている。

(……………ああ、そうだ)

レイは、自分がひとりでなかったことを思い出す。外見に多少の差異はあっても、自分達は2人でひとつで、ひとつで2人で。

心は、ひとつなのだ。

レイはリオウを真っ直ぐに見つめ、口を開いた。

「リオウ様は僕たちのこと、どう思っていますか」

「……………え？」

口にしてしまえば、レイが聞きたかったことは本当に単純なものだった。

「好きか嫌いかわからないんです。僕達と過ごした時間は、あなたにとって無駄なものだったかどうかだけ、教えてください」

たとえば片割れのことならば、レイは言葉を介さずとも大抵の

ことは理解する。だが、リオウは自分達とは別個の存在で、だからこそ惹かれるし理解したいと苦しむのだろう。

だから、言葉が欲しかった。

居間に、しばしの沈黙が落ちる。

2人はその間、目をそらすことなくリオウを見つめていた。一挙一動、どんな些細な機微も見逃さぬように。

やがて、迷うように目を伏せていたリオウが、ぽつり、ぽつりと、言葉を紡ぎ出した。

「……好き、だよ」

「セイとレイと、三人で過ごした時間は決して無駄じゃなかった。私にとっても、大切な時間だった」

「……2人とも、大好き」

(……ああ)

潤いを帯びて、煌めきを増した黒い瞳が細められる。その笑顔は、

レイが見てきた中で一番美しかった。

（大丈夫）

ぐらぐらと揺れていた心が、リオウの言葉ひとつで芯を取り戻すのが分かる。

大丈夫。この別れを、永遠の別れになどしない。必ず、やり遂げてみせる。

決意を胸に秘め、レイは微笑を浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7237w/>

エピローグ

2011年11月10日09時33分発行